

# 桜島

梅崎春生

附やぶちゃん注

「やぶちゃん注」本作は昭和二二（一九四六）年九月刊の季刊雑誌『素直』創刊号に掲載され、後に昭和二三（一九四七）年三月大地書房から刊行された単行本作品集「桜島」に所収された。但し、以下に示す底本全集別巻の年譜によれば、本篇は敗戦後数ヶ月以内には既に完成しており、それを昭和二〇（一九四五）年十二月に雑誌『新生活』に持ち込んでいる。それが如何なる事情かは不明ながら掲載が滞り、翌年に小説家・文芸評論家であった浅見淵（明治三二（一八九九）年～昭和四八（一九七三）年）の紹介によって『素直』に持ち込まれたことが判る。

底本は昭和五九（一九八四）年沖積舎刊「梅崎春生全集 第一巻」を用いた。

本テキストでは本篇の行空けの行われている箇所を一単位とし、私のオリジナル注はその単位毎に原文の後に一行空けて附すこととした。私の注の後は三行空けとした。因みに、本篇は全十パートに分かれている。ルビの拗音化は私の判断で行った。

再PDF化に際し、本文の校訂を再度行ったが、或いは、まだ誤植があるかも知れぬ。お気づきになった際には、御指摘戴けると、恩幸、これに過ぎたるはない。

因みに、私は本電子化注と同時に、本作の世界が驚くべき円環を閉じるように見えるところの遺作、「幻化」の電子化附オリジナル注を[ブログ・カテゴリ『梅崎春生「幻化」附やぶちゃん注』](#)で手掛け、[同PDF縦書決定版](#)も公開してあるので、そちらもお読み戴けると嬉しい。

●二〇一六年 一月 一日〇：〇三 電子化注始動

●二〇一六年 一月 六日 [ブログ版完結](#)

●二〇一六年 一月二十三日 本PDF縦書版公開

●二〇二〇年十一月二十二日 本PDF縦書決定版公開 [藪野直史](#)】

[やぶちゃんの電子テキスト集](#)：小説・戯曲・評論・随筆・短歌篇へ戻る

# 桜島

七月初、坊津ぼうづにいた。往昔、遣唐使が船出をしたところである。その小さな美しい港を見下ろす岬で、基地隊の基地通信に当たっていた。私は暗号員であった。毎日、崖がけを滑り降りて魚釣りに行ったり、山に楊梅やまももを取りに行ったり、朝夕岬を通る坊津郵便局の女事務員と仲良くなったり、よそめにはのんびりと日を過した。電報は少なかつた。日に一通か二通。無い時もあった。此のような生活をしながらも、目に見えぬ何物かが次第に輪せまを狭めて身体を緊しめつけて来るのを、私は痛いほど感じ始めた。歯ぎしりするような気持で、私は連日遊ぼび呆ほうけた。日に一度は必ず、米軍の飛行機が鋭い音を響かせながら、岬の上を翔かった。ふり仰ぐと、初夏の光を吸った翼のいろが、ナイフのように不気味に光った。

或る朝、一通の電報が来た。

海軍暗号書、「勇」を取り出して、私が翻訳した。

「村上兵曹桜島二転勤二付至急谷山本部二帰投サレ度」タシ

午後、交替の田上兵長が到着した。

その夜、私はアルコールに水を割って、ひとり痛飲した。泥酔して岬の道を踏んだ時、よろめいて一間ほど崖を滑り落ちた。瞼まぶたが切れて、血が随分流れた。窪地くぼちに仰向きになつたまま、凄まじい程冴さえた月のいろを見た。酔って断きれ断きれになつた意識の中で、私は必死になつて荒涼たる何物かを追っかけていた。

翌朝、医務室で瞼を簡単に治療して貰い、そして岬を出発した。徒歩で枕崎に出るのである。生涯再びは見る事もない此の坊津の風景は、おそろしいほど新鮮であつた。私は何度も振り返り振り返り、その度の展望たひに目を見張つた。何故なぜ此のように風景が活いき活いきしているのであろう。胸を嚙むにがいものを感じながら、私は思った。此の基地でいろいろ考え、また感じたことのうちで、此の思いだけが真実ではないのか。たといその中に、訣別けつべつという感傷が私の肉眼を多分に歪ゆがめていたとしても――

「やぶちゃん注…本篇は一貫して一人称で語られる。本篇は一貫して一人称で語られる。冒頭の電文「村上兵曹桜島ニ転勤ニ付至急谷山本部ニ帰投サレ度」で姓が示されるが、名は最後まで示されない。以下に注するように、作者梅崎春生も敗戦時、通信科二等兵曹であった。「七月初め」昭和二〇（一九四五）年七月。ここで梅崎春生（これは本名である）自身の事蹟を確認してみる（主に底本全集「別巻」の年譜に拠った）。梅崎春生（大正四（一九一五）年～昭和四〇（一九六五）年）は福岡県福岡市實子町（現在の中央区大手門實子地区）に陸軍士官学校十六期出身の陸軍少佐梅崎建吉郎の男ばかり六人兄弟の次男として生まれ、昭和二（一九二七）年に旧制修猷館中学校（現在の県立修猷館高等学校）に入学、昭和六年には福岡高校を受験するも不合格で（この年、父建吉郎は五十歳で陸軍を退職して麻雀荘を営んだ）、翌七年四月に熊本第五高等学校文化甲類に入ると詩作に耽った（三年次進級時に落第）。昭和十一年四月に東京帝国大学文学部国文科に入学、同年六月に同人誌『寄港地』を仲間十名と発行、この創刊号に小説「地図」を発表している（同誌は二号で廃刊）。昭和十四年八月号『早稲田文学』『新人創作特集号』に小説「風宴」が掲載された。昭和十五年三月に卒業（自分から一年間留年をしたが、在学中は殆んど大学の授業には出席しなかったと全集年譜にはある。卒論は「森鷗外」八十枚）後、東京市教育局教育研究所に勤務したが、翌昭和一六（一九四一）年の十二月五日に陸軍から召集を受けた（その三日後に日本は真珠湾攻撃を行っている。この召集月日は「松岡正剛の千夜千冊」の第一一六一夜『[幻化](#)』梅崎春生』に拠った。以下の引用もそれ）。『梅崎はドン亀としてついに行動をおこすときがきたと感じて、津島重砲隊に営門をくぐった。ところが、世の中はそういうときにかぎって裏切ってくるもの、気管支カタルだと誤診されて即日帰郷させられてしまった』。『またまた何も行動をおこせなくなった梅崎は、春まで福岡の津屋崎病院にいて、あとは自宅療養をしていた。そこへ弟が蒙古で自殺したという知らせが届いた』（本作の後の方で主人公の「弟はすでに、蒙古で戦死した」とあるのとはほぼ合致する。因みにこの弟は後の小説「狂ひ風」の主人公のモデルとされる）。松岡氏は『梅崎はあてもなく東京に出て、東京市の教育局や東芝の工場に行ったりしているうちに』、昭和十九年を迎えたされるが、底本年譜では明治十

九年三月に、『徴用をおそれて東京芝浦電気通信工業支社に転職』し、六月に今度は海軍から召集令状が来た（この時、**春生満二十九歳**であった（本篇の後半で村上は「生まれて三十年間」と言っているのと合致する）。これ以下は全集第一巻の本多秋五氏の「解題」に詳しいのでそこから引用する。『佐世保海兵団に入り、そこから防府の海軍通信学校に派遣され、ふたたび佐世保へよび返されて、こんどは佐世保通信隊に配置』となった。昭和二〇（一九四五）年の初め頃に『最初の実施部隊として指宿いぶすきの航空隊の通信科に転勤』、同二十年『五月に海軍二等兵曹に任官』、その後、本篇にも出る谷山基地（薩摩半島東側の旧谷山市内。現在は新制鹿児島市谷山地区で市南部に位置する）『からK基地へ、K基地』（小説「眼鏡の話」に出る）から坊津ぼうすつ（後注する）『へ派遣され、そこから谷山へ帰還を命ぜられ』て『桜島へ赴任したらしい』とある。何故、「らしい」なのかと言えば、実は春生は、この時の体験を後の本作や「幻化」に反映させているにも拘わらず、配属された坊津の特別攻撃隊（後注する）などについては生涯一切語る事がなかったからである（この部分は**ウィキの「梅崎春生」**に拠る）。本多氏はこの謎の『K基地』については『どこかは不明だが、『眼鏡の話』に、そこが吹上浜の真正面にあたるとあるのが、『幻化』のなかで、主人公は「坊津に行く前に、吹上浜の基地を転々とした」とあるのに符合する』と述べておられる。吹上浜は鹿児島県西部の薩摩半島西岸で東シナ海に面した、現在のいちき串木野市・日置市・南さつま市にかけての砂丘海岸で、その長さは凡そ四十七キロメートルに及んでおり、一つの砂丘としての長さでは日本一である。さて一方、先の松岡氏はこの前後については口調がきつい。防府の通信学校で『暗号術の講習を受けさせられて、暗号特技兵になった。けれどもこんな程度の兵務でも俗物の梅崎にはこたえた。そこで、下士官候補の速修を受けて通信科二等兵曹となり、ずるがしこく管理職につくことにした』と述べておられる。そして春生が、自分の実際の兵隊体験の一部を語らなかつた、創作に素材化しなかつたことについては、講談社文芸文庫の「桜島・日の果て・幻化」の『解説に古林尚が興味深いことをいくつも書いている。そこに、「坊ノ津で梅崎春生を見舞ったであろう残酷な私的制裁については、想像するだに慄然たるものがある」というくだりがある』（古林尚は「ふるばやしたかし」と読む。左派の文芸評論家で梅崎春生とは特に親しかった）。『それを読んでギョツとした。古林は、なぜ

『桜島』『幻化』から震洋特攻隊』（後注する）『の存在が“消去”されたのか、その経緯と理由とを見抜いているのだ。梅崎が古林に語ったのではない。梅崎は何も説明しなかった。古林は戦後、何度も梅崎にその点を問いただしたそうだが、梅崎は頑なに口をつぐみつづけたいらしい。』しかし古林にはすべてが見えたようだ。あまりにも屈辱的なことがおこったにちがいない。そうであるからこそ、梅崎は『作品のなかで復讐をしてみせたのだ』と述べておられる。この最後の古林氏のそれは、なかなか意味深長である。

「坊津」<sup>ぼうつ</sup>「遣唐使が船出をしたところ」現在の鹿児島県南さつま市坊津町坊の旧地名で古代に栄えた港の名である。参照した[ウィキの「坊津」](#)より引く。『古代から薩摩藩政の中盤頃の享保年間（一七一六年から一七三五年）』の長期に渡って、海上交通上の要地であった。遣唐使船の寄港地としての他、倭寇や遣明船、薩摩藩の密貿易の拠点として栄えた。『中国明代の文書『武備志』では主要港として、安濃津』（あのおつ／あのおのつ…伊勢国安濃郡（現在の三重県津市）にあった港湾。「安乃津」「阿野津」とも書き、「洞津（あなつ）」とも称した）・『博多津と共に日本三津（さんしん）に挙げられている。』『日本での仏教黎明期の』五三八年に『百済に仕えていた日本人の日羅が、龍巖寺（後の一乗院）を建てる。その後も坊舎や坊主といった仏教と密接な地であったため、「坊津」と呼ばれるようになった』と考えられている。』『飛鳥時代から、遣唐使船の寄港地となり、「唐（から）の港」、「入唐道（にっとうどう）」とも呼ばれるようになった。』奈良時代の天平勝宝五（七五三）年十二月二十日にはかの名僧鑑真が渡日六回目にして、近くの『秋妻屋浦（現在の秋目地区）に上陸している。』『室町時代、倭寇や遣明船の寄港地となり、大陸をはじめ、琉球や南方諸国とも貿易が活発化した。この頃、先の一乗院も大いに栄えるようになる。また、島津氏の中国（明）・琉球貿易の根拠地ともなっていた。』『伝来したキリスト教とも縁があ』って、天文一八（一五四九）年に『フランシスコ・ザビエルが日本でまず最初に上陸したのはこの地であり、』江戸幕府のキリシタン追放令で国を出て、ローマで司祭となって戻ってきた。ペトロ・カスイ・岐部が』寛永七（一六三〇）年に『上陸したのも同地である』とある。さて、先に引いた「松岡正剛の千夜千冊」の第二一六一夜『[「幻化」梅崎春生](#)』に拠れば、実際、梅崎はこの坊津に配属されたのであったが、彼は『自分の任務が何か、ほとんど理解してい

なかった。行き先に何があるかも知っていなかった。着任してみると、ところが坊津には「震洋」特別攻撃隊の発進基地があったのだ。『当時すでに艦隊の主力の大半を失っていた海軍軍令部は、アメリカ軍の本土侵攻に備えて、上陸予想地点での魚雷艇部隊の緊急配備に必死になっていた。軍令部のシナリオでは、アメリカ軍は数百隻の輸送船団で大規模な上陸作戦を敢行してくるだろうというものだった。これを迎え撃つには、残る手段は二つしかない。』

『ひとつは神風特攻隊が空から体当たりしていくこと、もうひとつは乗員1人か2人の魚雷艇で海から突っ込んでいくことである。この魚雷艇の特攻兵器として考案されたのが「震洋」だった（他に「回天」が別の基地で用意されていた）。『震洋』はトヨタのトラック・エンジンを搭載した小型船艇で、ベニヤ板でまわりを固め、艇首に250キロの黒色火薬をつめこんだというだけの自爆兵器である。ちょっとした波にあつというまに横転するような代物だったが、敗戦時まで6000隻が急造された（「回天」も似たようなものだ）。その「震洋」の本土上陸最重要反攻拠点のひとつが、坊津にあったのである。『梅崎は坊津で異様な日々を体験したあと、谷山基地に戻ったのち、桜島の通信隊に転属していった』のであつた、とある。春生が敢えて『消去』したおぞましい、搭乗員が乗り込んで操縦して目標艦艇に体当たり攻撃を敢行するモーター・ボート特攻兵器「震洋」や最初の特攻兵器である人間魚雷「回天」については、春生が『消去』している以上（但し、後でそれぞれ単語としては出る）、ここに注することは控え、ウイキのそれぞれをリンクさせるに止めおく（後で注した）。

「峠」この峠、名を出さなかったのは意図的なもののように思われる。これは恐らく、坊津の東南東一・八キロメートルにある現在の鹿児島県川辺郡坊津町坊の耳取峠みみとりがせ標高百五十メートル）と思われるからである。『かつては遣唐使船の発着港として「唐の湊」と呼ばれ、藩政時代には琉球を介して行なわれた密貿易の湊として栄えた坊津。ここ鹿兒島城下を最短距離で結んだ。』明治四二（一九〇九）年に『県道枕崎―坊津線ができ、その峠を耳取峠と呼ぶが、古くは約』五百メートル『北の番屋山山麓を越えるものだった。峠を坊津側に越えると』、宣化天皇三（五三八）年に『開かれ、明治初期まで密教寺院として栄えた一乗院がある。』『耳取という名前の由来は』三つあって、『一つは峠道からの開聞岳の眺めが素

晴らしく、「みとれ」てしまうことからの説。一つは海からの風を正面に受けるので「耳がとれるほど寒い」。今一つは密貿易にかかわった罪人の「耳を切り取り追放」したという説があるという』(以上引用は「峠データベース」の「[耳取峠](#)」に拠った)。この峠名を出してしまうと、後に出て来る耳のない遊妓が嘘っぽく響いてしまうからではないか？ 或いは逆に、耳のない彼女はこの峠の名から発想した架空の人物であったのかも知れない。後に梅崎春生は「[八年振りに訪ねる——桜島——](#)」で(リンク先は私の電子テキスト)、『この作品は場所や風景だけがほんとで、出て来る人物は虚構である。ただ一人、桜島転勤の途中で出会う谷中尉にはモデルがあるが、吉良兵曹長も見張りの兵隊も耳のない妓こも、皆私がつくった。だからあれを実録のように思われては困る』と述べている。

「楊梅」やまもも ブナ目ヤマモモ科ヤマモモ属ヤマモモ *Morella rubra*。六月頃、球形で暗赤色を呈した表面に粒状突起を密生する果実は結び、これは甘酸っぱく生で食べることが出来る。横浜翠嵐の教え子諸君はあの正門側の校舎に接して植えてあったあれ、窓の外の庇で発酵してたあれ、と言えば膝を打つであろう。

「勇」当時の海軍暗号書の名。伊・呂・波・登・天(部外)・忠・勇・雑・略語・呼出し符号・部外暗号書が存在したと原勝洋・北村新三「暗号に敗れた日本 太平洋戦争の明暗を分けた米軍の暗号解説」(二〇一四年PHP刊)にある。

「桜島」海軍の桜島の特攻秘密基地。底本解題の本多氏のそこには『桜島の部隊は、本来は震洋と回天の水上特攻基地の部隊であり、主人公の暗号特技兵の属する通信科はその所属する、いわば従属的な部隊のだが、部隊本部のことは小説にも一度も描かれていない。震洋や回天の乗組み員も姿をあらわさない。小説の舞台は、もっぱら通信科の関係する範囲にかざられている』とある。先の春生の『消去』が徹底している様子が窺われる。

「泥酔して峠の道を踏んだ時、よろめいて一間ほど崖を滑り落ちた。臉まぶたが切れて、血が随分流れた」「二間」は約一・八メートル。春生夫人梅崎恵津さんの「春生の酒」(昭和四二(一九六七)年一・二月新潮社刊「梅崎春生全集」第三卷・第四卷の月報所収)によれば(底本沖積舎版全集別巻より孫引き)、

《引用開始》

戦争の最末期には、下士官になっていたので、法度になっていた燃料アルコールなどを飲んだ。『桜島』の冒頭にも出てくるが、この燃料用アルコールを水でわって痛飲し、崖からすべり落ちて脛を切っている。これは事実の事で、あぶないところで失明するところだったと軍医にいわれたと云っていた。彼の右脛にはこの時の深い傷あとが眼鏡の下に大きく残っていた。

《引用終了》

とある。

「枕崎」坊津の港からは東に直線で六・八キロメートル。

「生涯再びは見る事もない此の坊津の風景は、おそろしいほど新鮮であった。私は何度も振り返り振り返り、その度の展望に目を見張った。何故此のように風景が活き活きしているのであろう。胸を噛むにがいものを感じながら、私は思った。此の基地でいろいろ考え、また感じたことのうちで、此の思いだけが真実ではないのか。たといその中に、訣別けつべつという感傷が私の肉眼を多分に歪ゆがめていたとしても——」小説「桜島」の、初読一発、ガツン！ とくる、最初にして最も映像的な忘れ難い広角カラーの目に染みる景観映像である。そうしてこれは奇しくも遺作「幻化」で再び我々の眼を射、円環を閉じるところの鮮烈な景色なのである（引用は昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊「梅崎春生全集 第六卷」による。オリジナル注附電子化ブログ版『梅崎春生「幻化」附やぶちゃん注』では、[ここ](#)）。[同PDF縦書決定版](#)も参照されたい。

\*

忽然こっぜんとして、視界がぱっと開けた。左側の下に海が見える。すさまじい青さで広がっている。右側はそそり立つ急坂となり、雑木雑草が茂っている。その間を白い道が、曲りながら一筋通っている。甘美な衝撃と感動が、一瞬五郎の全身をつらぬいた。

「あー」

彼は思わず立ちすくんだ。

「これだ。これだったんだな」

数年前、五郎は信州に旅行したことがある。貸馬に乗って、ある高原を横断した時、視界

の悪い山径やまみちから、突然ひらけた場所に出た。そこは右側が草山になり、左側は低く谷底となり、盆地がひろがり、彼方に小さな湖が見える。

〈何時か、どこかで、こんなところを通ったことがある〉

頭のしびれるような恍惚こうごつを感じながら、彼はその時思った。場所はどこだか判らない。おそらく子供の時だろう。少年の時にこんな風景の中を通り、何かの理由で感動した。五郎の故郷には、これに似た地形がいくつかある。その体験がよみがえったのだと、恍惚がおさまって彼は考えたのだが――

「そうじゃない。ここだったのだ」

五郎は海に面した路肩に腰をおろし、紙コップに酒を充たした。信州の場合とくらべると、山と谷底の関係は逆になっている。それは当然なのだ。二十年前の夏、五郎は坊津を出発して、枕崎へ歩いた。枕崎から坊津行きでは、風景が逆になる。五郎は紙コップの酒を一口含んだ。

「ああ。あの時は嬉しかったなあ。あらゆるものから解放されて、この峠にさしかかった時は、気が遠くなるようだった」

その頃もバスはあったが、木炭燃料の不足のために、日に一度か二度しか往復していなかった。坊津の海軍基地が解散したのは、八月二十日頃かと思う。五郎はまだ二十五歳。体力も気力も充実していた。重い衣囊いぶくろをかついで、この峠にたどりついた時、海が一面にひらけ、真昼の陽にきらきらと光り、遠くに竹島、硫黄島、黒鳥がかすんで見えた。体が無限にふくれ上って行くような解放が、初めて実感として彼にやって来たのだ。

〈なぜこの風景を、おれは忘れてしまったんだろう〉

感動と恍惚のこの原型を、意識からうしなっていた。いや、うしなつたのではない。いつの間にか意識の底に沈んでしまったのだろう。今朝コーヒーを飲んだ時、突如として坊津行きを思い立ったのではない。ずっと前から、意識の底のものが、五郎をそそのかしていたのだ。それを今五郎はやっと悟った。彼はコップの残りをあおって、立ち上った。

\*

山本健吉氏は底本全集の第六卷（昭和六〇（一九八五）年沖積舎刊）の遺作「幻化」の「解

説」中の、本作と「幻化」を対比しながら評されている中で、『風景が人を感動させることがあれば、その風景の近い将来に於ける荒廢が目に見えているか、あるいは、こちらがもはや二度とそれをも見ることはない「末期の眼」で眺めているか、どちらかである。もちろん彼は、この絶望的な戦争に、生き残れると期待していやしなかった』と述べておられる。これ以上の名評を私はここに記すことは出来そうもない。」

枕崎から汽車に乗って、或る小さな町についた。そこでバスに乗り換えるのである。しかし日に一回のそのバスが、もはや、通過したあとであった。

軍隊のトラックを呼び止めて、それに便乗する手は残っていた。しかしそれも物憂く、街の中央にある旅館に入って行った。そして飯をたべた。縁側に立って、夕方の空のいろを眺めていると、通りかかった若い海軍士官が私に声をかけて来た。私は、私の旅行の用向きを答えた。それから此の士官の部屋に行き、煎豆を噛みながら、暫く雑談をした。

やはり坊津の、山の上にある挺身監視隊長、谷中尉と言った。背が低い、がっしりした、眼の大きい男である。二十三四歳に見えた。先日、博多が空襲にあった際、博多武官府にいたと言う。その時の話をした。博多は、私の古里であり、博多にいる私の知己や友人のことを思い、心が痛んだ。

「美しく死ぬ、美しく死にたい、これは感傷に過ぎんね」

谷中尉は、煎豆の殻をはき出しながら、じろりと私の顔を眺め、そう言った。

日が暮れた。そして一泊することに、心をきめた。遊ぼうと言うので、宿屋を出て、駅の裏手にあるという妓楼に出掛けて行った。宿の婢に教えられた家は、暗い路の、生籬に囲まれた、妓楼らしくもないうらぶれた一軒屋である。前の崖の下を、煙突から赤い焰をはきながら、機関車がゆるゆる通る。パツと火の粉が線路に散ったりした。星の見えない空には厚い雲の層が垂れているらしかった。

妓が一人しか居なかったのだ。そして、酒はなかった。

谷中尉の發議で、私が籤をつくった。此のような場所で女と寝るのも侘しく、私は短い籤を引きたいと願った。しかし、私が長い籤にあたった。谷中尉は、お茶を一杯飲んだだけで、では、とわらいながら立ち上った。やや経って、玄關から門までの石畳を踏んで出て行く谷中尉の靴の音がきこえて来た。暫くして、妓が部屋に来了。

妓には、右の耳が無かった。

女と遊ぶ、このことが生涯の最後のことであることが、私にははっきり判っていた。桜島に行けば、もはや外出は許されぬ。暇さえあれば眠らねばならぬような勤務が、私を待っているのだ。私は窓に腰かけ、黙って妓を眺めていた。女は顔の半分を絶えず私の視線から隠すようにしながら、新しく茶をいれた。俄かに憤怒に似た故知らぬ激しい感傷が、鋭く私の胸をよぎった。

「耳がなければ、横向きに寝るとき便利だね」

此のような言葉を、荒々しい口調で投げて見たくしようがなかった。言わば、頭をかきむしるような絶望の気持で——妓を侮辱したかったのではない。此の言葉を口に出せば、言葉のひとつひとつが皆するどい剣のようにはねかえって、私の胸に突き刺さって来るにきまっていた。口に出さずとも、もはや私の胸は傷ついているのではないか。私は、私自身を侮辱したかったのだ。生涯、女の暖い愛情も知らず、青春を荒廃させ尽したまま、異土に死んで行かねばならぬ自身に対し、此のような侮辱がもつともふさわしいはなむけではないのか。私は窓に腰かけたまま、じつと女の端麗な横顔に見入っていた。

「こわいわ」

視線を避けるように、妓は一寸横を向いた。かすかに身ぶるいしたようであった。一瞬、右の半面が乏しい電燈の光に浮き上った。地のうすい頭から、頬がすぐにつづいていた。耳のついているべき部分は、ある種の植物の実の切口のように、蒼白くすべすべしていた。

「臉を、どうしたの」

「崖から落ちたのさ」

「あぶないわね」

私は立ち上って上衣を脱いだ。そして、時間が過ぎた。何の感興もない、ただ自分の肉体

の衰えを意識するだけの短い時間のあいだ、私はぼんやり外のことを考えていた。此の町に、小さな汽車に乗ってやって来た。明朝はやくバスに乗って去る。一生のうち、初めて訪れた町であり、もう訪れることはない。此のうらぶれた妓楼の一夜が、私の青春のどのような終止符の意味をもつのだろう。私は窓の下を通る貨物列車の音をわびしく聞きながら、おんな妓と会話をかわしていた。

「桜島？」

妓は私の胸に顔を埋めたまま聞いた。

「あそこはいい処よ。一年中、果物がなっている。今行けば、梨やトマト。枇杷びわは、もうおそいかしら」

「しかし、私は兵隊だからね。あるからといって勝手には食べないさ」

「そうね。可哀そうね。——ほんとに可哀そうだわ」

妓は顔をあげて、発作的にわらい出した。しかしすぐ笑うのを止めて、私の顔をじっと見つめた。

「そして貴方は、そこで死ぬのね」

「死ぬさ。それでいいじゃないか」

暫しばしく私の顔を見つめていて、急にぼつんと言った。誰に聞かせるともない口調で——  
「いつ、上陸して来るかしら」

「近いうちだろう。もうすぐだよ」

「——あなたは戦うのね。戦って死ぬのね」

私は黙っていた。

「ねえ、死ぬのね。どうやって死ぬの。よう。教えてよ。どんな死に方をするの」

胸の中をふきぬけるような風の音を、私は聞いていた。妓の、変まに生真面目まじめな表情が、私の胸の前にある。どういう死に方をすればいいのか、その時になってみれば、判るわけはなかった。死というものが、此の瞬間、妙に身近に思われたのだ。覚えず底知れぬ不吉なものが背骨を貫くのを感じながら、私は何気ない風を装い、妓の顔を見返した。

「いやなこと、聞くな」

紙のように光を失った顔から、眼だけが不気味に私の顔の表情につきささって来る。右の半顔を枕にぴたりと押しつけた。顔がちいさく、なつみかん夏蜜柑位の大きさに見えた。

「お互いに、不幸な話は止そう」

「わたし不幸よ。不幸だわ」

妓の眼に、涙があふれて来たようであった。瞼を閉じた。切ないほどの愛情が、どっと私の胸にあふれた。歯を食いしばるような気持で、私は女の頬に手をふれていた。

「やぶちゃん注：『海軍士官』[ウィキの「海軍士官」](#)によれば、大日本帝国海軍に於いては、広義には、将校（『海軍兵学校を卒業した兵科将校及び海軍機関学校を卒業した機関科将校』・予備役将校（予備役（一般社会で生活している軍隊在籍者で有事の際や訓練の時のみ軍隊に戻る在郷軍人）に編入された将校）・予備将校（『召集中であるか否かを問わず、高等商船学校航海科を卒業した予備兵科将校及び同機関科を卒業した予備機関将校。あるいは予備学生及び予備生徒から少尉に任官した兵科・機関科・飛行科将校（いわゆる、予備士官）・特務士官（『現役・予備役を問わず下士官』（上等兵曹・一等兵曹・二等兵曹。なお、梅崎春生はこの下士官である通信科二等兵曹であったから、この村上も同じと考えてよからう）』から少尉に進級した将校及び将校相当官（『現役・予備役を問わず技術科、法務科、主計科、軍医科等において少尉以上の階級にある者』）とする。但し、狭義即ち法制上の「海軍士官」は『現役将校（兵科・機関科）』と『現役の将校相当官（技術科、法務科、主計科、軍医科等）』のみを指す、とある。

「挺身監視隊」勤労働員された少年らを海防監視兵に即席で仕上げた部隊であろう。

「博多武官府」この「武官府」という言い方が、幾ら調べて見てもよく判らない。少なくとも「博多武官府」ではヒットしない。当時、博多を含む福岡は陸上・海上ともにほぼ第三海軍区佐世保鎮守府の管轄であった（海上の一部は第二海軍区呉鎮守府管轄）。ここで言う「武官府」というのは単に海軍武官（武官は職業軍人である士官・下士官のみを指す）の博多に於ける海軍官庁（役所）の謂いとしか読めない。識者の御教授を乞う。

「博多は、私の古里」前に注した通り、梅崎春生は福岡県福岡市筥すのこ子町（現在の中央区大手

門簀子地区)に陸軍士官学校十六期出身の陸軍少佐梅崎建吉郎の次男として生まれている。

「美しく死ぬ、美しく死にたい、これは感傷に過ぎんね」**本作を一本貫く命題の提示である。**

「妓には、右の耳が無かった」「女は顔の半分を絶えず私の視線から隠す」「女の端麗な横顔」

「右の半面が乏しい電燈の光に浮き上った。地のうすい頭から、頬がすぐにつづいていた。

耳のついているべき部分は、ある種の植物の実の切口のように、蒼白くすべすべしていた」

「臉を、どうしたの」「ここは慄つとするほど切れるように美しく妖しい。外耳のない女――

臉を裂いた男――これは明らかに「生」＝「性」の生々しい聖痕(ステイグマ：stigma)に

以外の何ものでもない。実は私はここを読んだ時――『あの女だ……』――と思わず独りご

ちたものだった。先に読んでいた梅崎春生の遺作「幻化」の中に出て来る「白い花」に登場

するあの不思議な女である。設定は異なるけれど、私にはこれは同じ女なのだという思いが

今もしている。彼女の話は後に回想される。因みにそこを読む限りでは、彼女は先天的な外

耳欠損奇形であったように読める。さればこそなおのこと、それは、ステイグマである、と

私は思うのである。

「いやなこと、聞くな」この「な」は禁止の終助詞ではなく、詠嘆の「なあ」の「な」である。少なくとも私が俳優なら、そう、台詞を言う。」

翌日の昼、霧雨の中を谷山に着いた。壕くわうの中は湿気に満ち、空気は濁っていた。暗号室は、

壕の一番奥にあった。霧雨を含んでしっとり重い略帽を手にさげ、梁はりで頭打たぬよう身体をかがめて入って行った。高温のため、眼鏡がふいてもふいても直ぐ曇った。

「今すぐ桜島に発たつて呉れ。あそこには暗号の下士官がいなのだ」

「一人、居る筈ではないのですか」

「赤痢で、霧島病院に入院したんだ」

掌暗号長とこういう話をした。

「すぐ出発します」

暗号室を出て来ると、顔見知りの下士官や兵隊がいて、やあやあとあいさつした。此処はずつと雨で、二三日前は、居住区の方の壕の入口が壊れたという。砂岩質の、もろい土質であった。湿気のためか、壕内はいやな臭いがした。兵隊の顔色は皆蒼白あおじろかった。

佐世保海兵団から、桜島に行くべき兵隊が六名、間違えて谷山に來ているから、それらを連れて行けと言うので、私迄入れて七人、壕の入口に整列し、当直将校にあいさつし、また霧雨の中を赤土の路を踏み、市電の停留場へ進んで行った。聞いてみると、六名は皆補充兵である。回天や震洋艇しんやうていの修理のため派遣されるのだと言う。

「桜島には、震洋がもう来ているのかね」

「判りませんです」

答えたのは一番年嵩の一等兵である。四十は既に越した風貌である。身体に合わない略服を着て、見すばらしく見えた。衣囊いのうも小さい。佐世保海兵団で焼け出されたため、ごく僅かの衣類しか支給されなかったと言う。私の衣囊の重そうなのを見て、しきりに自分のものと交換してかつごうと言って聞かなかった。善良な型の人物のようであったけれども、軍隊の仕来りしきたりに忠実であろうとするその愚直さが、私には何となく重苦しかった。

「俺の物は俺が持つ」

素気なく私はそう言い、あとは黙って路を歩んだ。停留場に着いた。小さな電車に乗って暫く走ったと思うと、すぐ降された。爆撃された為、電車は此処迄しか通じないのだ。再び列をつくって、今度は舗装路を歩み出した。

鹿児島市は、半ば廃墟となっていた。鉄筋混泥土コンクリートの建物だけが、外郭だけその形を止め、あとは瓦礫がれきの散乱する巷ちまたであった。ところどころこわれた水道の栓が白く水をふき上げていた。電柱がたおれ、電線が低く舗道を這はっていた。灰を吹き散らしたような雨が、そこにも落ちていた。廃墟の果てるところに海があった。海の彼方かなたに、薄茶色に煙りながら、桜島岳が荒涼としてそそり立った。あの麓ふもとに行くのだと思った。皆、黙ってあるいた。衣囊が肩に重かった。

波止場はとばで船を待っているうちに、空が漸くようや明り出した。雲が千切れながら、青い空を見せ始めた。船を待つ人は皆、痴呆に似た表情をし、あまり口を利きかなかった。切符売場の女

の子達は、ふかした馬鈴薯を食べていた。それが変に私の食欲をそそった。私はそれから眼を外らし、衣囊に腰を掛け、無表情な群衆を眺めていた。昨夜の女のことを考えていたのだ。昨夜の情緒が、妙に執拗に私の身体に尾を引いているように思われた。何か甘いその感じが、逆に作用して、波止場にいる無感動な人々の表情に対する嫌悪をそそった。

(馬みたいに表情を失っている)

私は激しく舌打ちをした。兵隊たちは、女の子から馬鈴薯をわけて貰い、私の眼をはばかりのようにしてそれを食べていた。じりじりするような時間が過ぎた。やがて白い波頭を立てながら、船が来た。私達は乗った。濁った水をわけながら、船は動き出した。

やがて着いた対岸の砂浜に板をおろし、ひとりひとり渡って飛び下りた。此処が桜島である。海沿いの道を約一里あるいて、袴腰はかまじしという処に部隊がある。眼をあげると、空は晴れ上って、朱を流したような夕焼であった。私の心もほっと明るくなるような感じであった。気軽く兵隊たちにも話しかけ、そして歩き出した。雨上りの、鮮烈な緑をたたえた樹々が道のくねりにしたがって次々につづいた。農家らしい家に立ち寄り、梨を沢山買った。

茶褐色の、かたい小さな梨であった。気が付くと、群れ立つ樹々の間に、此の野生の梨はあちこちに茶褐色の実を点じていた。

「昨夜の女が言った梨が、これか」

汁液の少ない、甘味に乏しい実を噛んではき散らしながら、私はそう思った。

日が落ちた。満山に湧く蟬せみの声も衰えた。薄明の中、私達は部隊に着いた。道から急角度にそそり立つ崖に、大きな洞窟を七つ八つも連ね、枯れた樹などで下手な擬装をしている。ドラムかん罐などが、壕の入口にいくつも転がっていた。そして兵隊が壕を出たり入ったりしている。皆、年取った兵ばかりであった。静かな濤なみの音がした。

当直将校に会い、七名分の送り状をわたし、私はそこで六名と別れた。通信科の兵が来て、それと一緒に居住区に歩き出した。通信料の居住区は、丘の頂上近くにある。暗い歩き難い山道をのぼりながら、私は空をあおいだ。参差しんしする梢こずえのために、星も見えなかった。

「まだ上の方かね」

「もうすぐです」

少し広い道に出て、梢が切れた。片側が崖になり、暗い海の展望があった。微かな風が私の脛にあたる。海に向うにはくろくろと鹿兒島の市街があり、そのひとところが赤い焰をあげて燃えていた。疲労した私の眼に、その火の色は此の世のものならぬ不思議な色で、とろとろと静かに燃えていた。

「毎晩、ああやって燃えているのです」

変に感動しながら、私は兵のその言葉を聞いた。

狭い道に降り、そして居住区についた。崖下の洞窟より一回り小さい入口が、やはり竹や樹で小うるさく擬装してあって、電線が岩肌を何本も這って居た。壕はU字形をしているらしかつた。身体をかがめて入って行った。

壕の一番奥は送信所になっていて、発電機とか送信機がごちゃごちゃ置いてある。そこで電信の先任下士官などに会い、あいさつをした。送信所に到る通路が、いわば居住区の形で、寝台や卓子が並んでいた。その一つの卓に瓶を置いて、準士官が一人酒を飲んでいて。骨組みは太そうだけれど、肉付きの薄い、通信科の軍人に特有の青白い皮膚をした顔の、こけた頬の上に赤く濁った眼がぎろりと私にそそがれた。陸戦の士官の持つような頑丈な軍刀に片手を支え、酒盃に伸びた手の指が何か不自然なほど長かった。

「村上兵曹か」

私は敬礼をした。

「ここは、当直は辛いぞ。下士官だからといって、夜の当直を抜けることは、俺が絶対に許さん。他の基地のことは知らん。此処は少くとも第一線だ。毎日グラマンが飛んで来る。とうせ此処で、皆死ぬんだ。死ぬまで、人から啗われたり後指をさされたりするようなことをするな」

老人のようにしゃがれた声であった。

「判っております」

「俺は、俺はな、吉良兵曹長」

投げつけるような口調でそう鋭く言ったと思うと、執拗なまで私の顔にそそいでいた視線をふいと外らし、再び私の方を見ようともしなかった。私のことをすっかり忘れ果てた様

子で、視線をじつと中空に据え、長い指で盃さかずきを唇にはこんだ。

「帰ります」

敬礼をし、私は兵隊に導かれ、私に定められた寝台のところに行った。衣囊を寝台の下に押し込み、湿った服を脱いだ。山の下から、微かに巡検ラッパの音が流れて来る。寝台は二段になっていて、二階の方に、下手糞へたくそな字で、村上兵曹、と書いた新しい木札がかけてあった。

梯子はしこを登り、私は毛布の上に横たわった。あおむけに寝た私の顔のすぐ上を、黒い電線や裸線が幾本も通り、壕内の乏しい電燈の光を吸うて微かに光った。天井からは絶えず細かい砂がはらはらと落ちて来るらしかった。私はそのまま目を閉じた。

(あの眼だ)

軍人以外の人間には絶対に見られない、あの不気味なまなざしは何だろう。奥底に、マニヤクな光をたたえている。常人の眼ではない。変質者の瞳だ。最初に視線が合ったとき、背筋を走りぬけた戦慄は、あれが私の脅えおびの最初の徴候ではなかったか。私が思うこと、考えることを、だんだん知って来るに従って、吉良兵曹長は必ず私を憎むようになるに決っている。それは一年余りの私の軍隊生活で、学び取った貴重な私の直観だ。あの種類の眼の持主は、誤たず私の性格を見抜き、そして例外なく私を憎んだのだ。

「苦手！」

私はそう口に出して呟つぶやいた。此の桜島での生活が、何時まで続くか判らない。しかし死の瞬間までに到る此処での生活の間、彼を上官としていたただかねばならぬこと、漠然たる不吉の予感がながく私の胸をつつんだ。

昨夜の記憶が、遠い昔のことに感じられた。それは遙かな、もはや帰って行けぬ世界であった。

そのうちに私は、うとうとと深い眠りに落ちて行ったらしかった——

「やぶちゃん注：一点だけ——底本にどうしても従いたくないことがある。それは「蟬」である。本篇では総て「蟬」である。「蟬」は本作の極めて重要なアイテムである。而して私は

「蟬」という新字が生理的に頗る大嫌いである。——されば——ここ以降に出現する「蟬」

という文字だけは——総て正字の「蟬」で表記させて頂く。なお、私の電子データをこっそり剽窃する際は、くれぐれも「蟬」と直して自分のオリジナルのようにすることを忘れないようにされたい。そういうミスを犯して私の膨大な電子データを自分が打ったかのように嘘をついているために、私から永遠にネット上で批判され続ける(事実、私は批判し続けている)愚劣なサイトが鎌倉関連サイトには、ある。私はともかくも——執念深い男——である。

「谷山」谷山にある海軍基地。薩摩半島東側の旧谷山市内(現在は新製の鹿児島市谷山地区で市南部に位置する)。

「略帽」は「略式制帽」とも呼ばれる制帽の一種で、[ウィキの「制帽」](#)によれば、『旧日本軍や自衛隊などで正帽』と呼ばれたものの略式の実務実戦向きのものである。『略帽は正規の儀礼でも用いられる格式を与えながらも、製造に掛かるコストや物資が儀礼帽や官帽よりも節約できるため、特に戦時体制下では略帽を大量生産して着用を奨励することで、結果的に正規制帽の官帽をほぼ被らなくなる事例も日本の歴史上では見られた』。『制服規程などで形状や意匠が略帽として定められた制帽は、厳密には全て略帽に含まれるため、制帽と同様に略帽という形の帽子はないが、近代史上の経緯から、日本で一般的に略帽として連想される帽子は大日本帝国陸軍や大日本帝国海軍で略帽として制定された戦闘帽(戦闘帽)と呼ばれる様式のものが多く、それがそのまま略帽と呼ばれる場合もある』とある。リンク先の写真の内、『士官略装(後の第三種軍装)の略帽を着用した海軍大佐(犬塚惟重)』とあるものを想起すればよい。か。**特攻志願の少年航空兵であった私の父もこんな形の帽子を被って出征した。**

「霧島病院」現在の鹿児島県本土の中央に位置する霧島市内の病院と思われるが、不詳。「掌暗号長」通信科内の暗号管理の実務エキスパートで、恐らくは兵曹長である。この上にさらに全体を統括する原則、海軍将校が就いた(前にも述べたが、狭義の「海軍将校」とは原則、海軍兵学校・海軍機関学校卒業生だけを指す。但し、この兵学校選修学生出身の特務士官(海軍の学歴至上主義のために大尉の位までに制限配置された後身の準階級で、叩き上げの優秀なエキスパートであっても将校とはなれず将校たる「士官」よりも下位とされた階

級。兵曹長から昇進した者は海軍少尉ではなく、海軍特務少尉となった」も特例として就けた)、暗号科内の最高責任者である「暗号長」の職務を補佐して全体を指揮監督する「暗号士」がいたものと想定される。ここは個人サイト「兵隊さん昔話」内の「[海軍にのみ存在した特務士官を考える](#)」などを参考にさせて戴いた。

「砂岩質の、もろい土質」シラス(白砂・白州)。主に[ウイキの「シラス\(地質\)」](#)から引く。『九州南部一帯に厚い地層として分布する細粒の軽石や火山灰で』、『鮮新世から更新世にかけての火山活動による噴出物であるが、地質学においてはこのうち特に入戸火砕流』(「入戸」は「いと」或いは「いりと」と読む。約二万五千年前に現在の鹿児島湾と桜島を囲む巨大カルデラ始良カルデラの大噴火で発生した大規模な火砕流)『による堆積物を指す。古くは白い砂を意味する一般的な言葉であり、現代でも東北地方においてはこの意味で使われる』。『九州南部の平地を中心に分布しており、鹿児島湾北部を囲む地域において最も厚く、湾から遠ざかるに従って薄くなり熊本県人吉市や水俣市、宮崎県宮崎市にも分布している。鹿児島県内でおおむね』数十メートル程度、最大約百五十メートルもの『厚みがある。鹿児島市北西部から日置市にかけて広がる丘陵地や、鹿屋市を中心として広がる笠野原台地は、ほぼ全体がシラスで形成されている。また、霧島市付近に広がるテーブル状の丘陵群は別の地層の上にシラス層が重なるようにして形成されている。上面は平坦になっておりシラス台地と呼ばれる台地を構成している』とあり、[ウイキの「シラス台地」](#)によれば、鹿児島市の実に五十二%をシラス台地が占めるとある。実は、実感としてそれを知る私自身にはこんなインキ臭い注は本来は不要である。私の母の実家(現在は消失)は鹿児島の大隅半島の曾於市大隅町岩川であったからである。

「佐世保海兵团」佐世保鎮守府設置と同時に鎮守府用地内に設置された海兵团。海兵团とは『大日本帝国海軍において、軍港の警備防衛、下士官、新兵の補欠員の艦船部隊への補充、また海兵团教育と称するその教育訓練のために練習部を設け、海軍四等兵たる新兵、海軍特修兵たるべき下士官などに教育を施すために、鎮守府に設置されていた陸上部隊』のこと(以上は[ウイキの「海兵团」](#)に拠る)。因みに、「鎮守府」とは『日本海軍の根拠地として艦隊の後方を統轄した機関』で『所轄海軍区の防備、所属艦艇の統率・補給・出動準備、兵員

の徴募・訓練、施政の運営・監督にあたった。鎮守府司令長官（大・中将）は軍政に関して海軍大臣の、作戦計画に関しては海軍軍令部長（軍令部総長）の指示を受けた』（ここはウイキの「鎮守府」よりの引用）。後で「佐鎮さちん」と出るので、佐世保鎮守府も先に注しておくと、長崎県佐世保市にあった日本海軍の鎮守府で、通称を「佐鎮」と称した。『九州を始めとする西日本地域一帯の防衛と朝鮮・中国等東アジアへの進出の根拠地として九州の西岸に海軍の軍港を置くことになった。本命は長崎だったが、市民から商港機能を阻害されると猛反対され、土地買収費用の問題もあり断念』『海軍部内での検討の末、天然の良港であり、寒村ゆえ土地も安く手に入る佐世保村に軍港を開き鎮守府を置くことが決定し』、明治二二（一八八九）年に『正式に佐世保鎮守府が開庁した』（ここはウイキの「佐世保鎮守府」に拠った）。同ウイキによれば、本篇作品内時間の同鎮守府の最終所属部隊を見ると、第三特攻戦隊（大村）として川棚突撃隊・第三十一突撃隊（佐世保）・第三十四突撃隊（唐津）、第五特攻戦隊（鹿児島）として第三十二突撃隊（鹿児島）・第三十三突撃隊（油津）・第三十五突撃隊（細島）の特攻部隊の名が掲げられている。

「補充兵」徴兵検査で乙種合格と判定されながら、その年度の徴集定員を超えていたために軍隊に行かずに済んだ者は「補充兵役」に編入された。服役期間は十七年と四ヶ月で、その間、社会人としての生活をしながら、軍隊で「教育召集」という短期間の教育を受ける義務が課せられた。万一、この服役期間に戦争や事変が起こって召集兵を動員しても数が不足した場合には、この者たちに「臨時召集令状」によって召集がかけられ、この兵士らを「補充兵」と称した。昭和二（一九二七）年四月一日に公布された「兵役法」（日本国民男子に兵役の義務を課す旧法律。明治六（一八七三）年に陸軍省から発布された徴兵令を全面改正する形で同昭和二年十二月一日に施行された。この時に法令名を「徴兵令」から改題している。戦後、ポツダム命令によって昭和二〇（一九四五）年十一月十七日に廃止。ここはウイキの「兵役法」に拠った）に『第一補充兵ハ現役兵ニ欠員ヲ生ジタル之ガ補充ヲ爲シ又必要ニ應ジ之ヲ召集シテ所要ノ教育訓練ヲ施シ以テ戦時ノ要員ニ充ツルモノトス』と規定されていた。第二次世界大戦では戦争の泥沼化に従って、常備役・補充兵役のハードルが低くなり、「根こそぎ動員」という状態となった。補充兵役は第一補充兵・第二補充兵とに分類され、

この他に「国民兵役」があり、これはまた、常備兵役と補充兵役とを終えた男子が服する「第一国民兵役」と、常備兵役・後備兵役・補充兵役および第一国民兵役に属さない、満十七歳以上四十五歳以下の男子が服する「第二国民兵役」とがあった。以上は消失可能性のあるネット上のQ&Aサイトの回答からの引用であるからリンクは張らないが、その最後に回答者は『当時の「日本国臣民」は何らかの形で軍隊にかかわらざるを得なかった』点に着目されたいと擱筆されておられる。

「回天」大日本帝国海軍が開発した最初の特攻兵器、通称、人間魚雷。以下、[ウィキの「回天」より引く](#)（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略・追加した。下線やぶちゃん）。『「回天」という名称は、特攻部長大森仙太郎少将が幕末期の軍艦「回天丸」から取って命名した。開発に携わった黒木博司中尉は「天を回らし戦局を逆転させる」という意味で「回天」という言葉を使っていた。秘密保持のため付けられた「〇六」や「<sup>マルロク</sup>的」<sup>てき</sup>という別称もある。『一九四四年七月に二機の試作機が完成し、十一月八日に初めて実戦に投入された。終戦までに四百二十基が生産された。兵器としての採用は一九四五年五月二十八日のことだった』。『回天は超大型魚雷「九三式三型魚雷（酸素魚雷）」を転用し、特攻兵器としたものである。九三式三型魚雷は直径六十一センチメートル、重量二・八トン、炸薬量七百八十キログラム、時速四十八ノットで疾走する無航跡魚雷で、主に駆逐艦に搭載された。回天はこの酸素魚雷を改造した全長十四・七メートル、直径一メートル、排水量八トンの兵器で、魚雷の本体に外筒を被せて気蓄タンク（酸素）の間に一人乗りのスペースを設け、簡単な操船装置や調整バルブ、襲撃用の潜望鏡を設けた。炸薬量を一・五トンとした場合、最高速度は時速五十五キロメートルで二十三キロメートルの航続力があつた。ハッチは内部から開閉可能であつたが、脱出装置はなく、一度出撃すれば攻撃の成否にかかわらず乗員の命はなかつた』。『操作方法は搭乗員の技量によるところが多かつた。手順としては、突入直前に潜望鏡を使用して敵艦の位置・速力・進行方向を確認、これを元に射角などを計算して敵艦と回天の針路の未来位置が一点に確実に重なる、すなわち命中するように射角を設定。同時に発射から命中までに要する時間を予測。そして潜望鏡を下ろし、ストップウォッチで時間を計測しながら推測航法で突入する。命中時間を幾分経過しても命中しなかつた場合

は、再度潜望鏡を上げて索敵と計算を行い、突入を最初からもう一度やり直すという戦法がとられ、訓練もそのように行われた。しかし、作戦海域となる太平洋の環礁は水路が複雑であり、夜間において潜望鏡とジャイロスコープを用いての推測航法で目標に到達することは十分な訓練を経ても容易ではなかった。当時の搭乗員は「操縦するのには六本の手と六つの目がある」と話していたという。『回天が実戦に投入された当初は、港に停泊している艦船への攻撃、すなわち泊地攻撃が行われた。最初の攻撃で給油艦ミシネワが撃沈されたのははじめ、発進二十基のうち撃沈二隻』（ミシネワ及び歩兵揚陸艇一隻）、『撃破（損傷）三隻の戦果が挙げられている。アメリカ軍はこの攻撃を特殊潜航艇「甲標的」（魚雷二本を艦首に装備した小型特殊潜航艇。開発当初は洋上襲撃を企図して設計されたが、後に潜水艦の甲板に搭載して水中から発進、港湾・泊地内部に侵入、敵艦船を攻撃するよう戦術が転換された。ここはワイキの「甲標的」に拠る）』による襲撃と誤認し、艦上の兵士はいつ攻撃に見舞われるかという不安にかられ、泊地にいっても連日火薬箱の上に坐っているような戦々恐々たる感じであったという。しかし、米軍がこまめに防潜網を展開するようになり、泊地攻撃が難しくなってからは、回天による攻撃は水上航行中の船を目標とする作戦に変更された。この結果、搭乗員には動いている標的を狙うこととなり、潜望鏡測定による困難な計算と操艇が要求された。『回天の母体である九三式三型魚雷は長時間水中におくことに適しておらず、仮に母艦が目標を捉え、回天を発進させたとしても水圧で回天内部の燃焼室と気筒が故障しており、エンジンが点火されず点火用の空気（酸素によるエンジン爆発防止の為に点火は空気で行われた）だけでスクリュウが回り出す「冷走」状態に陥ることがあった。この場合、回天の速力や射程距離は大幅に低下し、また搭乗員による修理はほぼ不可能であったため、出撃を果たしながら戦果を得ることなく終わる回天が多く出る原因となった。また最初期は潜水艦に艦内からの交通筒がなかったため、発進の前に一旦浮上して回天搭乗員を移乗させねばならなかった。当然のことながら敵前での浮上は非常に危険が伴う。回天と母潜水艦は伝声管を通じて連絡が可能だったが、一度交通筒に注水すると、浮上しない限り回天搭乗員は母潜水艦に戻れなかった。また、エンジンから発生する一酸化炭素や、高オクタン価のガソリンの四エチル鉛などで内部の空気が汚染され、搭乗員がガス中毒

を起す危険があることが分かっていたが、これらに対して根本的な対策はとられなかった。『潜水艦は潜れば潜るほど爆雷に対して強くなるが、回天の耐圧深度は最大でも八十メートルであったため、回天の母艦となる伊号潜水艦はそれ以上は深く潜行する場合は回天を破損する覚悟が必要であり、敵に発見された場合も水中機動に重大な制約を受けた。そのためアメリカ側の対潜戦術、兵器の発達とあいまって出撃した潜水艦十六隻（のべ三十二回）のうち八隻が撃沈されている。戦争最末期に本土決戦が想定された際は、回天も水上艦を母艦とすることが計画され、海上挺進部隊の球磨型軽巡洋艦三番艦「北上」をはじめとして松型駆逐艦（竹等）や一等輸送艦が改造された。以下、「開発」の項。『人間魚雷の構想は、ガダルカナル島での敗北後に日本海軍内で上がっていた。竹間忠三天尉は「戦勢の立て直しは」必中必殺の肉弾攻撃」として、人間魚雷の構想を軍令部の井浦祥二郎中佐に対して送り、井浦も人間魚雷の実現性を打診したが、艦政本部は消極的で軍令部首脳は認めなかった。昭和一八（一九四三）年『十二月、伊百六十五型潜水艦水雷長・入沢三輝大尉と航海長・近江誠中尉が、戦局打開の手段としてまとめた「人間魚雷の独自研究の成果」を軍令部と連合艦隊に献策したが、全く受け入れられなかった。』『陸軍の工作機械設計者だった沢崎正恵は、人間魚雷を設計して持参したが、紹介状がなかったため軍務局長には面会ができず、嘆願書を受理してもらった。一九四四年二月、軍務局長から、それは海軍の管轄との返信があった。』昭和十八年『末、甲標的搭乗員の黒木博司大尉と仁科関夫中尉は回天の原型に基づいて検討を行い、これを山田薫に対して進言するも、省部との交渉が不十分だと判断して自ら中央に血書で請願を行った。これを受けたのは海軍省軍務局第一課の吉松田守と軍令部作戦課潜水艦部員藤森康男だった。一九四三年十二月二十八日に藤森から永野修身軍令部総長へこの人間魚雷が上申されるが、「それはいかんな」と明言されて却下された。』しかし、この後の上申は軍務局第一課長の山本善雄大佐を動かし、黒木はこの時、全面血書の請願書を提出した。しかし、戦局の悪化は著しく、マールシャル失陥やトラック空襲などで日本軍の治安は悪化する一方だったことから、昭和一九（一九四四）年『二月二十六日、中央は海軍工廠魚雷実験部に対して、黒木・仁科両者が考案した人間魚雷の試作を命じた。最初は乗員の海中放出が条件にあった。』同『年四月四日軍令部第二部長黒島亀人の作成した

「作戦上急速実現を要望する兵力」の中で大威力魚雷として人間魚雷が提案された。この後、人間魚雷に「〇六」<sup>マルロク</sup>の仮名称が付き、艦政本部で担当主務部が定められて特殊緊急実験が開始された。同年『七月二十五日、試作機の試験が大入島発射場で行われたが、脱出装置が未完成のために装備されなかった。また、この試験を終えて兵器としての問題点が指摘された。指摘の主なものは一魚雷改造の艇のため後進ができない』『一回半径が大きすぎる』『最大八十メートルしかない潜航深度が母艦の大型潜水艦の深度を制限し、水中機動の妨げになる』などが挙げられたが、これらの問題点は改善されることなく、一九四四年八月一日に米内光政海軍大臣の決裁によってそのまま正式に兵器として採用された。試験で挙げられた三つの問題は、終戦まで解決されなかった。同年『八月十五日、大森から「この兵器（回天）を使用すべきか否かを判断する時期に達した」という発言があった。そして同月、大森によって明治維新の船名から「回天」と命名される。そして』昭和一九（一九四四）年『九月一日、山口県大津島に板倉光馬少佐、黒木博司、仁科関夫が中心となって基地が開隊され、同月五日より全国から志願して集まった搭乗員達による本格的な訓練が開始された。これが組織的な回天特攻の始まりである。』『一方、回天の生産は、八月末までに百基の「一型」を生産する計画が立てられたものの、実生産数は九月半ばまでに二十基、以後は日産三基が呉市の工廠の限界だった。これは、アメリカ軍が実施した海上輸送の破壊による資材不足や損傷艦の増大、この頃より本格化したB-29による本土空襲、工員の不足や食料事情の悪化が生産を妨げたためである。回天のベースになった九三式三型魚雷は燃焼剤として酸素を使用するため、整備に非常な手間がかかり、一回の発射に地上で三日の調整が必要だった。十分な訓練期間がない以上、回天の整備隊は三日で二回のペースで調整するよう督促された。』『訓練初日の九月六日、提唱者の黒木と同乗した樋口が殉職する事故が起きる。黒木の操縦する回天は荒波によって海底に沈没、同乗の樋口大尉と共に艇内で窒息死するまで事故報告書と遺書、辞世などを残した。この出来事は「黒木に続け」として搭乗員たちの士気を高め、搭乗員は昼の猛訓練と夜の研究会で操縦技術の習得に努め（不適正と認められた者は即座に後回しにされた）、技術を習得した優秀な者から順次出撃していった。同『年九月下旬までに回天の整備が進み、「玄作戦」が立案される。それと関連し、九月二十七日

に藤森は中澤佑軍令部第一部長に報告を行う。回天については「回天命中確度七十五%（と考えられる）。冷走の原因除去に努力している。」と述べた。同年『十月からは、回天を搭載させるために改造した第十五潜水隊の三隻の潜水艦によって周防灘で最後の総合訓練を実施し、十月下旬には連合艦隊司令長官から回天による特別攻撃命令が発せられた。第六艦隊司令部で「玄作戦」と命名され、攻撃隊（残された主力潜水艦のほぼ総戦力による特別編成隊）は「菊水隊」と命名された。このうち、ウルシー泊地攻撃隊は給油艦「ミシシネワ」（USS Missisnewa, AO-59）を撃沈して初戦果をあげた。『最初の玄作戦における軍令部報告の中で回天について、「安全潜航深度増大が必要。熱走後一旦停止すると冷走になるので熱走が続くようにしたい」といった指摘があった。同年『十一月八日、「玄作戦」のために大津島基地を出撃した菊水隊（母艦潜水艦として伊三六潜、伊三七潜、伊四七潜に各四基ずつ搭載）の十二基が回天特攻の初陣である。菊水隊の回天搭載潜水艦三隻のうち、伊三六潜と伊四七潜の二艦はアメリカ軍機動部隊の前進根拠地であった西カロリン諸島のウルシー泊地を、伊三七潜はパラオのコッソル水道に停泊中の敵艦隊を目指して出撃した。』『回天の最初の作戦であるウルシー泊地攻撃「菊水隊作戦」が一九四四年十一月二十日決行された。二十日、伊四七潜から四基全て、伊三六潜からは四基中の一基の計五基の回天が、環礁内に停泊中の二百隻余りの艦艇を目指して発進した』が、『ブグリュー島の南側で二基の回天が珊瑚礁に座礁して自爆』、『伊三六潜は、四時十五分発進予定地点のマーシュ島』附近に到着したものの、『三基は故障で潜水艦から離れず、今西艇だけが四時五十四分に発進した。その後、これらの回天のうち、一基は湾外でムガイ水道前面で駆逐艦ケースより衝角攻撃を受けて沈没、残る二基が泊地進入に成功し、一基が五時四十七分にミシシネワへ命中（混載していたガソリンに引火して爆発・炎上、一時間後に沈没、戦死五十名）』、『その後、最後の一基は軽巡洋艦モービル（USS Mobile, CL-63）に向けて突入。潜望鏡によって二〜四ノットの速力で直進してくる回天を発見したモービルが、五インチ砲と四〇ミリ機銃で射撃を開始。機銃弾が命中、五インチ砲弾の至近弾を受けたため突入コースに入りながら海底に突入り、のちに護衛駆逐艦ロールの爆雷攻撃によって六時五十三分に完全に破壊された（隊員と女学生が差入れた座布団が海面に上がった）』、『伊三七潜はパラオ・コッソル水道に向かっ

たがパラオ本島北方で発見され』、撃沈（推定）、『伊三七潜の乗員と隊員は全員戦死と認定された』。『この菊水隊の泊地攻撃で、アメリカ軍の泊地の警戒が厳重になった。生還した伊三六と伊四七の報告を元に研究会が開かれ、潜水艦三隻の喪失と米軍の対抗策を予想して泊地攻撃への懸念が表明されたが、上層部は聞き入れず金剛隊が編成された。当山全信海軍少佐（伊四八艦長）の抗議に、艦隊司令部は「精神力で勝て」と命令している。黒木、仁科の進言どおりに水上航走艦を狙う作戦へと変更されたのは、金剛隊による泊地攻撃の後であった』。同年『十一月八日に菊水隊として、ウルシー、パラオ方面に初出撃して以降一九四五年八月まで金剛隊、千早隊、神武隊、多々良隊、天武隊、振武隊、轟隊、多聞隊、神州隊の二十八隊（潜水艦三十二隻、回天百四十八基、途中帰投含む）の出撃が行われている。同一の隊が複数回の出撃を行ったり、〇〇隊などは呼称であるためこのような数字になる。最初の菊水隊のみが一回限りの出撃である。目的地は、ニューギニアからマリアナ諸島、沖縄諸島にかけてである』。『以後は、次第にアメリカ軍の停泊地の警備が厳重となったため、洋上攻撃へ作戦変更を余儀なくされた。菊水隊以降は金剛隊、千早隊、神武隊、多々良隊、天武隊、振武隊、轟隊、多聞隊と終戦の一週間前まで、計一四八基の回天が出撃した。すでに制海権も制空権も完全に敵の手中にあり、母艦となる大型潜水艦は次々と撃沈されていった』。昭和二〇（一九四五）年『三月以降は敵本土上陸に備えて、陸上基地よりの出撃や施設設営とともに、スロープを設けられた旧式の巡洋艦（北上）や、松型駆逐艦、一等輸送艦からの発射訓練も行われたが、戦地へ輸送中に撃沈されたり、出撃前に終戦となった』。『終戦を迎えたあと、必死を要求される特攻兵器のイメージから「強制的に搭乗員にさせられた」「ハッチは中からは開けられない」「戦果は皆無」などの作戦に対する否定的な面、または事実と異なる説が強調された。特にハッチに関しては中から手動で開けられ、外からは工具を使用するものの開閉は可能だった。また、搭乗員は操縦の特異性から転用ができないため、全てが回天戦のために選抜されて訓練を受けた優秀な若い志願兵だった。ただし、戦時の日本において事実上、志願を拒否することは著しく困難で、戦果に関しては四十九基出撃の結果に対し撃沈四隻と乏しく、回天を輸送し発進させる潜水艦の損耗率も高かった』。『多門隊の回天は後に沖縄海域で故障艇一を除き全て出撃した』。以下、「戦果」の項。『回

天の総合戦果は、判明している戦果は給油艦ミシシネワ、護衛駆逐艦アンダーヒルなど撃沈三、大破一、小破四』に過ぎなかった（具体的なそれはリンク先に示されてある）。『本来の目標であった米正規空母・戦艦に対する戦果はなかった。この期待はずれの結果に対し、アメリカ軍が意図的に戦果を隠蔽しているのではと疑問視している旧軍の回天関係者（隊員や潜水艦長、参謀）がいた。吉田俊雄（海軍中佐、参謀）は、終戦時ダグラス・マッカーサー司令部のリチャード・サザーランド参謀長が「回天搭載の潜水艦が行動中かどうか」について質問され、行動中と聞くと動揺したというエピソードを紹介し、米軍による情報隠蔽の根拠としている。また全ての文書が公開対象となっておらず、民間輸送船に関してはアメリカ軍での記録がないため、上記戦果はあくまで現在確認されているものということになり、これから新しい戦果及び戦闘状況が判明される可能性もある』。『当時の日本軍側は回天発射後の母艦からの潜望鏡による火柱、爆煙の目視、爆発音の聴取など間接的な形でしか戦果を観察できず、そこに一発進から三十分以内での爆発音は、突入時刻と一致するため敵突撃の可能性は濃厚』や「燃料の切れる一時間前後での爆発音は自爆の可能性が高い」など推定を多く重ねざるを得ず、さらに大戦果を挙げたい、大戦果を挙げたと信じた戦場心理が作用していたため、戦果報告は現実とかけ離れたものにならざるを得なかった』。『搭乗員は突撃の際には安全装置を外し、敵艦への突入角度が足りなくても突入と同時に信管が作動するように自爆装置に腕をかけるなどしていたが、個々人の覚悟と工夫だけでは限界があった』。搭乗員は『予備士官、予科練出身者は募集による志願』であったが、『作戦は奇襲で、軍機密事項の段階であったため、敵への情報流出を防ぐ必要から、兵器に関する具体的な事柄は一切触れられなかった。募集要綱には「右特殊兵器は挺身肉薄一撃必殺を期するものにしてその性能上特に危険を伴うもの」、「選抜せられたる者はおおむね三月及至六月間別に定められたる部隊において教育訓練を受けたる上直に第一線に進出する予定なり」とある。それ以上の説明は口頭でなされた。土浦海軍航空隊の予科練習生の場合、応募者二千余名の中から、身体健康で意志強固な者、攻撃精神旺盛で責任感の強い者、家庭的に後顧の憂いのない者を基準に百名が選抜された』。昭和六三（一九八八）年二月に作成された『回天名簿によると、最終的には兵学校・機関学校百二十一名、予備士官二百四十四名、兵科下士官十名、

予科練千五十名の、計千四百二十六名（うち転出五十一名）が着任し』ている。『終戦までに訓練を受けた回天搭乗員は、海軍兵学校、海軍機関学校、予科練、予備学生など、千三百七十五人であったが、実際に出击戦死した者は八十七名（うち発進戦死四十九名）、訓練中に殉職した者は十五名、終戦により自決した者は二名。回天による戦没者は、特攻隊員の他にも整備員などの関係者もあり、それらを含めると百四十五人になった。訓練中の死者は特攻兵器の中で最も多い。搭乗員は志願によって選抜され、戦死者の平均年齢は二十一・一歳だった。』坂本雅俊（回天特攻要員）は「覚悟はしていたが見た時はぎよつとした」という。竹林博（回天特攻要員）は「戦争の再現は望まないし美化もしないし命も粗末に考えないが、日本のためどんなものでも行くという思いで殉じた若者がいたことを正しく歴史に刻みこんでほしい」と戦後語っている』（以下、「訓練基地」の項があるが中略する）。「基地回天隊」の項。『回天を搭載する大型潜水艦が次々と失われ、また敵の本土上陸が現実問題となってきたことから、日本本土の沿岸に回天を配備する「基地回天隊」が組織された。』『第一回天隊八基および搭乗員、整備員、基地員の全百二十七名は一九四五年三月に第十八号輸送艦で沖縄に向け進出したが、同十八日に沖縄南西の慶良間諸島付近で米潜水艦「スプリンガー」に撃沈され全滅（推定）した。第二回天隊八基は一九四五年五月に伊豆諸島の八丈島の二ヶ所の収容壕に配備され、敵艦隊の接近を待ったが、出撃する機会なく終戦を迎えた。』『そのほか、第三・第五・第八・第九回天隊は宮崎県、第四・第六・第七回天隊は高知県、第十一回天隊は愛媛県、第十二回天隊は千葉県、第十六回天隊は和歌山県に配備され、いずれも敵の上陸予想地点を射程内に捕らえる場所にあった』とある。以下に回天の配置一覧があるが、鹿児島に配された部隊では「第十回天隊」（指揮官は佐賀正一）回天四基で鹿児島県内ノ浦とのみあり、桜島は出ないが、鹿児島県肝付町観光協会の公式サイト内に「[人間魚雷跡](#)」のページがあり、同町の小串地区には『岩場を人工的に掘削した人間魚雷「回天」の発射基地があり』、三基の『発射場が残っています。当時は基体を送り出すレールも敷設されていたようですが、戦後台風で無くなったと言われています』とあって、先に引いた「松岡正剛の千夜千冊」の[第一一六一夜『幻化』梅崎春生](#)」の記載その他などからも、[桜島や坊津の海軍秘密基地](#)に回天が配備されていた、或いは配備が予定されていた可能性は極めて高いと思

われる。

「震洋艇」大日本帝国海軍が開発した、搭乗員が乗り込んで操縦し、目標艦艇に体当たり攻撃を敢行する海軍のモーター・ボート特攻兵器。ウィキの「震洋」より引く(アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した。下線やぶちゃん)。『一九四四年十月下旬レイテ沖海戦に投入された神風特別攻撃隊より半年以上前に本特攻兵器の開発は始まった。小型のベニヤ板製モーターボートの船内艇首部に炸薬を搭載し、搭乗員が乗り込んで操縦して目標艦艇に体当たり攻撃を敢行する。「震洋」の名称は、特攻部長大森仙太郎少将が明治維新の船名を取って命名したもの。秘匿名称は「〇四(〇の中に四)金物」(マルヨンかなもの)、〇四兵器。マルレと合わせて「〇ハ」とも呼ばれた』『震洋と共に運用された陸軍の攻撃艇マルレ』(四式肉薄攻撃艇)もあつた。『二人乗りのタイプには機銃一〜二丁が搭載され、指揮官艇として使用された。戦争末期は敵艦船の銃座増加に伴い、これを破壊し到達するために二発のロケット弾が搭載された』。昭和一八(一九四三年)、『黒島亀人連合艦隊主席参謀は、軍令部に対しモーターボートに爆薬を装備して敵艦に激突させる方法はないかと語っていた』が、この後の昭和一九(一九四四年)年四月四日、『黒島亀人軍令部二部部長は「作戦上急速実現を要望する兵力」と題した提案の中で、装甲爆破艇(震洋)の開発を主張した。この発案は軍令部内で検討された後、海軍省へ各種緊急実験が要望された。艦政本部において〇四兵器として他の特攻兵器とともに担当主務部を定め、特殊緊急実験が行われた』。『以上の経緯から、艦政本部第四部が主務となり設計を開始した。船体は量産を考慮し木製とし、エンジンにはトヨタの四トン積トラックの自動車エンジンを設計を強化した上で採用、速力は最低二〇ノット以上、三〇ノットを目指した。爆装については横須賀海軍工廠による実験の結果、三百キログラムの爆薬であれば水上爆発でも喫水線下に約三メートルの破口を生じ、商船クラスであれば撃沈できるとの結果が出たが、震洋の小型船体では三百キログラムの爆薬の搭載は無理であり、炸薬量を二百五十キログラムに減らした上で直ちに試作にかかった』。『試作艇は木造艇五隻と極薄鋼板艇二隻が作られ、船体は魚雷艇の船型を基礎とし、V型船底を持つものであった。これらは一九四四年五月二十七日の海軍記念日に完成し、直ちに試験が開始されたが耐波性が不足していることが判明、艇首を

改良した。この他は所期の性能を發揮し、八月二十八日に正式採用された。「震洋」はこの際に与えられた名称で、またこの時点の艇が一型艇である。この直後、二人乗りの五型艇も開発され、生産された。さらにロケット推進式の六型艇（ベニヤ製）、七型艇（金属製）、魚雷二本装備の八型艇が開発されていたが、これらは実用に至らなかった。震洋は特攻艇として開発されたが、設計の初期から舵輪固定装置を搭載しており、搭乗員は航空救命胴衣を着て船外後方に脱出できるようにもなっていた。武装は一型艇で二百五十キログラムの爆薬の他、『十二糶<sup>セナ</sup>二八連装噴進砲（日本海軍の開発したロケットランチャー）』『二基を搭載していた。また五型艇はこれに十三ミリ機銃一挺を追加し、更に一部に無線電話装置が装備された』。『設計時から量産を考慮して設計された為、製造が比較的容易であり、民間軍需工場でも生産された。月間生産数は終戦までに百五十〜七百隻、総生産数は終戦時までに各型合わせて六千百九十七隻である。設計主務部員班長を務めた牧野茂は、「震洋」は技術的に見て軽量高性能であり、満足できる設計だったと述べている』。同一九（一九四四）年『六月二十五日の時点ですでに震洋は量産を開始していた』。『大本営は捷号作戦に合わせて震洋隊の編成を急いだ。陸軍にも震洋と同種のマルレが存在したため密接な協調を取った。震洋とマルレは合わせて〇ハと称されることになる。一九四四年八月八日までに、海軍と陸軍との間で〇ハ運用に関する中央協定が結ばれた。大森仙太郎によれば、心配だったのは震洋搭乗員の志願者が集まるかという点であったが、思ったより多かったため安心したという』。『訓練においては、主に長崎県大村湾の水雷学校分校と鹿児島県江の浦の二箇所で開催が行われた。一九四四年八月十六日、最初の搭乗員五十名が卒業した。八月末には三百名が卒業している。その後は毎月四百名が卒業した。八月十六日の検討会では草鹿龍之介中将と井上成美中将が生還の可能性も考えてほしいと意見するが、最終的にそういった措置が取られることはなかった。〇四は一九四四年八月二十八日付で「震洋」として米内光政海軍大臣より認可、兵器として制式採用された』。『震洋部隊の戦時編成は行われず、海軍省は震洋を艦艇ではなく兵器扱いの形で部隊へ供給した』。『震洋は、陸軍海上挺進戦隊のマルレとともに、フィリピン、沖繩諸島、日本本土の太平洋岸に配備された。一九四五年にはフィリピンのルソン島リンガエン湾に上陸してきた米軍を迎撃し、幾ばくかの戦果を挙げている。沖

繩戦にも実戦投入された』が、『アメリカの資料によると、終戦まで連合国の艦船の損害は四隻だった』。『防衛司令官の直轄扱いではなく、攻撃の有無・成否・戦果などが部隊ごとの記録となった。実戦では部隊ごと全滅してしまうことが多いことから、特に実戦投入に関する実情は不明なところが多い。従って現行の文献では米軍の記録した水上特攻戦果に対し、震洋、マルレ共に配備された地域では日本軍側の戦果報告記録が無い場合(混乱の中で消失もしくは部隊ごと消滅した場合)「マルレもしくは震洋によるもの」とされることが非常に多い』。『日本本土決戦時には、入り江の奥の洞窟などから出撃することが計画され、日本各地の沿岸に基地が作られた。九州・川棚の訓練基地跡が残る』(川棚は長崎県東彼杵郡にある町で県の中央部に位置する)。終戦後の一九四五年八月十六日、高知県で第一二八震洋隊に出撃命令が下され、準備中に爆発事故が起こり百十一名が死亡している。『震洋は国内及び海外拠点各地に海上輸送により配備されたが、海上輸送線の途絶に伴い、敵潜水艦、航空機による移動中の被害が多かった。また出撃できぬまま陸戦に巻き込まれるケースも多く、こうした部隊は予期した形で実戦に参加しないうちに支援要員も含めてほとんどが戦死した。終戦時には本土決戦に対する備えとして四千隻近くが実戦配備にしていた。オーストラリアのシドニーの戦争記念博物館に一隻のみ保存されている』。『搭乗員は、他の特種兵器から転出となった搭乗員のほか、学徒兵、海軍飛行予科練習生出身者を中心とした。彼らは機体が無いために余剰となった航空隊員だった。震洋の戦死者は二千五百人以上である』。作家島尾敏雄は『第十八震洋隊を率いて加計呂麻島に駐屯するも、出撃前に終戦。当時の状況は、駐屯中に知り合った大平ミホ(後の妻)との逢瀬を描く『島の果て』、特攻隊員として出撃を待つ『出発は遂に訪れず』等に詳しい』。以下、リンク先の部隊基地を見ると、鹿児島(島嶼部が多い)は全部で十八の「震洋隊」を認めるが、桜島はない。但し、陸繋島である桜島の大隅半島の陸側である垂水たるみずには「第六一震洋隊」及び「第六四震洋隊」が配置されており、本篇冒頭で村上兵曹が配属されていた坊津には「第一二三震洋隊」が、このシーンの谷山には「第六三震洋隊」が配置されており、前の引用で『震洋部隊の戦時編成は行われず、海軍省は震洋を艦艇ではなく兵器扱いの形で部隊へ供給した』とあるから、回天同様、先に引いた「松岡正剛の千夜千冊」の第一一六一夜『幻化』梅崎春生の記載

その他などからも、桜島島内の海軍秘密基地に震洋が配備されていた、或いは配備が予定されていた可能性は極めて高いと思われる（下線やぶちゃん）。

「衣囊」海軍下士官兵が衣類を整理して入れておくキャンパス製の布袋。底のサイズは約四十センチメートル、長さは一メートル二十、三十七センチメートルにも及び、重さは三十キロ以上あった。中には軍服・事業服・作業服・軍靴ぐんかに至る主要携帯品総てを納め、転勤などの移動の際に肩に担いで持ち運んだ。黒色の外囊がいのうと白い内囊うちの内があり、普段は内囊を外囊の中に格納しておく。ここは、ルビー氏のブログ「太平洋戦争史と死後の世界を考える」の『衣囊

(いのう)と制裁 「蜂の巣」を参照させて貰った。

「一等兵」辞書類では旧陸軍の兵の階級で上等兵の下、二等兵の上の等級とし、ウィキの「一等兵」では『軍隊の階級の一。兵に区分され、上等兵の下、二等兵の上に位置する。一般に、軍人としての所作や小銃の運用技術等の基本的な訓練課程を終えると一等兵に昇任する』とあるので、やや不審思い（主人公の村上兵曹は海軍軍人。そもそも「兵曹」自体が旧海軍の下士官の称。上等・一等・二等兵曹の三階級があった）、特攻志願で陸軍の少年航空兵として一気に一等兵となった父に聴いたところ、『敗戦時の海軍では、最下級を「二等水兵」（陸軍は二等兵）、次は一等水兵（陸軍は一等兵）、次は三等水兵（陸軍は二等兵）、次は兵長（昔は四等兵だったらしい。陸軍は兵長）で、要するに陸・海の階級名称を統一したのだろう。元はイギリスか、ドイツの軍隊組織をコピーしたのだと思う』とのことであった。『姫路城下の焼け野原の駅前で警備に立っていたら、二等兵のおっさんに敬礼され、ドギマギした哀れな思い出があります』と語った。因みに当時の父は満十六歳だった。海軍内の通称では「水」を略して「一等兵」と呼称していたものであろう。

「袴腰」はかまこし現在の鹿児島県鹿児島市桜島横山町。たけがし桜島山の手前に、台形のように見える高台部分を古くから「袴腰」と呼んだ。現在の桜島の玄関となっていて、桜島港は別名で袴腰港とも呼ぶ。

「蟬」分布域及び時期、それから作品の後半になってから有翅昆虫亜綱半翅（カメムシ）目頸吻亜目セミ型下目セミ上科セミ科セミ亜科ツクツクボウシ族ツクツクボウシ属ツクツクボウシ *Meimuna opalifera* が重要な存在として登場してくることから、この蟬はセミ亜科エ

ゾゼミ族クマゼミ属クマゼミ *Cryptotympana facialis* ととっておく。後で「熊蟬が、あちらこちらにの樹に止って、ここを先途と鳴いていた」とも出る。鳴き声は「ちちり」で。

「道から急角度にそそり立つ崖に、大きな洞窟を七つ八つも連ね、枯れた樹などで下手な擬装をしている」「擬装」は偽装に同じい。ここは軍事用語で、所謂、カムフラージュ (camouflage: 第一次世界大戦で航空偵察が登場するようになった際、フランス語の「変装する」の意の「camoufler」(カムフレ)が英語化したもの)、軍事行動や軍事目標を敵から隠蔽する目的や敵の判断を誤らせるために用いる、周囲の物と似た色や形にして姿を見分け難くすること。迷彩彩色や擬装網である。「松岡正剛の千夜千冊」の第二一六一夜『[幻化](#)』[梅崎春生](#)」に、『桜島には洞窟陣地が待っていた。タリバンが隠れるような網の目状に全長2000メートルにおよんでいる洞窟である』とある。また、本作の場面展開上、ロケーションを確認しておくのがよいと思われるので、底本の本多秋五氏の「解説」にある、以下の部分を引用しておく。『部隊の本部は、崖下に大きな洞窟を七つ八つ掘り連らねたなかに入り、通信科は山の中腹以上に掘った洞窟にある。すなわち、頂上に近い洞窟に送信所と居住区があり、それから一段さがって、中腹の洞窟に受信所と暗号室がある。村上兵曹の直接の上官である吉良兵曹長は暗い洞窟のなかに居り、見張り兵は山頂の見晴らしのいい場所にゐる』。

「参差」互いに入り交るさま。また、高低・長短などがあって不揃いなさま。「参」は、長いさま・群がり立つさま・それらが不揃いなさまの謂いであり、「差」は等しくない・揃わないの謂いである。

「准士官」下士官出身者で士官に準じる待遇を受ける者の総称。階級名としては准尉・特務曹長・兵曹長などの語が当てられることが多い。大正九(一九二〇)年四月一日以降はそれまでの海軍上等兵曹などの官名を改め、海軍兵曹長又は海軍(機関・軍楽・船匠・看護・主計)兵曹長とすることとなり、海軍廃止時には海軍兵曹長のほか、飛行・整備・機関・工作・軍楽・衛生・主計・技術・法務の各兵曹長が置かれていた([ウィキの「准士官」](#)に拠る)。

「グラマン」通常、グラマン社が設計し、アメリカ海軍が第二次世界大戦中盤以降に使用した艦上戦闘機 F6F ヘルキャット (Grumman F6F Hellcat) 或いは F4U コルセア (F4U

[Corsair](#)。ウィキの「F6F (航空機)」から引く(アラビア数字の一部を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した)。アメリカ海軍の本命は一九四〇年に初飛行したF4Uコルセアの方であったが、実際には開発時期が遅いこちらが艦上戦闘機の主力となった。『愛称のヘルキャットとは、直訳すると「地獄の猫」であるが、「性悪女」「意地の悪い女」という意味がある』。仕様は乗員一名で全長一〇・二四メートル／全幅一三・〇六メートル／全高四・一一メートル／運用重量五千七百四十キログラム／最大離陸重量：六千九百九十キログラム／最高速度：時速六百十二キロメートル(高度七千メートル時)／航続距離：千五百二十〜二千五百キロメートル。武装は、ブローニング AN/M2 12.7mm 機関銃六基で一銃あたり弾丸四百発(又は AN-M2 20mm 機関砲二基で一銃あたり弾丸二百二十五発)、胴下搭載で九百七キロ爆弾一発又は MK13 航空魚雷一発、翼下搭載で四百五十キロ爆弾二発又は二百二十七キロ爆弾四発又は一一〇キロ爆弾八発又は五インチ HYAR ロケット弾六発又はティニー・タイム大型空対地ロケット弾二発を装備可能。『グラマン社によりアメリカ海軍の主力艦上戦闘機となったF4Fの後継機として開発された。開発は』一九三八年からで、『太平洋戦争の開戦に伴い、一九四二年一月七日には、試作機が完成していないにもかかわらず、千八十機の量産契約が結ばれ』ている。『F4Fがパイロットから頑丈さを評価されたことを確認し、F6Fも優美なものではなく、単純でありながら頑丈に作られた。機体の形も製造しやすいことを目的として、骨張った形状となった。後方にスライドして開くレイザーバック型のキャノピーを装備したため後方視界は決して良好ではなかったが、広いコクピットが優れた前方視界をパイロットに提供した』。『F4Fと違って主翼の位置が中翼配置ではなく低翼配置になり、脚部の構造にも影響した。F6Fは主脚を後方に引き込みながら、九十度回転させて主翼に収めた。F4Fではパイロットがクランクを使って手で胴体に主脚を納めていたが、F6Fでは尾輪も含めて油圧で作動するようになった。これは、主脚の引き込みを面倒がっていたパイロットに歓迎された。初めてF6Fと交戦した零式艦上戦闘機のパイロットは、この低翼のためすぐにF4Fとは違う機体だと判別できたと述べている』。『防弾フロントガラスの他、九十六キログラムに及ぶ装甲がコクピットに張り巡らされた。同様の装甲が、燃料タンクとエンジンにも施された。胴体内には二百二十七リット

ルの燃料タンクがパイロットの座席下にあり、両翼にはそれぞれ三百三十一リットルの翼内燃料タンクを配した。これだけでF4Fの二倍に近い燃料積載量を確保できたが、さらに胴体下に容量五百六十八リットルの増槽を装備することもできた。『全般的に言えば、野心的な新技術・新設計は盛り込まれず、F4Fの設計思想そのままの発展形であった。特に主脚を胴体に収容するためあえて大きくされたF4Fまでの胴体設計主法が、主脚を主翼に収納する本機においても、そのまま踏襲されている。そのため斬新な設計により高性能を示しながら、種々の問題を抱え「航空母艦に搭載されるための機体設計をしなかった欠陥機」とさえ称されたF4Uと異なり、早期に艦上戦闘機として実戦化された。』癖がなく未熟なパイロットにも扱いやすい操縦性と、生残率を高めるパイロット背面の堅牢な装甲板、自動防漏タンクなどの装備に加え、見た目に反し日本軍搭乗員にも一目置かれるほどの良好な運動性能があり、格闘戦を得意とする日本の戦闘機を撃破するには最適の機体で、折畳み式の主翼を備え、一隻の航空母艦に多数が搭載可能であったこともあって大戦中盤以降、機動部隊の主力戦闘機として活躍し、日本の航空兵力殲滅に最も貢献した戦闘機となった。F4Fの経験を踏まえての、無難で堅実な設計が、期せずして対日本機に最適の性能を発揮する事になったのである。『弱点は二千馬力級の戦闘機としては低速だった事であるが、それでも零戦や隼など、日本の千馬力級戦闘機より明らかに優速であり、必要にして十分であった。限られた出力の発動機で最大限の性能を発揮するため極力まで軽量化された零戦に対し、大出力の発動機を得て余裕のある設計がなされたF6Fは全く正反対の性格の戦闘機であり、日米の戦闘機設計に対する思想の差を象徴しているとも言える。』レーダーを搭載したタイプのF6Fは『アメリカ海軍主力雷撃機『TBFAベンジャー』と組んで、対潜攻撃のハンター&キラー戦術におけるハンター（搜索担当）機としても活躍した。また単座艦上戦闘機でありながら、レーダー装備の艦上夜間戦闘機（FGF-5N）としても運用された。一部の空母が夜戦専用空母にさえなったという。』前述の通り、あくまでF4Uの「保険機」であったため、基本性能に勝るF4Uが艦載機として太平洋戦争終盤に配備されるようになると徐々に第一線からは引き揚げられ、第二次大戦が終結すると急速に退役した。終戦の報を受け、搭載していたF6Fを海に投棄して帰投した護衛空母もいたことが当時の搭乗員のイ

ンタビューとして記録されている』とある。『米軍の公式記録によれば、太平洋戦争におけるF6Fと日本軍機（零戦並びにその後継機中心）のキルレシオ』（Kill Ratio：撃墜対被撃墜比率。空中戦を行った際に彼我に発生した損害比率を示す軍事用語）『は十九対一とされており、圧倒的な戦績を残している。海軍部隊が空中戦で撃墜した六千四百七十七機の敵機のうち、四千九百四十七機はF6Fによって撃墜されたものである。海兵隊が運用した陸上基地のヘルキャットを加えると、この数は五千百五十六機に達する』。『ただし、こうした空戦記録は、アメリカ海軍に限った話ではなく、自軍の戦果を過大に見積もる傾向がある。実際には撃墜していない敵機を、撃墜したと誤認する場合が多いためである。一九四五年三月十九日に生じたF6F・F4U・SB2C』（アメリカ海軍の主力爆撃機で愛称ヘルダイバー（Helldiver）『から編成された米艦上機百六十機と、第二四三海軍航空隊の紫電改五十八機との空戦では、米軍は撃墜五十、日本軍は撃墜五十八を主張した。実際の損害は、米軍十四機喪失、日本軍十五機喪失にすぎない』。「他機との比較」の「零戦」の項。『F6Fは大柄・大重量ながら二千馬力級のエンジンを搭載していたため、軽量ゆえに海面上昇率に優れる零戦と比較しても、ほぼ同じ海面上昇率であった。また、ズーム上昇は頑丈さゆえに急降下で速度を稼げるF6Fの方が零戦よりも優れていた。さらに、急降下性能、武装、防弾性能、横転性能、旋回性能も、時速四百キロメートル以下の速度域以外では零戦より優れていた』。『一方で、低速に陥る格闘戦では零戦に対して不利であったため、米軍は零戦との格闘戦を回避するよう戦闘マニュアルでパイロットに指示していた』。『また、零戦とF6Fが一對一の格闘戦を行い、双方弾薬を射ち尽くして引き分けた事例もある』。「コルセア」との比較。『コルセアの初飛行はF6Fよりも約二年早く、最高速度もF6Fに勝っていた。しかしながら着艦性能が悪く艦上戦闘機としての運用には難があり、F4Fの後継の座はF6Fに譲らざるを得なかった』。『なお、その後は改良によってF4Uも艦上戦闘機としての運用が可能になり、F6Fを置き換えて大戦末期から戦後にかけてのアメリカ海軍の主力戦闘機・戦闘爆撃機となるが、運動性が高いF6Fを「手強い相手」としていた日本機のパイロットからは、むしろF4Uは相対的には易しい相手であった』とあるから、この「グラ

マン」は「トムキャット」ではなく「コルセア」の可能性もあるが、[ウィキの「F4U（航](#)

「空機」をリンクさせてこの注は終りとする。

「巡検ラツパ」大日本帝国海軍於ける日課の一つである巡検を知らせるラツパ。巡検は消灯前に海上にあつては副長・甲板士官・先任衛兵伍長が艦船内の点検を行うことを言う。初夜巡検とも称した。調べた限りでは、巡検時間は部隊や勤務地及び季節によって異なっていたらしい。ルビー氏のブログ「太平洋戦争史と死後の世界を考える」の「巡検」によれば、例えば夏季が二〇時三〇分であつたら、冬季は三十分早く二〇時に開始された、とある。また、巡検喇叭はそれを事前に知らせるものであるから十五分前に鳴らされたとあるので、このルビー氏の例（あくまで例であるが）このシークエンスの時間を八時過ぎ辺りに比定するこゝとは出来ることになる。こちらで聴ける。」

こうして、私の桜島の生活が始まった。

昼間は二直制。夜は三直制。そして午後六時から巡検時迄、昼直とも夜直ともつかぬ直があつて、それは午前の直に立ったものが当る仕組になつていた。だから、多い日は一日十二時間の当直に立たねばならなかつた。それも電報量が多いという訳ではない。電信員の技術が落ちて来たためと、暗号員の質の低下のために、たとえば昼間六時間の当直の間、一通の電報すら翻訳しかねているような暗号員がいる位であつた。もつとも此処の暗号員は大部分が志願兵で、十五歳というのもいた位だから、無理もないのであろう。その上悪いことには、昼間の当直でないときは、彼等は皆、壕掘りに使役しえきされていた。そのため夜の当直では、彼等はそろって居眠りし、一通の電報が交替の度にそのまま申し継がれ、朝になつても完全な翻訳が出来ていなかったりする。その責任はすべて当直下士官にかかつて来る。

暗号室は、受信室と一所の壕になつていて、丘の中腹にあつた。方角が悪いせいか、湿気が多くて、ひどくむし暑い。交替のとき入つて行くと、空気がにごつていて、いやな気持がした。だから之に、通風のための穴を一つ掘るといふのである。換気と涼風入れを兼ねた此の工事は、まこと良い思い付であつたに違ひなかつたが、ある日私が現場に行つて、私の直

の兵隊が働いているのを監督がてら、計算した結果に依れば、此の風穴が完成するのは少くとも三箇月はかかるのである。十一月頃になったら、さだめし涼しい風が吹きこむことであろうと、むしろ腹立たしく、私は兵隊に話しかけた。

「此の工事は誰の命令だね」

「吉良兵曹長です」

「それまで此処が保つと思ふのかね」

その兵は、もつこをわきに置いて、私の前に立った。

「此の穴が出来上らないうちに、米軍が上陸して来ますか」

真面目な表情であった。十五歳になるといふ少年暗号員である。私は莨を深く吸い込みながら、聞いた。

「勝つと思うか？」

「勝つ、と思います」

童話の世界のように、疑いのない表情であった。ふつと暗いものを感じ、私は掌をふって作業を始めるように合図した。そのとき、私は不機嫌な顔をしていたに違いない。私は立ち上り、莨を踏み消した。そしてあるき出した。

だらだら坂を登り切ると、丘の頂上は喬木の疎林となり、その間を縫う径を通るとき、暑い午後の日射は私の額にそそぎ、汗が絶え間なくしたたった。林をぬけると、やや広闊な草原があった。大きな栗の木が、その中央に生えていた。その木の下に、一人兵隊がいて、私の聲音にびっくりしたように振り返った。

四十を越したか越さない位の、背の低い男であったが、私はふと彼の手にした双眼鏡に目を止めた。私の不審そうな視線に、男は人なつこそうな笑いをちらりと見せて、はっきりした声で言った。

「見張です」

そう言えば、栗の木の幹を利用して電話が設けてあり、此の草原からは湾内も大空も一望の中にあつた。草いきれの中を、私はその男に近づいた。

「あいているなら、双眼鏡を貸して呉れないか」

「ええ、いいですよ。お使いなさい」

双眼鏡を受取った。ずっしりと重かった。眼に当てて、ゆるゆる視野を移動した。

大正初年の爆発によって海水になだれ入った溶岩の岬が、すぐ目の前にあった。そのこちらが軍用の船着広場で、中央に中世紀の塔に似た放水塔があり、それに群れて水をくんだり洗濯したりしている兵たちの姿が見えた。そして油を流したような海。船着場にある発動機船、そして私の頭の回転につれて、双眼鏡の視野に、大きく桜島岳の全貌が浮び上って来た。

それは、青いものが一本もない、代赭色たいしやの巨大な土塊の堆積たいせきであった。赤く焼けた溶岩の、不気味なほど莫大なつみ重なりであった。もはや之は山というものではなかった。双眼鏡のレンズのせいか、岩肌の陰影がどぎつく浮き、非情の強さで私の眼を圧迫した。憑つかれたように私はそれに見入っていた。

「ちよっと」

低い押しつけられたような声であった。私は思わず双眼鏡をはなして、その男の顔を見た。中腰の姿勢で、眼を据え、耳を立てている。

「飛行機です」

男は私から双眼鏡を受取ると、南の空に目を向けた。私には何も聞えない。ただ蟬の音が降るようにはげしかった。

空には雲がなかった。太陽はきらきら輝きながら、虚むなしい速度で回転していた。その大空の何処かを、鋭く風を切って、飛行機が近づいて来る気配けはいがあった。

男は、双眼鏡を眼から離すと、栗の木の電話機に飛びついた。呼鈴をならした。此のような山の中で聞く呼鈴の音は、妙に非現実的に響いた。

「グラマン一機、ええ、グラマン一機、鹿屋上空。針路、針路北北西——」

その時、突然のように、冴さえた金属性の響きが、微かながら私の耳朶じだをとらえた。私が空を振り仰あごうとしたとき、男の手が私の肱ひじをとらえた。

「待避、待避しなくてはいけません」

栗の木から五米メートル位離れた、灌木の茂みのそばに、一寸した窪地があつて、私達は少しあわててそこに走り込んだ。二人並んであおむけに寝た。胸が動悸どうきを打っている。

「これが、私の寝棺です」

男は低い声で言い、微かな笑い声を立てた。まこと、寝棺の形であった。二人では、狭すぎる。何か答えようとして、私が男の方に身体を動かしかけたとたん、空気を断ち切るような金属音が急に破裂するように増大し、轟然たる音の流れとなって私達の頭上をおおった。私の視野を、銀色に輝きながら、グラマンが大きく現われ、そして瞬時にして消えた。思わず身体を起しかけたとたん、引裂くような機銃の音が連続しておこり、そして止んだ。飛行機の爆音は見る見るうちに小さくなり、海のむこうに消えて行ったらしかった。飛行機の通りすぎる間、忘れてしまっていた蟬の音が、此の時になってよみがえって来た。男は身を起して、電話機についた。

「鹿児島方面に退去。ええ、退去しました」

暫くして待避もとへのサイレンが遠く山の下から聞えて来た。私も立ち上って、草原のはなに立ち、あたりを見下した。今迄あちこちに待避していたらしい人影が、道路や広場にぽつぽつと現われて来た。

私は男と並んで草原に身をなげ出してすわった。

「グラマンがよくやって来るね」

「今日は、まだ初めてですよ」

男は私の顔をちらと見て言った。

「兵曹は応召ですか」

「補充兵だよ」

「下士候補の？」

「そう。受けたくなかったけれど」

「兵隊でいるよりはいいでしょう」

男はそう言い、神経質な笑い声をたてた。

「蟬が、多いね」

「夜でも、うっかりすると鳴いているのですよ」

「つくつく法師は、まだかね」

「まだですよ。あれは八月十日すぎ」

男の表情に、いらいらした影が浮んで消えた、と思った。

「つくつく法師は、いやな蟬ですね」

男はそう言い、一寸間をおいて、

「私はね、あの蟬は苦手なんです。毎夏、あの蟬が鳴き出す時、いつも私は不幸なんです。変な言い方だけれど。——去年は、六月一日の応召。そして佐世保海兵団、御存じでしょう、十分隊。そこにいて、毎日いやな思いで苦労して、この先どうなることかと暗い思いをしてるとき、食事当番で炊炊所ほうすいじょの前に整列していると、その年初めてのつくつく法師がそばの木に取りついて、いやな声立てて鳴きましたよ。丁度、サイパンが陥おちた直後で、どうせ私達は南方の玉砕部隊だと、班長たちから言われていた時で——」

声が一寸途切れた。

「一昨年おとしもそうでした。その前の年も。いつも悲しい辛いことがあって、絶望していると、あの蟬が鳴き出すのです。あの鳴き声は、いやですねえ。何だか人間の声のようじゃないですか。へんに意味ありげに節をつけて、あれは蟬じゃないですよ。今年も、どのような瞬間にあの虫が鳴き出すかと思うと、いやな予感がしますよ」

暫く黙っていた。私が聞いた。

「で、見張には？」

「秋になって、見張の講習に行つたのです。いろいろつらいこともあつたのですよ」

「年取っていると、猶なほのことそうだろうね」

「年齢のせいだけでもありませんよ」

「判らない奴が多いからな」

男は黙っていた。

「志願兵。志願兵上りの下士官や兵曹長。こいつらがてんで同情がないから」

男はうなずいた。そして、低い、沈鬱な調子で言った。

「私は海軍に入って初めて、情緒というものを持たない人間を見つけて、ほんとに驚きましたよ。情緒、というものを持たない。彼等は、自分では人間だと思っている。人間ではない

ですね。何か、人間が内部に持つていなくてはならないもの、それが海軍生活をしているうち、すっかり退化してしまつて、蟻かなにか、そんな意志もない情緒もない動物みたいになつていのですよ」

「ふん、ふん」

「志願兵でやつて来る。油粕あぶらかすをしめ上げるようにしぼり上げられて、大事なものをなくしてしまふ。下士官になる。その傾向に、ますます磨きをかける。そして善行章を三本も四本もつけて、やつと兵曹長です。やつとこれで生活が出来る。女房を貰う。あとは特務少尉、中尉、と、役が上つて行くのを楽しみに、恩給の計算したり、退役後は佐世保の山の手に小さな家を建てて暮そうなどと空想してみたり。人間の、一番大切なものを失うことによつて、そんな生活を確保するわけですね。思えば、こんな苛烈な人生つてありますか。人間を失つて、生活を得る。そうまでしなくては、生きて行けないのですか。だから御覧なさい、兵曹長たちを。手のつけられない俗物になつてしまつてゐるか、またはこちこちにひからびた人間になつてゐるか、どちらかです」

「そうだね」

私は、吉良兵曹長のことを頭に思い浮べていた。彼は、ひからびた男でもなければ、また俗物でもない。全然違つた別の型の人間だ。志願兵の頃から、精神棒などで痛めつけられていた間、他の人間なら諦あきらめて忍従して行くところを、おそらくは胸に悲しい復讐の氣持を、自ら意識せずには育つて行つたにちがいない。人間の心の奥底にある極度に非情なものを、育つて行き磨いて行き、それを自我にまで拮あげて行つたに違いない。やつと兵曹長となり、一応の余裕が出来て、あたりを見廻した時、ひそかに育つて来た復讐の牙きばは、実は虚むなしいものに擬なせられてあつたことに気付いたに違いないのだ。彼は牙を、自分自身に突き刺すより仕方がなかつたのだ。彼の奇妙な性格も、異常な動作も、そして彼にとつて唯一の世界である海軍が、沖繩の戦終り、既に潰滅かいめつしたことによるいらいらした心情も、おそらくは皆そこにあるのだ。通信科の兵隊を集めての故もない制裁の場における、彼の偏執的な挙動を、私は腹の裏にまざまざと思ひ浮べていた。それは、二三日前のことであつた――

赤痢が流行していた。その日、暗号の兵隊が一人、野生の梨をもいで食べ、そして赤痢の

疑いで霧島病院に送られた。梨を食うことは、堅く軍医の禁ずるところであった。医務室でその兵と別れ、居住区に戻り夕食を私は食べていた。湾内で獲れるらしい細長い小さな魚の煮付を噛んでいたとき、私の背後を通り抜け、そして振り返った。吉良兵曹長であった。

「村上兵曹、山下はどうした」

「霧島行きに決まりました」

「梨を食ったというのは、本当か」

「本当らしいです」

山下というのは、その一等水兵の名である。吉良兵曹長の顔に、急に怒りの表情があらわれた。

「梨を食うなということは、度々兵隊に言っているではないか。近頃の兵隊は、気合は入っていない癖に、悪いことは一人前する」

押しつぶされたような声であった。じっと私の顔を凝視しながら、

「下士官も悪い。下士官がだらしないから、兵隊が我ままをする。俺の命令を聞きたくなければ、聞きたくなくなるようにしてやる。村上兵曹。兵隊を整理させろ」

私は黙っていた。一人が梨を食ったというかどで、残り全部の兵隊が制裁されることはまことに意味が無いことだ。数日間の此処での生活で、私は私の部下にあたる暗号兵たちに、ほのかな愛情を感じ始めていた。意味なく制裁されるような目に合せたくなかった。表情を変えず、私は頑固に押し黙っていた。吉良兵曹長は急に横をむくと、送信所の方に急ぎ足で入っていった。

私は元にもいいて、食事をつづけた。私は、応召以来、佐鎮さちんの各海兵团や佐世保通信隊や指宿いぶすき航空隊で、兵隊として過ごして来た。さまざまの屈辱の記憶は、なお胸に生々しい。思い出しても齒ざしりしたくなるような不快な思い出は、数限りない。自分が目に見えて卑屈な気持になって行くこと、それがおそろしかった。

（しかしもう死ぬという今になって、それが何であろう）

私は暗い気持で食事を終えた。壕を出、落日の径みちを降り、暗号室に入って行った。そして当直を交替した。

電報は多くなかった。今日の電報綴りを見ても、銀河一機どこそこを発ったとか、品物を何番号の貨車で送ったとか、あまり重要でない電報ばかりである。当直士官に立っている暗号士がうつらうつら居眠りをしている。電信機の音が四辺あたりに聞える。電信兵の半ばは、予科練の兵隊である。練習機不足のため、通信兵に廻された連中なのだ。私は頬杖をついたまま、目を閉じた。

——先刻、夕焼の小径こみちを降りて来る時、静かな鹿兒島湾の上空を、古ぼけた練習機が飛んでいた。風に逆さかっているせいか、双翼をぶるぶるふるわせながら、極度にのろい速度で、丁度空を這っているように見えた。特攻隊に此の練習機を使用していることを、二三日前は聞いた。それから目を閉じたいような気持で居りながら、目を外そらせなかったのだ。その機に搭乗している若い飛行士のことを想像していた。

私は眼を開いた。坊津の基地にいた時、水上特攻隊員を見たことがある。基地隊を遠く離れた国民学校の校舎を借りて、彼等は生活していた。私は一度そこを通ったことがある。国民学校の前に茶店風の家があって、その前に縁台を置き、二三人の特攻隊員が腰かけ、酒をのんでいた。二十歳前後の若者である。白い絹のマフラーが、変に野暮まいったく見えた。皆、皮膚のざらざらした、そして荒すさんだ表情をしていた。その中の一人は、何か猥雑わいざつな調子で流行歌を甲高かんだかい声で歌っていた。何か言っては笑い合うその声に、何とも言えないいやな響きがあった。

(これが、特攻隊員か)

丁度、色気付いた田舎の青年の感じであった。わざと帽子を阿弥陀あみだにかぶったり、白いマフラーを伊達者だてしやらしく纏まとえば纏まとうほど、泥臭く野暮に見えた。遠くから見ている私の方をむいて、

「何を見ているんだ。此の野郎」

眼けわしを陰くくして叫んだ。私を設営隊の新兵とでも思ったのだろう。

私の胸に湧き上って来たのは、悲しみとも憤りともつかぬ感情であった。此の気持だけは、どうにも整理がつかかねた。此の感じだけは、今なお、いやな後味を引いて私の胸に残っている。欣然と死おむむに赴むくということが、必ずしも透明な心情や環境で行われることでないこ

とは想像は出来たが、しかし眼まのあたりに見た此の風景は、何か嫌悪すべき体臭に満ちていた。基地隊の方に向つて、うなだれて私は帰りながら、美しく生きよう、死ぬ時は悔くない死に方をしよう、その事のみを思いつめていた。――

ふと気が付いて私はあたりを見廻した。暗号室の卓は、私の外二人の兵隊がいるだけで、あとの席には、「呂」の厚い暗号書や、乱数盤が組立てたままほうり出されているだけで、誰もいなかった。

「此の直ちよくはどうしたんだ。もう交替時間とはとくに過ぎているじゃないか」

一人の兵隊が顔を上げて答えた。

「皆来ていたのですが――」

「来ていて、どうしたんだ」

「居住区から呼びに来たのです。電報持っているものだけ残つて、手空てすききは全部来い、と言つて」

「誰が、呼んだのだ」

「吉良兵曹長、だそうです」

兵隊は、何かおどおどした調子で、そう答えた。私は、顔の表情が硬こわばつて来るのが、自分でもはっきり判つた。

兵隊を直接指導して行く立場にあるのは、下士官である。その任にあたる立場を、私が無視された、その事が口惜しかったのではない。もはや此処が戦場になるといふことが、時間の問題となつている現在にも拘らず、味方同士で何を傷きずつけ合う必要があるのだろう。そのことが哀しく胸に響いて来た。ここにいる二人の兵隊も、同僚が居住区で何をされているか、よく知っている。偶然、電報を翻訳していたそれだけの理由で、それから免まぬかされている。後ろめたさと漠然たる不安で、陰鬱な表情のまま、暗号書を繰っている。何かやり切れない、不快な気持が、私をいらいらさせた。

「よし、居住区に行つてみる」

誰にともなく私は眩くらき、立ち上つた。狭い通路を通り抜け、外はすでに黄昏たそがれであつた。

山道を走り登り、横に切れる小径へ降くだろうとしたとき、私は思わず立ち止つた。居住壕の入

口に、吉良兵曹長が立っていた。そして、居住壕前の海を見下す斜面に、兵達は皆両手を土に着け、「前へ支え」の姿勢をしていた。吉良兵曹長は、三尺程の棒を片手に下げ、腰を下げて地につけたりしようとするのを、大声出して怒鳴りつけていた。私は歩をゆるめながら、そこに近づいた。

その姿勢を余程長く兵達がつづけているということは、その姿勢のくずれ方や、手を楽なように置き換えようとする絶望的な努力の様子で、はっきり判った。彼等はそろって頭を垂れていた。黄昏の薄い光の中で、私は私の足許の兵隊の額から、脂汗がしたたり落ちるのをはつきりと見た。私は息が苦しくなった。新兵の時、私も何度も之をやらされた。常人よりも膂力の弱い私は、常に人一倍の苦痛を忍ばねばならなかった。その記憶が眼前の光景につながり、呼吸がつまるような気がした。私は、吉良兵曹長の顔をぬすみ見た。

乏しい光線の中で、吉良兵曹長の顔は、思わずぎよつとする位、青ざめて見えた。非常な苦痛を押しこらえているような不思議な表情が、彼の顔を歪めているようであった。眼だけが、偏執的に光りながら、伏せている兵隊の背にあちこち動いた。燃えるような瞳のいろであった。不意に振り返り、私の方を見た。

「村上兵曹。皆を立たせる」

そう言いすてると、棒を崖の下になげすてた。棍棒は岩角に二三度にぶい音を立てて、熊笹の谷間に落ちて行った。彼は立ち止り、一寸何か言いたそうにしたが、何も言わず、私に背を向け、大股に居住区に入って行った。幅の広い、やせた肩のあたりが、何となく淋しそうに見えた。

「立て」

兵達は、皆のろのろと大儀そうに立ち上った。疲労がそうさせるのか、皆一様な単純な表情であった。考える力を喪失した、言わば動物園の檻のけものようであった。妙に不気味な圧迫を私は感じながら、私は低い声で言った。

「当直の者は当直へ、残りは別れ」

当直の兵隊と一緒に暗号室への道を歩み出した。海の面だけが淡く暮れ残り、群れ立つ樹々の間は暗かった。兵達を立たせ、そして私が一席の訓戒を加えることを、吉良兵曹長は

予期したのだろうか。あるいは兵隊に苦痛をあたえたことだけで事足りたであろうか。私には判らなかつた。うしろに何か重い物を引き摺<sup>ず</sup>ったような歩き方で、居住区の中に消えて行った彼のうしろ姿が、奇妙に私の眼に沁<sup>し</sup>みついて離れなかつた。外<sup>ほか</sup>の下士官がやるように、自分たちが兵隊であつた折にやられたから、今兵隊に同じことをやる、といったような単純なものではないであろう。痼疾<sup>こじつ</sup>のように、吉良兵曹長の心に巣くう何物かが、彼をかり立てているようであつた。私の理解を絶した、おそらくは彼自身にも理解出来ない鬼のようなものが、彼の胸を荒れ狂っているようであつた。

(あの眼が、それだ)

新兵教育を受けた時、私の班長がやはり、性格の上では違っていたけれども、その類<sup>たぐい</sup>の眼を持った下士であつた。平常は温和な、そして発作的に残忍なふるまいをする。あとで何か事件を起して軍法会議に廻<sup>ま</sup>つたことを聞いた。私は此の男のことをふと思ひ出していた。

所詮、彼等は私と全く異つた世界に住む男達であつた。そして、私は、吉良兵曹長の中に住む鬼を、理解するには、あまりにも疲れ過ぎている。疲れていると言うよりは、そのような無縁のものを考えるより、私には、迫り来つつある自らの死のことが気になっていたのだ。桜島に来て以来、このことは常住私の心を遠くから鈍<sup>おび</sup>く脅<sup>おび</sup>やかし続けている。――

「やぶちゃん注：【以下はブログ記載時のものをそのまま載せている。】以上のパート以降は私の限られた時間を節約するため、本日(二〇一六年一月一日)、「青空文庫」で公開されたkompass氏入力・酒井裕二氏校正になる、講談社文芸文庫平成元(一九八九)年刊「桜島・日の果て・幻化」(私は所持しない)の電子データ「桜島」のベタ電子データを加工原型に使用させて戴いた。ここに謝意を表す。但し、基本的に底本の沖積舎版全集と当該電子データとの相違箇所は特に注記する予定はない。講談社文芸文庫版「桜島・日の果て・幻化」を私は所持していないからである。因みに、既に大きな相異箇所を発見しているので指摘しておく。本パート内の村上兵曹の心内語の「志願兵の頃から、精神棒などで痛めつけられていた間、他の人間なら諦<sup>あきら</sup>めて忍従して行くところを、おそらくは胸に悲しい復讐の気持を、自ら意識せず<sup>あきら</sup>に育てて行ったにちがいない。」という部分の「間」が、青空文庫版では、「志

願兵の頃から、精神棒などで痛めつけられていた人間、他の人間なら諦<sup>あきら</sup>めて忍従して行くところを、おそろくは胸に悲しい復讐の気持を、自ら意識せずに育てて行ったにちがいない。」(両所ともに下線はやぶちゃん)となっている。これは私の底本全集の「間」(あいだ)の方が自然である。その後の二〇一六年一月十五日に、本屋で当該文庫を立ち読みしたところ、当該文庫本は沖積舎版よりも前の新潮社版梅崎春生全集を底本としており、確かに当該部は『人間』となっているのを現認した。それでも私の見解に変更は、ない。

「昼間は二直制。夜は三直制」通常の海軍の「二直制」というのは三時間、「三直制」は二時間交代制を指すようであるが、ここで言う「昼間」「夜」の閉区間を考えないとその辛さはよく分からない。さるQ&Aサイトで見かけた海軍の日課表を参考に引いてみる(表記の一部を変更・追加した)。

○六::○○ 総員起こし(起床)  
○六::三〇 海軍体操  
○七::○○〃〇八::○○ 朝食  
○八::○○ 軍艦旗掲揚  
○八::○○〃一二::○○ 午前勤務  
一二::○○〃一三::○○ 昼食  
一三::○○〃一七::○○ 午後勤務  
一八::○○ 軍艦旗降納

一九::○○ 夕食  
二〇::○○ 巡検

巡検終了後に

「煙草盆出せ」

「明日の日課を知らず。午前〇〇、午後〇〇……」

以後、自由時間。

とある(この場合の巡検時間は前に示した例示ケースの冬時間である)。一つ確認出来るのは、ここで村上兵曹が「午後六時から巡検時迄、昼直とも夜直ともつかぬ直があつた」たるから、この日課表に単純に割り当てて居るならば、

「昼直」——午前六時から午後六時までの十二時間の閉期間  
で、次に、

「昼直とも夜直ともつかぬ直」——午後六時から午後八時までの二時間の閉期間  
があつて、

「夜直」——午後八時から翌日の午前六時までの十時間の閉期間  
ということになる。ということは、

「昼」「二直」というのは三時間交代として四区分  
「夜」「三直」というのは二時間交代として五区分

となる。しかも「昼直とも夜直ともつかぬ直」二時間には「午前の直に立ったものが当る仕組になっていた」とあるから、人員の数にもよるが、単純に全ての当直を総員が行うと考えるならば(普通はそうであるようだ)、最低でも七時間から、必ず交代をする(「昼直とも夜直ともつかぬ直」に就いたものがそのまま最初の「夜直」には就かないということ)として計算すると、確かに「多い日は一日十二時間の当直に立たねばならぬ」ということになることが理解出来る。これをきついと考えるのはしかし、まだ甘いようである。実際の海軍の艦船勤務の場合の当直は、海軍爺さんのブログ「これでいいのか?日本!!」の「[第4回 当直将校](#)」によれば、一日二十四時間中、十六〜十八時間も『艦橋に立ちツパナシである』とある。しかもこの海軍爺さん氏は将校で中尉で駆逐艦「雷」<sup>いかずち</sup>の航海長である(開戦前とある)。さらにこの記事を読むと、彼が疲労の余り、爆睡してしまい、取次が起しても起きなかった時には、艦長自らが「起すな」と指示して艦長自身が直をしたともあるのである。

「志願兵」[ウィキの「志願制度」](#)によれば(下線やぶちゃん)、大日本帝国の海軍の志願兵

の服役は、海軍『本人の志願により海軍志願兵令に基づいて採用され、全国から徴募するが、兵種は水兵、航空兵、機関兵、軍楽兵、看護兵、主計兵の』六種で、年齢十七年以上二十一年未満』のものについて行なう。ただし掌電信兵を志願する水兵は『十五年以上十九年未満、軍楽兵は十六年以上二十年未満。服役は現役五年、予備役（毎年一回の簡閲点呼や勤務演習を受けて在郷軍人会の入会を義務付けられた。現役人員に欠員が出た時は現役の余剰人員である帰休兵の次に召集された）四年及び後備兵役（常備兵役を終えた者が服す役で予備役の次に相当する。旧制の後備軍で後備兵役は一般には単に後備役と称する。昭和一六（一九四一）年十一月の改正で後備兵役は予備役と合一されて廃された）五年とし、後備役を終ったもので年齢四十年未満のものは第一国民兵に服させる。現役定限年齢は三十五年とし、四十年を服役の終期とする、とある。なお、陸軍（三種）のそれも引いておく。一つは「現役志願兵」で年齢十七年以上徴兵適齢未満のもので、『現役であることを志願するもの。二年在営させ、その現役は一般の現役兵として徴集されたものと同じ。ただし輜重兵、特務兵および補助看護兵は採用しない』（私の父はこれの少年航空兵であった。航空機の特攻隊志願であったが、結局、爆弾を抱えて戦車に飛び込む訓練ばかりさせられた。因みに彼は当時満十六歳であった）。次に「憲兵上等兵および楽手補」で、『兵役は現役・予備役・後備役とし、逐次これに服させる。その服役期間は現役は、憲兵は前服役期間を通算して』四年、『楽手補はこれを命じられた年の』十二月一日から起算して五年』であるが、いずれも志願によって延長することが出来る。予備役は現役を通算して』七年四ヶ月、『後備役は前服役を通算し』一七年四ヶ月である。但し、年齢四十年に『満ちる前に後備兵役を終ったものは第一国民兵役にあるものとみなされる』。最後は「年齢四十年を過ぎ志願により国民軍に編入された兵」でこれは当該期間、『第一国民兵にあるものとみなされ』たとある。

「もっこ」漢字では「畚」と書く。これは持籠もちこの転訛で、縄を網のように四角に編んで、その中央に石や土などを入れ、四隅を纏めるようにして担いで運ぶ道具を言う。

「大正初年の爆発」大正三（一九一四）年一月十二日に始まった桜島の噴火。凡そ一ヶ月間に亘って、繰り返し、頻繁に爆発が起こり、多量の溶岩が流出した。この一連の噴火による死者五十八名に及んだ。流出した溶岩の体積は約一・五立方キロメートル、溶岩に覆われた

面積は約九・二平方キロメートルに及び、『溶岩流は桜島の西側および南東側の海上に伸び、それまで海峡』（最大距離四百メートル・最深部百メートル）『で隔てられていた桜島と大隅半島とが陸続きになった。また、火山灰は九州から東北地方に及ぶ各地で観測され、軽石等を含む降下物の体積は』約〇・六立方キロメートル、『溶岩を含めた噴出物総量は』約二立方キロメートル（約三十二億トンで東京ドーム約千六百個分に相当）『に達した。噴火によって桜島の地盤が最大』約一・五メートル『沈降したことが噴火後の水準点測量によって確認され』ている、とある（以上はウィキの「桜島」に拠った。当時の噴火の経過と影響はさらにリンク先に詳細に述べられてある）。

「喬木」こうぼく 高木に同じい。

「岬」当時の桜島の海軍基地の位置がネット検索の中で、やっと判明した。はっとし——ぜろ氏のサイト「underZero」の「桜島海軍基地跡」である。写真見られ、地図上の位置も確認出来るので必見！ 具体的には鹿児島市桜島横山町で、現在の「桜島自然恐竜公園」となっている丘陵地帯の地下に広がっていたことが判る。同氏が説明板から起して呉れた部分を引用させて戴く。

#### 《引用開始》

ここは太平洋戦争末期、日本海軍の基地があった場所です。壕の高さ・幅はともに2〜3m程で、手掘りによって作られたトンネルが網の目状に張り巡らされています。総延長は約650m。壕の中には魚雷保管室や動力室がありました。この基地はアメリカ軍の本土上陸を阻止するために編成された海軍特攻戦隊の一つ「第五特攻戦隊」の司令部です。ここは近くには通信施設もあり、佐世保鎮守府や南九州一帯に配備された各突撃隊との連絡を行っていました。まさに本土決戦に備えた日本の海防の要だったのです。

また、この基地の通信兵として暗号解読などにあたっていたのが作家・梅崎春生です。彼はここで終戦を迎え、その時の体験をもとに戦争文学の傑作と言われる小説「桜島」を書きました。この基地は小説の舞台でもあり、「文学遺産」ともいえる場所なのです。

#### 《引用終了》

但し、そこに出る基地の配置図と、本文の前に出た、「居住区」は「崖下の洞窟より一回り

小さい入口が、やはり竹や樹で小うるさく擬装してあって、電線が岩肌を何本も這って居た。壕はU字形をしているらしかった。身体をかがめて入って行った」ところ、「壕の一番奥は送信所になっていて、発電機とか送信機がごちゃごちゃ置いてある。そこで電信の先任下士官などに会い、あいさつをした。送信所に到る通路が、いわば居住区の形で、寝台や卓子テーブルが並んでいた」といった描写から、**このリンク先に示された場所の上方が実際の舞台で、現在の「桜島自然恐竜公園」そのものが本作のロケーションであったと考えてよいように思われる。**——そして地図上のネット情報から——**この岬及び一帯の地名は——「方崎」**（ほうさき）**と**呼称する——ことが判明した。この遺跡は現在の桜島港フェリー・ターミナルから三百メートルほどの直近である。今度、必ず行ってみたい。

「そのこちらが軍用の船着広場」現在の桜島港の北方部に相当する。  
「放水塔」実物を想像出来ない。本来の目的は艦船の火災を消化するためのものか。識者の御教授を乞う。

「桜島岳」錦江湾にある東西約十二キロメートル・南北約十キロメートル・全周約五十五キロメートル・総面積約七十七平方キロメートルの火山。北岳が最高峰で標高千百七十七メートル、中岳が標高千六十メートル、南岳が標高千四十メートルで他に側火山が複数ある。峰と本基地（桜島港近傍）の位置関係は参照した**ウィキの「桜島」**の「集落と山の地図」の図で確認されたい。

「代赭色」（たいしや）くすんだ黄色い赤。やや明るい茶色。一般に赤土から作られる天然の酸化鉄顔料の色をさす。茶色よりも赤みと黄色みが少し強い。赤土は別名「赭」とも称し、中国の代州（だいちゅう）（現在の山西省東北部）で産出する赤土が有名だったことが漢名の由来。

「男は、双眼鏡を眼から離すと、栗の木の電話機に飛びついた。呼鈴をならした。此のような山の中で聞く呼鈴の音は、妙に非現実的に響いた」このシチュエーション自体が奇体で「非現実」というより、超現実的、シニールレアスティクである。その印象づけによって我々にこのロケーションが今はその広大な景色とともに不思議に沈澱する。春生の得意な伏線配置である。

「鹿屋」大隅半島の中央部に位置する鹿屋市。旧肝属郡郡役所がここに置かれて以降、近代

都市として発展したが、特に昭和一一（一九三六）年に市内（当時の鹿屋町・大始良村の境）

おおあいら

に『日本海軍航空隊の基地が置かれ、真珠湾攻撃訓練の中核地となり、第二次世界大戦中は特攻隊の出撃基地と』して有名であった。『戦後も海上自衛隊の鹿屋航空基地が置かれ、現在でも国防の一大拠点都市としての役割が強い。防空壕も数多く残されて』いるとある。因みに最初の鹿屋市の市制施行は昭和一六（一九四一）年五月二十七日で海軍記念日に合わせてある（以上はウイキの「鹿屋市」に拠った）。この「岬」、は方崎からは東南に約三十四キロメートルほどある。

「寝棺」「ねかん・ねがん」と読む。私は「ねがん」と読みたい。見慣れた普通の死者を寝かせた状態に入れる長い棺である。明治期まで普通であった遺骸を座らせて入れるように作った「座棺・坐棺」の対語である意識を我々は最早、失ってしまっている。

「鹿兒島」方崎からは凡そ真西に三・五キロメートルほどの直近である。

「暫くして待避もとへのサイレンが遠く山の下から聞えて来た」言わずもがな、空襲の警報解除のサイレンで、空襲が終わった事を告げるもの。当初は一分（後に三分に改正されたという）連続一回のもの。叙述から見て、空襲警報のサイレン（四秒鳴らして八秒休止を五回繰り返す）は発見から短時間であったことからか、鳴らされてはいないように読める（サイレンの具体はネットのQ&Aサイトの回答に拠った）。

「グラマンがよくやって来るね」「これは坊津に居た頃からの村上兵曹の認識上の発言で、所謂、アメリカ軍の本土上陸を間近に感じていた主人公の謂いであると私は認識する。

「夜でも、うっかりすると鳴いているのですよ」蟬は或る温度以上（摂氏二十四度から二十六度）でよく鳴く。私は二十代の初め、鎌倉の横浜に接した端の、壮大な栗林の側の化石のように古いアパートに住んでいたが、盛夏の頃は夜中に盛大に鳴かれ、よく吃驚させられて眼が覚めたものである。

「兵隊でいるよりはいいでしょう」下士官より下位の兵卒の謂いである。

「つくつく法師」有翅昆虫亜綱カメムシ目（半翅目）ヨコバイ亜目（同翅亜目）セミ上科セミ科セミ亜科ツクツクボウシ族ツクツクボウシ属ツクツクボウシ *Meimuna opalifera*。ウイ

キの「ツクツクボウシ」に、『北海道からトカラ列島・横当島までの日本列島、日本以外で

は朝鮮半島、中国、台湾まで、東アジアに広く分布』し、『平地から山地まで、森林に幅広く生息する。地域によっては市街地でも比較的普通に発生する(盛岡市など)が、基本的にはヒグラシと同じく森林性(湿地性)であり、薄暗い森の中や低山帯で多くの鳴き声が聞かれる。この発生傾向は韓国や中国でも同様である。成虫は特に好む樹種はなく、シダレヤナギ、ヒノキ、クヌギ、カキ、アカメガシワなどいろいろな木に止まる。警戒心が強く動きも素早く、クマゼミやアブラゼミに比べて捕獲が難しい』。成虫は七月から『発生するが、この頃はまだ数が少なく、鳴き声も他のセミにかき消されて目立たない。しかし他のセミが少なくなる』八月下旬から九月上旬頃には『鳴き声が際立つようになる』。九月下旬には『さすがに数が少なくなるが、九州などの西南日本では』十月上旬に『鳴き声が聞かれることがある。なお、後述のように八丈島や岡山・長崎では』七月上旬から『鳴き始めることが知られている』とある(リンク先で二つの鳴き声を聴ける)。本作の極めて重要な伏線アイテムである。

「応召」は「おうしょう」と読み、在郷軍人(補充兵も含む)などが召集に応じて軍隊に入ることと言う。実際の梅崎春生も形の上で応召である。何故なら既に注したように、彼は昭和一七(一九四二)年卯一月に津島重砲隊に入隊するも、肺疾患により即日帰郷して、療養生活に入っていたからである。その後は実は昭和十九年三月には、軍役の徴用を恐れ、戦前より席を置いていた東京市教育局研究所を辞し、東京芝浦電気通信工業支社に転職したりしている。しかし、六月に海軍に召集されて佐世保相ノ浦海兵団に入団している(底本別巻年譜に拠る)。

「まだですよ。あれは八月十日すぎ」梅崎春生が桜島の海軍基地へ赴任した正確な日時は不明である。本作冒頭では「七月初、坊津にいた」で始まりこの台詞であるから、ここでの作品内時間としては、七月中下旬が想定されている。

「佐世保海兵団、御存じでしょう、十分隊」具体的な名称あからさまに出していることに注意したい。以前に注した通り、梅崎春生は佐世保海兵団に入り、そこから防府の海軍通信学校に派遣された後、再び佐世保へ呼び返された後、佐世保通信隊に配属されている。彼が佐世保海兵団の第十分隊であったかどうかは不詳乍ら、ここ以下には春生の軍隊経験での強烈な

怨念が暴露されていると読んで間違いないと私は思っている。

「烹炊所」ほうすいじょ 兵員烹炊所。一般医は軍艦の台所をこう呼称する。

「サイパンが陥おちた直後」これはこの前年である昭和一九（一九四四）年六月十五日から七月九日にかけて行われたアメリカ軍と日本軍の北マリアナ諸島のサイパン島に於ける戦闘を指す。斎藤義次中將が指揮する第四十三師団を主力とした日本軍が守備したサイパン島に、ホランド・スミス中將指揮のアメリカ軍第二海兵師団・第四海兵師団・第二十七歩兵師団が上陸、激しい戦闘の末、日本軍は全滅している。七月九日には日本軍と在留邦人をサイパン島南端に追い詰め、日本兵や在留邦人の多くが自決したり、ガケや崖壁から身を投げて（所謂、バンザイ・クリフ（Banzai Cliff）のこと。サイパン島最北端の岬で正式名称はプンタンサバナタ（プンタン平原）という）、この日を『以ってアメリカ統合遠征軍司令リッチモンド・K・ターナー中將はサイパン占領を宣言した』。但し、『残ったわずかな日本軍地上部隊はゲリラ化し、遊撃戦に移行して各個で戦闘を継続した。日本のポツダム宣言受諾後も、その事実を知らない陸海軍将兵は遊撃戦を継続していたが、ポツダム宣言受諾の事実を知り順次投降した。タツポーチョ山を拠点としていた』歩兵第十八連隊衛生隊の『大場栄陸軍大尉以下』四十七名の部隊は昭和二〇（一九四五）年十一月二十七日（発令自体は二十五日）に独立混成第九連隊長の天羽馬八陸軍少將の正式の命を受けて、同年十二月一日に『軍歌（彼らの部隊の隊歌と「歩兵の本領」）を歌って戦没者の霊に弔意を示しながら山を降り投降した。彼らは、大本營のサイパン放棄を知らず、必ず友軍がサイパンを奪還に来ると信じていたという。大規模な投降としては最後のものである』と、[ウィキの「サイパンの戦い」](#)他にはある。

「今年も、どのような瞬間にあの虫が鳴き出すかと思うと、いやな予感がしますよ」春生の強烈な伏線である。

「秋になって、見張の講習に行ったのです。いろいろつらいこともあったのですよ」先に注したように、梅崎春生は明治十九年六月に海軍から召集令状を受け（この時、春生満二十九歳）、佐世保海兵団に入り、そこから防府の海軍通信学校に派遣されて、暗号特技兵になっている（彼はその上に下士官候補の速修を受けて通信科二等兵曹となっている）。[この兵士](#)

もある意味、梅崎の——そうであったかも知れない分身——であったのだと私は思うのである。

「善行章」[ウィキの「善行章」](#)より引く。『行を表彰するための章。戦前の大日本帝国海軍に於て定められていた』。『帝国海軍の善行章は山型の臂章（ひしょう。肘から下に付ける飾線）で、入営より三年間大過なく任務を遂行した者に善行章一線の着用が許され、その後三年毎に一線ずつ追加された。さらに、戦功を挙げた者には特別善行章も授与された。善行章は特別善行章と合わせて最高で『五本まで佩用（身体に付けて用いること）することが許され、『軍服の右腕部分、階級章の上に縫いつけられた。善行章は階級社会である軍隊において畏怖される権威を有するものであり、受章本数により俸給にも相違があった。授与本数の多い下士官兵は部下の者の畏敬を集めたという。なお、善行章を受章する際、その受章を証する善行証書を附典（授与）された』。『大日本帝国陸軍や戦後の自衛隊では、同様のものとして精勤章が定められている。地域の消防機関である消防団でも精勤章または優良章という名で同様に年功や精勤による臂章の付与を行う習慣がある』とある。

「特務少尉」既注の中で述べたが再掲する。特務士官の一種。特務士官は、海軍の学歴至上主義のために大尉の位までに制限配置された後身の準階級で、叩き上げの優秀なエキスパートであっても将校とはなれず、将校たる「士官」よりも下位とされた階級を指す。兵曹長から昇進した者は海軍少尉ではなく、海軍特務少尉となった。

「精神棒」日本海軍及び陸軍に於いて、古参兵・下士官が新兵を「教育」するという名目の「しごき」、体罰に用いられた硬い樫の木で出来た太い棒のこと。鞭や、その場にあった竹刀・木刀・バット・箒の柄・杓文字等で代用することもあった。孰れも兵士の尻目がけてフルスイングで叩きつけた。元は日本海軍に於いて、入隊者から人間性を奪いとり、命令には絶対服従する兵隊に仕立てることを目的で行われた虐待行為の際に使用する木の棒で、起源は英国海軍にあり、日本海軍でも通常英語で「バッター」と呼ばれ、敵性を廃した当時は「軍人精神注入棒」と書かれていたらしい（以上はネット上の「航空軍用語辞典」と「ピクシブ百科事典」を参照した）。

「沖縄の戦終り、既に潰滅したこと」主な戦闘が沖縄本島で行われた沖縄戦は、昭和二〇（一

九四五)年三月二十六日に始まり、組織的な戦闘は本小説内時間の前月である同年六月二十日乃至六月二十三日に終了したとされている(目付はウイキの「沖繩戦」に拠った。因みに、「蟬」同様、私は「繩」という字が生理的に許せない。引用以外では、総て「繩」とする。幸い、底本は表記通り、「繩」となっている)。

「赤痢」下痢・発熱・血便・腹痛などを伴う大腸感染症。従来、赤痢と呼ばれていたものは、現代では赤痢菌による細菌性赤痢とアメーバ性赤痢(寄生虫症に分類)に分けられる。前者の国内患者は激減しているが、海外渡航者の帰国後発症はしばしば見れる。かくいう私の妻もかつて一緒に行ったトルコでシゲラ・ゾンネ(*Shigella sonnei*: D群赤痢菌・ゾンネ赤痢菌)一相いっそうに罹患し、しつかり鎌倉の額田病院に隔離された。なお、梨(バラ目バラ科サククラ亜科ナシ属ヤマナシ変種ナシ(和梨・日本梨) *Pyrus pyrifolia* var. *culia* *Pyrus pyrifolia*)を赤痢感染源とするような説は私の知る限りでは認められない。ただ、私の親族には小さな頃に「梨を食べて亡くなった」とされる人物がおり、親戚の中には「多食すると、腹が冷えて消化も悪くなり、激しい腹下しを起すからよくない」と真顔で言う者がいることは事実である。私は、原因不明の病気や、知られたくない事故、或は赤痢(赤痢も感染力は強いのだが)もつと激しく忌み嫌われた感染症などで亡くなった子どもを、昔は——青梅や梨を食って死んだ——と誤魔化したのだ、と思っている。

「湾内で獲れるらしい細長い小さな魚」条鱗綱ニシン上目ニシン目ニシン科キビナゴ亜科(或いはウルメイワシ亜科)キビナゴ属キビナゴ *Sprattelloides gracilis*。ウイキの「ギョナゴ」によれば、成魚は全長十センチメートルほど、『体は前後に細長い円筒形で、頭部が小さく口先は前方に尖る。体側に幅広い銀色の縦帯があり、その背中側に濃い青色の細い縦帯が隣接する。鱗は円鱗で』一縦列の鱗は三十九枚から四十四枚であるが、『剥がれ易く、漁獲後にはほとんど脱落してしまう。海中にいるときは背中側が淡青色、腹側が白色だが、鱗が剥がれた状態では体側の銀帯と露出した半透明の身が目につくようになる』。『ニシン科の分類上ではキビナゴ亜科が設定されているが、ウルメイワシに近縁のウルメイワシ亜科とする見解もある』。種小名の「*gracilis*」は「薄く」「細く」などの意で、同種の『細長い体型に由来する』とあり、『刺身、煮付け、塩ゆで、天ぷら、唐揚げ、南蛮漬け、干物などで食べ

られる』とある（下線やぶちゃん）。

「私は、応召以来、佐鎮さちんの各海兵团や佐世保通信隊や指宿航空隊いぶすきで、兵隊として過ごして来た」  
「指宿」は当時の鹿児島県旧揖宿郡指宿村いぶすき。現在は指宿市で鹿児島県薩摩半島の南端にあつて、「砂蒸し」で有名な摺ヶ浜すりがはまを有する温泉として知られる。何度も注してきたように、

梅崎春生は、召集されてまず、「佐鎮」（佐世保鎮守府）の佐世保海兵团に入った。そこから防府の海軍通信学校に派遣された後、佐世保に戻されて佐世保通信隊に配置となつた後、昭和二〇（一九四五）年の初め頃には最初の実施部隊として指宿航空隊の通信科に転勤しており、同年の五月には主人公村上と同じ海軍二等兵曹に任官しているのである。

「銀河」大日本帝国海軍が開発・実用化した双発爆撃機。海軍の航空機関連技術開発を統括する航空技術廠が大型急降下爆撃機として開発した機体であつたが、同海軍の一式陸上攻撃機（一式陸攻）の後継機として太平洋戦争後半の戦闘に投入された（陸上攻撃機）とは陸上基地から発進して敵主力艦隊に対して魚雷攻撃を行うことを主たる目的として開発された雷撃機を指す）。以下、参照した[ウィキの「銀河（航空機）」](#)より引く（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した）。『一九四二年（昭和十七年）六月から完成し始めた試作機は』、高度五千五百メートルでの最高速度時速五百六十六・七キロメートル航続距離五千三百七十一キロメートル、急降下最終速度時速七百三・八キロメートルという『海軍の要求を超える高性能を発揮した。戦況の悪化から早期の実用化が求められたため、通常は空技廠での性能試験終了後に行われる横須賀航空隊での実用試験が性能試験と平行して行われ、一九四三年（昭和十八年）八月には転換生産を行う中島飛行機製の試作機も完成、同年十一月から本格的に量産が開始された。』『一九四四年（昭和十九年）十月に陸上爆撃機銀河一型（PIY1）として制式採用されたが、実際には最初の実戦部隊である第五二一航空隊はその一年以上前に開隊していた。第五二一航空隊はマリアナ沖海戦とニューギニア戦線に投入されたが、アメリカ海軍の猛攻により壊滅した。その後も、台湾沖航空戦、レイテ戦、九州沖航空戦、沖縄戦等に投入された。』『銀河による戦果としては、台湾沖航空戦にて一九四四年十月十四日の夜間雷撃で、第七六二航空隊の銀河四機が軽巡ヒューストンを雷撃、三機は迎撃機に撃墜されたが残る一機の投下した魚雷が命中し、あわや撃沈とい

う程の損傷を受けた。ヒューストンはそのまま終戦まで復帰できず、前日に一式陸攻の雷撃で大破した重巡キヤンベラと台湾沖航空戦での数少ない戦果となった』。『一九四五年（昭和二十年）三月十日・十一日に実施された第二次丹作戦（ウルシー環礁のアメリカ艦隊奇襲攻撃）において、二式大艇に誘導された第五航空艦隊梓特別攻撃隊の銀河二十四機（発進後、機体不調で七機が脱落）が九州の鹿屋基地を午前九時二十五分に発進。直線距離二千三百キロメートル（実際飛行経路約二千九百三十キロメートル）を飛行した後、午後七時前後』の薄暮、『特攻攻撃を決行。福田幸悦大尉機といわれる一機がタイコンデロガ級航空母艦「ランドルフ」の艦尾を大破させた。同じく一九四五年三月の九州沖航空戦時に第五航空艦隊第七六二航空隊の銀河一機が、急降下爆撃により四国南方沖でエセックス級航空母艦「フランクリン」に二百五十キログラム爆弾二発を命中させて、同艦を沈没寸前まで追い込んだことが有名である』。『また第七六五海軍航空隊攻撃四〇一飛行隊において銀河に下向きに二〇ミリ斜め銃』（斜銃しやせう…戦闘機の機体背面に上向きに取り付けられた航空機関砲）『を一〇〜一二挺を搭載し対地攻撃に使用する案が出された。高雄の第六十一航空廠で改造が行われ、おそらく合計で三機が改造された。三月二十二日夕刻銃装機三機を含む九機が台南基地を離陸』、『リングエン周辺飛行場への空襲へ向かった。しかしリングエン東方十数キロのダグパン飛行場を銃撃し三カ所の炎上を確認したのが銃装機唯一の確認戦果である。この後爆撃による攻撃を重視し銃装機活躍の機会は来なかった』。『高性能を追求した本機の機体や発動機の構造は複雑なものがあり、生産性・整備性はあまり芳しいものではなかった。特に発動機の故障が多く、稼働率の低下に拍車をかけ、搭乗員や整備員にとって大きな負担となったが、一式陸攻に代わる主力爆撃機として終戦まで戦い続け、各型合計で約千百機生産された。終戦時の残存機数は百八十二機』であった。『機体や発動機に余裕がない点を「国滅びて銀河あり」（杜甫の詩「春望」の冒頭「国破れて山河あり」のもじり）と揶揄されたという』。当時、『現用の夜間戦闘機月光（JINI'S）より高速かつ搭載能力に優れていたことから、比較的早い段階から夜間戦闘機への転用が構想されており、月光が夜間迎撃で初戦果を挙げた一九四三年（昭和十八年）五月、川西に対して P1Y1 夜戦改修型（後の試製極光）の開発が命じられている。主な改修点は火星三五型への発動機換装と二〇ミリ斜銃の追加

装備で、一九四三年七月に設計終了、昭和一九年（一九四四年）五月に試作一号機が完成している。その後、少数が部隊配備されたもののB-29の迎撃には速度や高高度性能が不足と判定され、ほとんどの機体は爆撃機型の銀河一六型に再改修されている。『海軍正式の開発計画である試製極光とは別に、実戦部隊である第三〇二航空隊において、銀河一型または一六型に二〇ミリまたは三〇ミリ斜銃を追加装備した夜間戦闘機型への改修が行われている。この改造夜間型は試製極光とは異なり、斜銃の他に三号爆弾を搭載してB-29の夜間迎撃に投入され、撃墜戦果を報じている。』『アメリカ軍により戦後接收された一型が一機だけスミソニアン博物館に分解保存されている』とある（下線やぶちゃん）。以上から、この電報の銀河も夜間出撃であった可能性が高いか。

「予科練」大日本帝国海軍に於ける志願制の航空兵養成制度の一つである海軍飛行予科練習生の略称。参照した[ウィキの「海軍飛行予科練習生」](#)によれば、昭和四（一九二九）年十二月の『海軍省令により予科練習生の制度が設けられた。「将来、航空特務士官たるべき素地を与ふるを主眼」とされ、応募資格は高等小学校卒業者で』満十四歳以上二十歳未満、教育期間は三年（後に短縮された）、その後一年間の『飛行戦技教育が行われた。全国からの志願者』五千八百七名から七十九名が合格し、昭和五（一九三〇）年六月、『第一期生として横須賀海軍航空隊へ入隊した（後の乙飛）』。昭和一一（一九三六）年十二月には『「予科練習生」から「飛行予科練習生」へと改称』し、翌年には『更なる搭乗員育成の為、旧制中学校』四学年一学期修了以上（昭和一八（一九四三）年の十二期生より三学年修了程度と引き下げられた）の学力を有し、年齢は満十五歳以上二十歳未満の『志願者から甲種飛行予科練習生（甲飛）制度を設けた。従来の練習生は乙種飛行予科練習生（乙飛）と改められた。

甲飛の募集の際、海軍兵学校並みの待遇や進級速度が喧伝され、また甲飛の応募資格が海軍兵学校の応募資格』（旧制中学校四学年修了程度）『と遜色なかったために、海軍の新設航空士官学校との認識で甲飛に入隊した例も多かった。ところが、兵学校相当の難関試験に合格し、晴れて入隊した練習生に与えられた階級は海兵団で訓練中の新兵らと同じ最下級の四等水兵で、制服も水兵服であった。それらの低待遇に失望した生徒が、母校の中学後輩に「予科練は目指すな」と愚痴をこぼすまで問題になった』とある。『戦前に予科練を卒業した練

習生は、太平洋戦争勃発と共に、下士官として航空機搭乗員の中核を占めた。故に戦死率も非常に高く、期によっては『約九十%が』戦死するという結果になっている。また、『昭和一九（一〇四四）年に』入ると特攻の搭乗員の中核としても、多くが命を落としている。『同十九年』夏以降は飛練教育も停滞し、この時期以降に予科練を修了した者は航空機に乗れないものが多かった。中には、航空機搭乗員になる事を夢見て入隊したものの、人間魚雷回天・水上特攻艇震洋・人間機雷伏竜等の、航空機以外の特攻兵器に回された者もいた。『終戦間際は予科練自体の教育も滞り、基地や防空壕の建設などに従事する事により、彼等は自らを土方（どかた）にかけて「どかれん」と呼び自嘲気味にすごした。例えば三重の予科練では、朝鮮半島の人々を予科練教官が指揮して、軍艦を隠すための穴を掘らせるなどの行爲が行われた』。昭和二〇（一九四五）年六月には『一部の部隊を除いて予科練教育は凍結され、各予科練航空隊は解隊した。一部の特攻要員を除く多くの元予科練生は、本土決戦要員として各部隊に転属となった』とある（下線やぶちゃん）。

「古ぼけた練習機」恐らくは大日本帝国海軍の練習機「赤とんぼ」、九三式中間練習機(KSY)であろう。日本軍の練習機は目立つように橙色に塗られていたことから別名「赤とんぼ」と呼ばれていたが、本機はその内の代表的な機体の一つで、陸軍のそれは九五式一型練習機であり同じく「赤とんぼ」と呼ばれた。

「水上特攻隊員」「水上」は「すいじょう」で、先に注したベニヤ板張りのモーター・ボートの船内艇首部に炸薬を搭載、搭乗員が操縦して目標たる敵艦艇に体当たり攻撃を行った「震洋」（「震洋艇」で既注）の特攻隊員を指す。

「国民学校」昭和一六（一九四一）年三月公布の国民学校令によって、同年四月よりそれ以前の小学校が国民学校という名称に改められた。初等科六年・高等科二年で、他に国民学校の高等科二年の修了者を対象とする特修科一年を置くことも出来た。

「阿弥陀」帽子を後ろ下がり<sup>かぶ</sup>に被る阿弥陀被り。前を上げて斜めに傾けて被り、前髪を風に曝すようにすること。語源は、阿弥陀像の頭部に顕著に見える後ろの光背（後光の表象）部が垂直に近く造形されることから、帽子を後ろに傾けて垂直に近づけることをそれに譬えたものらしい。

「設営隊」海軍設営隊。大日本帝国海軍に属した基地施設の建築や陣地・築城を任務とした部隊で、太平洋戦争中に二百隊以上が編成され、南方の最前線を含め、各地で飛行場などの建設を行った。初期には設営班と呼ばれ、当初は軍属（武官又は徴集された兵である軍人以外で軍隊に所属する者を指す）主体であったが、徐々に軍人による編制が増えた。『フィリピンを中心とした南方及び台湾や沖縄、日本本土各地へ配備された。神風特攻隊用の飛行場建設のほか、日本本土では工場の地下疎開なども任務としながら終戦まで活動を続けた』が、『主に軍属部隊であることや臨時に編成される場合が多いことから』、『史料が極端に少なく、その組織や活動地域は不明なものが多い』。詳しくは参照・引用したウィキの「海軍設営隊」を読みたい。

『「呂」の厚い暗号書』「呂」暗号書は昭和一七（一九四二）年十二月以降に大日本帝国海軍の全部隊が使用した暗号書（暗号書は複数あるがその主たるもの）。それまでは「海軍暗号書D」（「呂」以前に使用されていた最も良く用いられた海軍『一般暗号書。単語あるいは文字を5桁の数字に変換する1次暗号書と5桁の乱数を並べた乱数表で構成される（それ以外に地点名をアルファベット2文字に変換する地点略号表があった』。昭和一五（一九四〇）年十二月一日から使用されていたが、実は『アメリカ軍はこの暗号の3割、使用頻度の高いものは9割を解読していた。ミッドウェー海戦等の敗因もこの暗号の解読だと言われる』。次の私の「乱数盤」の注も参照のこと）が使用されていたが、ミッドウェー海戦（昭和一七（一九四二）年六月五日から七日に北太平洋ハワイ諸島北西にある環礁ミッドウェー島で行われた日米海軍の戦闘）に於いて重巡洋艦「三隈」が放置され、その最後を確認した者がいなかったことから、「呂」への変更がなされた（引用部を含め、ウィキの「海軍暗号書D」に拠る）。

「乱数盤」その時に使用されていた乱数表のことであろう（以下に引くように乱数表は数ヶ月で変更更新された）。「呂」暗号書以前の「海軍暗号書D」のケースであるが、吉田昭彦氏の「解読されなかった海軍暗号」（雑誌『丸』の『Sep. 01』からの引用らしい）に以下のようにある（ピリオド・コンマを句読点に代えた）。大日本帝国海軍の暗号は『一般暗号書で5桁の数字に変換したものを、そのまま送信しない。「乱数」、無作為に並べた5桁の数を、

「非算術加減法」によって加えた数字を送信する。『非算術加減法とは、桁の繰り上げをしな  
い加法、逆に、自動的に桁の繰り下げをする減法である。5 + 6 = 11ではなく、1 + 6は』  
『マイナス5ではなく、『5とする加減法である。』これらの乱数表には「海軍D暗号第…号  
乱数表」といった識別名があり、定期的に、通常6カ月ごとに更新された。『戦記物には、  
一般暗号書の改訂と、乱数表の更新とが混同されている場合も多い。』『戦術暗号用の一般暗  
号書は、ただ一つ「替字表」である。替字表には、縦横、0から9の数字欄があり、仮名文  
字「い」は、縦欄の「0」と横欄の「1」とを組み合わせて「01」、「ろ」は「02」、数字「0」  
は「00」、「1」は「11」といった2桁の数字に置き換えるものである。』『替字表自体には秘  
匿性は全くない。日本海軍の電信員は』百『個の文字、数字、記号など全てを暗記していた。』  
『筆者が若い頃、部下だった旧海軍通信員のベテラン海曹は、普通に文字を書く速さで、文  
字を数字に、数字を文字に置き換えることができた。』（海曹は兵曹のことであろう。主人公  
村上も二等兵曹である。）。『秘匿性は、使用目的、通信系統別などによって区分された、2文  
字1組の4桁の乱数を加えることで付与された。これらの乱数表は、艦艇部隊用「甲」、陸  
上部隊用「乙」、航空部隊用「F」、商船運航統制用「S」などがあつた。暗号強度が弱い  
で、2カ月ごとに更新されることになっていた』とある（下線やぶちゃん）。

「三尺」九〇・九センチメートル。

「膂力」りよりよく筋肉の力。特に腕力。「膂」は原義は背骨であるが、筋骨の力や体力、「荷う」の  
意も持つ。

「痼疾」こしゅう容易に治らず、長い間、悩まされている病気。持病。「痼」は「こびりつくこと」

「しこり」「永病み」ながや「長患い」ながわずらの意。]

確かに、私は苛立<sup>いらだ</sup>っている。連日の睡眠不足のせいもあった。が、それだけではなかった。一言で言えば、私は、私の宿命が信じ切れなかったのだ。何故私が、小学校の地理では習ったけれども、訪れる用事があるうとも思えなかった此の南の島にやって来て、そして此処で滅亡しなければならぬのか。この事が私に合点<sup>がてん</sup>が行かなかったのだ。合点が行かなかったというより、納得<sup>なっとく</sup>しようと思わなかったのだ。納得出来るわけのものでなかった。しかし事態は、急迫していた。どの道どのような形でか、覚悟を決めなければならぬ処まで来ていたのだ。

暗号室や居住区での雑談で、米軍が何処に上陸するかということが、時々話題にのぼった。海軍は吹上浜<sup>ふきあげはま</sup>に上陸を予想し、陸軍は宮崎海岸の防備に主力を尽しているという噂がまことしやかに語られた。沖繩は既に玉砕したし、大和<sup>やまと</sup>の出击も失敗に終わった。日々に訳す暗号電報から、味方の惨敗は明かであった。連日飛来する米機の様相から、上陸が間近であることも必至であった。不気味な殺気を孕<sup>はら</sup>んだ静穩のまま、季節は八月に入って行った。八月一日の真夜中、私は当直に立っていた。

土<sup>にお</sup>の臭いのする洞窟の、薄暗い灯の下で、皆不機嫌の眼を光らせて、暗号を引いていた。ときどき電信室の方から、取次が眠そうな眼をして電報を持って来た。暗号書をめくる音が、変に小うるさく感じられた。私は手を伸ばして、今持って来た電報を取り上げた。作戦特別緊急電報である。はっとして私は頭を上げた。いよいよ何か起ったのではないか。私は急いで暗号書を繰った。一語一語、訳文書に書き取った。

「敵船団三千隻見ユ。針路北」

大島見張所の発信である。私は立ち上った。

「敵船団の電報です」

当直士官の眠たげな顔に、一瞬緊張の色が走った。

電鈴が鳴って、すぐ幕僚室に通報され、暗号室に至る通路に、枕を並べて眠っていた暗号士や掌暗号長や通信士が、兵隊に起されてぞろぞろと起きて来た。暗号室に入るとき、一樣に眼をしかめ、灯から眼をそむけるようにした。指揮官卓に集って、低い声で話し合った。

俄<sup>にわ</sup>かに電報量が多くなった。作戦特別緊急電報ばかりである。報告や通報や、各部隊に対

する命令電波が、日本中に錯綜さくそうしているらしかった。船団は明かに東京方面を目指していた。千葉海岸あたりに殺到し、一挙に東京を攻略するのではないか。それはあり得ないことではなかった。

(東京都民は、今頃何も知らずに眠っているだろう)

応召するまで私が住んでいた本郷のことや、また友達のことが、突然のようにはつきり頭に浮んで来た。それは戦争とは関係のない静かな街であり、平和な人々の姿であった。私が自分に落ちるものと覚悟していた悪運が、今や彼等の上に置き換えられようとしている。此の、死の巨大な凶報も心付かずして、寝床の中に穏かな顔をして眠っているのではないか。一つの或る想念が、私の心を烈しい苦痛を伴って突き刺した。

(もし東京に上陸するならば、桜島にいる私はたすかるのではないか?)

うめくような気持で、私は此の考えを辿たどっていた。――

私の背後の指揮官卓での話し声が少しずつ高くなって来た。ときどき、笑い声がまじった。緊張のなかに、へんに自棄やけつぱちな気持がこじれたままふくれ上り、冗談を言い合う声が奇妙にうわずって来るらしかった。

「軍令部や東通の連中、いい配置かと安心していた奴等が泡食うぜ」

「太、え、しく、じり、と、ぼ、や、い、ても、お、つ、つか、ない」

「しかし関東平野は逃げでがあるだろう」

誰かが口をはさんだ。

「特攻隊は、出撃する様子かな」

暫く誰も口を利かなかった。その沈黙が、痛いほど私の背にのしかかって来た。その瞬間、投げやりな調子で、誰かが冗談を言った。

「どうせ来年の今頃は、俺達はメリケン粉かつぎよ。佐世保港かどこかで」

低い笑い声があった。

「兵隊も準士官も無しよ。そうなれば」

突然、笑いを含まぬ質の違った口調が、その会話を断ち切った。

「馬鹿な事を言うなよ」

真面目な、烈しい声であった。笑い声が止んだ。私は身体を少しよじって、背後をぬすみ見た。

「兵隊の居る処で、不見識なこと言うのは止める」

吉良兵曹長であった。何時暗号室に入って来たのか、私は知らない。眺めているのははばかられて、私は前にむきなおり、暗号書を繰るふりをした。そう言いながら、吉良兵曹長は立ち上ったらしかった。白けた空気の中から、

「冗談じゃないか。冗談だよ」

誰かが止める気配がした。

「誰も日本が負けるなどとは思っていないよ」

「冗談にしてもだ、言っただけのことと悪いことと——」

「吉良兵曹長。言いがかりのようなことはよせ」

なに、と言葉にならない言葉が聞えたと思うと、何か絡み合うような気配のうち、肉体がぶつかり合うようなにぶい音がし、小さくなっている私の背に、誰かがよるめいてたおれかかった。乱数盤が、かたりと床に落ちると、数十本の乱片がそこらにみだれ散った。烈しい呼吸が、私の襟筋をかすめた。私は背筋を硬くして、じっと暗号書を見つめていた。低い虚ろな笑い声のようなものが、聞えたと思った。私は思わずふり返った。壕を支えた木組によりかかって、背の高い吉良兵曹長の顔は、蠟のように血の気を失い、仮面に似た無表情であった。見ていけないものを見たような気持で、思わず目を外らしたとき、呻くような小さな声で、吉良兵曹長の声が出た。

「よして呉れ」

冗談を言うのをよせと言うのか、醜い争いをするのをよせと言うのか、自分に言い聞かせるような弱々しい声音であった。白々しい沈黙が来た。その中を、よろめくようにして、吉良兵曹長は壕を出て行ったらしかった。湿った土くれを踏む長靴の音が、それにつづいた。そして、緊張のあとの、ゆるんだ気配が背に感じられた。私は今日の電報綴りを意味なく繰っていた。繰る指が、おさえようとしてもぶるぶるふるえた。

(船団が見えた。それだけのことに皆興奮している)

私をも含めて、度を失った此の一群の男たちに、私は言い知れぬ不快なものが胸に湧き上って来るのを感じた。不快と言うよりも、もつと憤怒に近い感情であった。ああ、自分の体も八つ裂きにし、そして彼等のも八つ裂きにし、谷底にでも投げ込みたい。私は手刀で力をこめて頸筋を、えいえい、とたたいた。たたく度に後頭部に、しびれるような感覚を伴って血が上って来た――

「村上兵曹。村上兵曹。訳文点検御願ひ致します」

兵隊の声であった。私は手を伸ばして訳文紙を受取った。稚拙な字で、翻訳文がしたためである。

「サキノ敵船団ハ夜光虫ノ誤リナリ。大島見張所」

苦い笑いが浮び上って来た。すべては茶番に過ぎないではないか。もし米軍が日本の電波状況を傍受していたなら、此の突如として巻き起った電波の嵐を、――大島から横鎮へ、横鎮から全国へ、部隊から部隊へ、ひっきりなしに打ち廻された作戦特別緊急信の大群を、何と解釈しただろう。此の部隊にも、先刻佐鎮から、即時待機の命令が出た。今頃は整備兵ら  
が起されて、仕事にかかっている筈である。夜光虫の誤りだと判ったとき、整備兵たちはどんな思いでまた寝に就くのであろう。にがい笑いは、何か生理的な発作のように、止め度無く湧き上って止まなかった。私は立ち上り、訳文を当直士官に差し出した。指揮官卓にいた  
準士官等の視線が、それ集った。読んでも、誰も笑わなかった。

「夜光虫、か」

変に感動のうすれた声で誰かが言った。

私は席に戻り、当直士官が幕僚室に電話をかける声を聞いていた。電話機の具合が悪く、夜光虫、というのが仲々通じないらしかった。その声に混って、外の準士官等の、疲れたような口調の会話を耳にとめていた。

「近頃、いらいらしているらしいだね」

「ひがんでるのさ。奴さん」

会話は、それだけで止んだ。もはや起きている必要はないというので、それぞれの寢室へ、壕を出て行くらしかった。

三時になった。交替の当直員が来た。私達は申継ぎをし、並んで暗号室を出て行った。通路を出ると、真闇であった。私は目を慣らすために、出口の崖によりかかり、暫く待っていた。対岸の鹿児島市は、相変わらず一二箇所、静かに焰を上げていた。もはや消す気もないようであった。昨夜と同じ個所が、同じ量の焰をあげて、とろとろと燃えている。――歩き出した。片手を崖に沿わせ、歩き悩みながら、私は、大船団に見まがう夜光虫の大群の光景を想像していた。暗い海の、果てから果てまでキラキラと光りながら、帯のようになり、そしてゆるやかに移動して行く紫色の微光を思い浮べたとき、私は心がすがすがしく洗われるのを感じた。先刻の気持の反動と判っていないながらも、私は此の感傷に甘く身をひたしていた。ひそやかな孤独の感じが、快よく身体を領していた。夜風が、顔の皮にあたって吹いた。

山道を長いことかかって登り、居住区に着いた。入口を入ると、奥の卓によりかかり、誰かが腰をおろしていた。私の方を見た。吉良兵曹長であった。今までそのままの姿勢で、じつとしていたらしかった。

「上陸地点に近づいたか」

「あれは、夜光虫だそうです」

私は事業服の襟の紐を解きながら、そう答えた。安堵とも疑惑ともつかぬ妙な表情が、彼の顔にちよつと現われて消えた。いじめられた子供のように切ない表情にも見えた。光を背にしているので、それも定かでなかった。そして眼を閉じた。

私は、寝台に行き、音のしないように横になった。両掌をそろえて、顔をおおった。瞼がしきりと痒かった。坊津での傷は、ほとんどなおっていて、その跡がしわになっているらしかった。そこをこする私の指の爪が、眼鏡の縁にふれて、かたかたと鳴った。私は侘びしくその音を聞いていた。

「やぶちゃん注…「海軍は吹上浜に上陸を予想し、陸軍は宮崎海岸の防備に主力を尽している」という噂がまことしやかに語られた」既に注したが、「幻化」の「砂浜」の章に、主人公久住五郎について、『坊津に行く前に、吹上浜の基地を転々とした』あり、梅崎春生が遂に

語らなかつた坊津以前の海軍秘密基地勤務の中には確実に吹上浜が含まれていた。吹上浜は、これも既注であるが、鹿児島県西部の薩摩半島西岸で東シナ海に面した、現在のいちき串木野市・日置市・南さつま市にかけての砂丘海岸で、その長さは凡そ四十七キロメートルに及んでおり、一つの砂丘としての長さでは日本一の長い砂浜海岸である。なお、ここで村上兵曹は「まことしやかに語られた」とあるが、この直後に日本はポツダム宣言を受諾して降伏したため、米軍による本土上陸作戦は行われることがなかったものの、アメリカ軍とイギリス軍をはじめとする連合軍はこの時、実際に「ダウンフォール作戦」(Operation Downfall: 「失墜」「滅亡」作戦) という日本本土上陸作戦を策定していた。その中の初期作戦は「オリンピック作戦」(Operation Olympic: 国際的スポーツ祭典であるオリンピックを戦闘名にとしヤンキーらしい実にいやらしい命名である) と呼ばれる、まさに日本本土の九州南部に対する上陸作戦であった。これはその後展開されるはずであった関東への上陸作戦、「コロネット作戦」(Operation Coronet: 「小さな王冠」作戦。天皇を擁護したものであるうか) のために飛行場を確保するためであった。以下、[ウィキの「ダウンフォール作戦」](#)から当該『作戦予定日は「Xデー」と呼称され、一九四五年十一月一日が予定されていた』(なお、この日程は日本軍に完全に読まれていたことが明らかとなり、後に機密漏えいを疑う騒動となった)。『海上部隊は空前の規模であり、空母四十二隻を始め、戦艦二十四隻、四百隻以上の駆逐艦が投入される予定であった。陸上部隊は十四個師団の参加が予定されていた。これらの部隊は占領した沖縄を経由して投入される。なお、これを支援するための兵力誘導用欺瞞作戦』も同時に考案されており、連合軍が、当時、『日本が占領下に置いていた中華民国上海周辺に上陸するものと見せかけ、日本軍の兵力をそちらへ誘導させる』というものであった。『また、直前の陽動作戦として、十月二十三日から三十日に、アメリカ軍第九軍団(八万人)が高知県沖でもって、陽動上陸行動を行うことや、イギリス本土の爆撃機軍団から引き抜かれたイギリス空軍のアプロ・ランカスターが連邦爆撃機派遣団である「タイガー・フォース」の主力爆撃機として沖縄から出撃する予定であった』。『事前攻撃として、アメリカ軍とイギリス軍により種子島、屋久島、甌列島などの島嶼を、本土上陸五日前に占領す

ることも検討された。これは、沖縄戦の時と同じく、本上陸海岸の近傍に良好な泊地を確保することが目的である。この泊地は、輸送艦やダメージを受けた艦の休息場所に使われる。また、九州主要戦略目標地域に対して、マスタードガスを主体とする毒ガス攻撃も検討されていた。さらに米統合参謀本部は、神経ガス(サリン)を使用すれば、日本に侵攻してもほとんど死者を出さずにすむと信じ、ドイツ崩壊後から米軍が太平洋で毒ガス戦を展開できるように、マスコミと協力して世論づくりをしていたことを記録したアメリカ軍の極秘資料がアメリカで報道された。この文書では、ジュネーブ議定書で毒ガスの使用は禁止されていたが、日本軍が中華民国内で使用したという事実と、アメリカ白人による黄色人種への人種差別感情が、アメリカ側の罪悪感を軽減したとも指摘されている。『上陸部隊はアメリカ第六軍であり、隷下の三個軍団がそれぞれ宮崎、大隅半島、薩摩半島に上陸することとなっていた。これは日本軍の三倍以上の兵力になると、アメリカ軍では見積もっていた。大隅半島には日本軍の防衛施設があったものの、宮崎や薩摩半島は手薄であったということも判断材料となった』(下線やぶちゃん。以下同)。『アメリカ軍の動員される兵力は二十五万二千人の歩兵と八万七千人の海兵隊から成る十六個師団であり、ヨーロッパ戦線の部隊は予定されていない。上陸作戦を支援するため、アメリカ海軍はチェスター・ニミッツ提督に第三艦隊と第五艦隊を与えたが、これは太平洋で利用できるすべての艦隊に等しかった(それまで第三艦隊と第五艦隊が同一の作戦に参加することはなかった)。『第五艦隊(レイモンド・スプルーアンス提督)は、十隻の空母、十六隻の支援空母で上陸作戦への近接支援を行い、上陸用舟艇や輸送船を含めた艦船の数は三千隻に達した。またイギリス海軍も極東方面に展開していた艦隊を派遣することとなった。第三艦隊(ウイリアム・ハルゼー提督)は、十七隻の空母と八隻の高速戦艦によって機動攻撃を担当した。』『ドイツが一九四五年五月に降伏したこともあり、一九四五年の中期までにアメリカ軍、イギリス軍、オーストラリア軍、ニュージーランド軍を中心とした連合軍は千二百機の戦闘機が投入可能であり、その数は月を追うごとに増えていた。オリンピック作戦が開始されるまでにアメリカ海軍は二十二隻の空母、イギリス海軍は十隻の空母を用意する予定であり、計千九百十四機の戦闘機が運用可能だった。』『予想される連合軍の損害は、タラワ、硫黄島、沖縄の戦闘から類推して二

十五万人と言われるが、これは見積もる人によって異なる。いずれにせよ、オリンピック作戦が実施された場合、第二次大戦最大の損害がアメリカ軍とイギリス軍をはじめとするイギリス連邦軍に生じたと推測できる。『なお、航空基地の確保が目的のため、南部九州のみの占領で作戦は終了し、北部九州への侵攻は行わないことになっていた。この基地は、翌年三月のコロネット作戦のための前進基地であり、七十二万人の兵員と三千機が収納できる巨大基地となるはずだった。この基地からは、長距離爆撃機のみならず中距離爆撃機も関東平野を爆撃することができた』とある。なお、リンク先には「オリンピック作戦」及び全体の「ダウンフォール作戦」の展開図も見られたい。また一方で[ウィキの「本土決戦」](#)を読んでみると、「昭和天皇独白録」によれば、昭和二十年六月十二日には『私が今迄聞いてゐた所では、海岸地方の防備が悪いといふ事であつたが、報告に依ると、海岸のみならず、決戦師団さへ、武器が満足に行き渡つてゐないと云ふ事だつた。敵の落した爆弾の鉄を利用して「シャベル」を作るのだと云ふ、これでは戦争は不可能と云ふ事を確認した。』また、「終戦後元侍従長の坪島から聞いた事だが一番防備の出来ている筈の鹿児島半島の部隊でさえ、対戦車砲がない有様で、兵は毎日塹壕堀に使役され、満足な訓練は出来て居らぬ有様だつた』そうだ。」とある、と記されてある。

「沖繩は既に玉砕した」既注であるが、再掲すると、主な戦鬪が沖繩本島で行われた沖繩戦は、昭和二〇（一九四五）年三月二十六日に始まり、組織的な戦鬪は本小説内時間の前月である同年六月二十日乃至六月二十三日に終了したとされている。

「大和の出撃も失敗に終つた」冒頭に出る坊津から西南約四百キロメートル沖合の東シナ海上に於いて、昭和二十年四月七日、戦艦大和は海上特攻によって凄絶な沈没をしていた。

「作戦特別緊急電報」当時は軍用電報に六段階あつたが、これは「緊急」という最上級の次に位置するものである（保坂廣志「日本軍の暗号作戦」（二〇一四年紫峰出版刊）に拠る）。

「敵船団三千隻」因みに、先に引いた[ウィキの「ダウンフォール作戦」](#)を見ると、九州上陸占領の「オリンピック作戦」でも海上部隊は空前の規模で空母四十二隻・戦艦二十四隻・四百隻以上の駆逐艦が投入される予定であつたとあり、近接支援を行う第五艦隊だけでも空母十隻・支援空母十六隻・上陸用舟艇・輸送船を含めた艦船数は三千隻に達したとある。ま

たその後には予定されていた関東上陸占領の「コロネット作戦」を同ウィキから引くと（アラビア数字を漢数字に代えた）、『オリンピック作戦で得られた九州南部の航空基地を利用し、関東地方へ上陸する作戦である。上陸予定日はYデーと呼ばれ、一九四六年三月一日が予定されていた。コロネット作戦は洋上予備も含めると二十五個師団が参加する作戦であり、それまでで最大の上陸作戦となる予定であった。上陸地点は湘南海岸（相模川沿いを中心に北進し、現相模原市・町田市域辺りより進路を東京都区部へ進行する計画予定）と九十九里浜から鹿島灘沿岸にかけての砂浜海岸が設定され、首都を挟撃することが予定されていた。湘南海岸には第八軍、九十九里浜には第一軍が割り当てられていた』、『Yデーの三ヶ月前からイギリス軍とアメリカ軍による艦砲射撃と空襲によって大規模な破壊を行ない、攻撃の中にはミサイルやジェット戦闘機、化学兵器の使用も含まれていた。一九四六年三月に関東平野の南東と南西から上陸する連合軍は、古典的な挟撃作戦によって約十日で東京を包囲する。計画では湘南海岸に三十万人、九十九里海岸に二十四万人、予備兵力合わせて百七万人の兵士と千九百機の航空機というノルマンディー上陸作戦をはるかに凌ぐ規模の兵力が投入される予定であった』とある（下線やぶちゃん。因みに、ノルマンディー上陸作戦（上陸は「ネプチューン作戦」（Operation Neptune）／上陸からパリ解放までの作戦全体は「オーバー・ロード作戦」（Operation Overlord）と称した）では、上陸用舟艇四千隻及び艦砲射撃を行う軍艦百三十隻を含む六千隻を超える艦艇が投入された。ここでは外洋を北上する艦船であるから、近海で使用される上陸用舟艇は輸送船に格納されているから、含まないので、「敵船団三千」というのは、とんでもない、化け物並みの数と考えるとよい）。

「大島見張所」後で「船団は明かに東京方面を目指していた。千葉海岸あたりに殺到し、一挙に東京を攻略するのではないか」とあるから、これは既に東京都（昭和一八（一九四三）年七月一日に東京府と東京市が統合）大島町であった大島で、同島の南部の波浮港近辺にあった海軍のそれと思われる。ウィキの「伊豆大島」によれば、戦時体制下の昭和一九（一九四四）年に『小笠原諸島への軍事輸送のために島内に送受信所が設置され、海軍第二魚雷艇特攻隊の中間基地として波浮港が接收され』、翌年六月には本土決戦に備えて第三二一師団が編成されていたとある。

「幕僚室」[ウイキの「幕僚」](#)を見ると、大正三（一九一四）年軍令第一〇号の「艦隊令」第五条第一項に『聯合艦隊及艦隊ニ當該司令長官ノ幕僚トシテ左ノ職員ヲ置ク』とあって、参謀長・参謀・副官・機関長・軍医長・主計長が挙げられているとし、『これらのことから、日本陸海軍では幕僚とは、参謀のみならず、司令部に置かれて指揮官を補佐する各部門の責任者たるスタッフを指すものとされていた』とある。現行の自衛隊の「幕僚」が狭義の参謀クラスに近い者を指すのとは異なるので注意。

「応召するまで私が住んでいた本郷」梅崎春生は昭和一五（一九四〇）年三月に二十五歳で東京帝国大学文学部国文科を卒業（高校受験で一浪し、大学で一年自主留年した）しているが、その間は少なくとも下宿生活をしていた（本郷であったかどうかは確認出来ないが、そうであってなんら不思議でない）。前注で示した通り、卒業後は東京市教育局教育研究所に勤務し（この間も本郷にいたとしておかしくない）、昭和十七年一月に召集を受けて対馬重砲隊に入隊するも、肺疾患のために即日帰郷、以後療養している。しかし昭和十九年六月に応召され、佐世保相ノ浦海兵团を皮切りに、防府の海軍通信学校に派遣、佐世保へ戻って佐世保通信隊、昭和二〇（一九四五）年の初め頃には初めての実施部隊として指宿航空隊通信科に転勤、同二十年五月に海軍二等兵曹に任官後、本篇にも出る谷山基地から恐らくは吹上浜にあった海軍秘密基地を経、坊津・谷山、そしてこの桜島へと赴任したものと考えられている（これも既に注で述べた）。

「私が自分に落ちるものと覚悟していた悪運が、今や彼等の上に置き換えられようとしている。此の、死の巨大な凶報も心付かずして、寢床の中に穏かな顔をして眠っているのではないか。一つの或る想念が、私の心を烈しい苦痛を伴って突き刺した。／＼（もし東京に上陸するならば、桜島にいる私はたすかるのではないか？）／＼うめくような気持で、私は此の考えを辿っていた。——この「もし」の「し」の右には後に出る傍点と比べると有意に薄いながらも、確かに傍点「、」の形が打たれてはある。しかし「し」のみに打たれたものであり、初出誌や単行本を持たない私には確認が出来ない。講談社文芸文庫平成元（一九八九）年刊「桜島・日の果て・幻化」を底本とする「青空文庫」版を見ると、傍点は打たれていない。初出及び単行本を確認するまでは取り敢えず打たずにおくこととした。さて。[ここ](#)で村

上兵曹がはからずも心内に抱いてしまった思いこそが——私は——「幻化」の久住五郎へとダイレクトに繋がる——「病い」の始まり——それは同時に梅崎春生自身の「病い」であると同時に作家梅崎春生の文学の「鬼の根」のようなものの始まり——であるような気がしてならなくて。

「軍令部」[ウイキの「軍令部」](#)から引く。大日本帝国海軍の海軍省と共同の中央統括機関。海軍省が内閣に従属して『軍政・人事を担当するのに対し、軍令部は天皇に直属し、その統帥を輔翼（ほよく）する立場から、海軍全体の作戦・指揮を統括する』。軍令部長（後に軍令部総長）を長とし、『天皇によつて海軍大将又は海軍中将が任命される。また、次長は総長を補佐する。この二官は御前会議の構成員でもある』。『軍令部は主として作戦立案、用兵の運用を行う。また、戦時は連合艦隊司令長官が海軍の指揮・展開を行うが、作戦目標は軍令部が立案する』。『設置当初、政府上層部は陸軍を尊重していたため、戦時大本営条例に基づき、大本営では本来陸軍の軍令機関であるはずの参謀本部の長官である参謀総長が天皇に対して帝国全軍の作戦用兵の責任を負うこととされた。これに対して海軍では一貫して陸軍と対等の地位を要求し続けた。そして日露戦争の直前に、山本権兵衛海軍大臣から海軍軍令部条例を改め、名称を「参謀本部」にしたい（すなわち陸海軍の参謀本部を同格にした）と上奏を受けた明治天皇は、『この件を元帥府（天皇の軍事部門に於ける終身大将である元帥の称号が与えられた者から構成された最高顧問集団）』に諮ることを命じた。しかし元帥府はこの上奏を受け入れず、『明治天皇は徳大寺実則侍従長を通じて山縣有朋元帥陸軍大将に再考を促した。結局、陸軍が折れ、戦時大本営条例が改定された。（しかし軍令部の改名は受け入れられなかった）これにより、海軍軍令部長は参謀総長と対等の立場で作戦用兵に責任を負うこととなった。さらに伏見宮博恭王軍令部長の時には軍令部の位置づけが強化され、海軍の独立性がより高められた』。『しかし、組織的には陸軍の方が圧倒的に大きく、海軍は常に陸軍への吸収と隣り合わせだった。実際、近衛首相の時には日米開戦を避けるために「アメリカ海軍に勝てない」と海軍に告白させようと圧力がかけられ、海軍の存在意義が問われる事態に陥ったことがあった。これに苦慮した海軍省は「海軍は無敵である」と盛んに宣伝し、海軍の存在意義を保とうとするが、軍令部はこれに困惑した』。『また、太

平洋戦争中、権力の集中を図るため東條首相の命で、嶋田繁太郎海軍大臣が軍令部総長を兼任した際には、海軍内部で大きな反発が起きたほか、戦力強化のため陸軍からたびたびも統合案が持ち出されたが、統帥権を盾に統合を阻んだ。海軍の独立が確保できなければ終戦工作はより困難なものになっていたのではないかと反省会では指摘されている。『太平洋戦争の開戦から敗戦に至るまで』については、開戦時に一部一課で作戦を担当した佐藤毅をはじめとした部員達の証言が海軍反省会に残されている』とある。

「東通」父に聴いたが、聴き馴れない略称だという。「軍令部」と並んでいることから「東京通信部のようなものか」とのことであったが、そうした名称のものは捜し得なかった。ただ、昭和二〇（一九四五）年六月に本土決戦及び首都圏の警備を目的に編成された、大日本帝国陸軍の軍の一つに「東京防衛軍（一）」というのが存在し、そこには三つの警備旅団があつてそれぞれ通信隊を持っていた（[ウィキの「東京防衛軍」を参照した](#)）から、それを統括する部局のことを指すのかも知れない。或いは、本土決戦に備えてそれより少し前の二月一日に旧来の陸軍の東部軍を改編した東部軍管区（[ウィキの「東部軍管区（日本軍）」](#)に拠る）の中の通信部局を指すのかも知れない。識者の御教授を乞うものである。以上の注を書いて、二〇一六年一月四日に本パートをブログ公開したところ、五日後の二〇一六年一月九日に、橋本多佳子全句集など、私の電子テキストをよく読んで下さっている「しづ」様（実名その他は不詳）より本未明、メールを頂戴し、これは『なんとなくトンツウと讀めるかもしれないと考えはじめ調べてみました』と、『東通は東京海軍通信隊のこの様でネット上で見つけられました』と御教授下さった。これは「東京海軍通信隊」のことで、大日本帝国海軍の広義の陸戦隊の一つと思われる「通信隊」の中の「東京海軍通信隊」を指すことが判明した（他には第一連合通信隊・高雄海軍通信隊・父島海軍通信隊・沖繩海軍通信隊・第三海軍通信隊・第三海軍通信隊・第五海軍通信隊・第六海軍通信隊の各通信隊を hush 氏のサイト「[The Naval Data Base](#)」内の「[日本海軍](#)」の「[組織と編制](#)」の「[根拠地隊](#)」の「[特別根拠地隊](#)」の「[通信隊](#)」で確認出来る）。またその他にも、旧同各通信隊所属の方々のネット記載などにも「東通」という語がしばしば使われていることも確認出来た。さらにまた、これはどうも「つづ」様のおっしゃっている通り、[通信のモールス信号に掛けて「東通」](#)と読んでいるように（無

線家の方はそう読みたくなるように)強く感じられました。ここももしかすると、日常的に梅崎春生も「とんつう」「とんつー」と呼んでいて、日常に過ぎたためにルビを振らなかつた可能性も十分あり得るように思われる。最後に。この場を借りて「しづ」様に心より御礼申し上げる。

「どうせ来年の今頃は、俺達はメリケン粉かつぎよ。佐世保港かどこかで」「メリケン粉」は小麦粉のことであるが、日本産のものを「うどん粉」というのに対し、アメリカ産のそれ(当時は精製度が高く日本産のそれよりも白かった)を指した。従ってこの下士官の一人(後の吉良兵曹の口の利き方と「兵隊の居るところで、不見識なこと言うのは止める」から判る)の発言は、日本が年内に敗戦し、来年は米軍に接取された佐世保基地でメリケン粉担ぎの雑役夫になり下がっているという謂いなのである。

「乱数盤が、かたりと床に落ちると、数十本の乱片がそこらにみだれ散った」この描写は、あばばば氏のヴォイニッチ手稿(一九一二年にイタリアで発見された古文書の写本で未解読の文字で記されており、多数の奇妙な絵が描かれている謎の文書。偽書とも言われる)についてのサイト「The Most Mysterious Manuscript in the World: Voynich Manuscript」の「暗号にはどのような種類があるのだろうか?」によってほぼ判明した。換字式暗号(文字又は語句等を他文字又は記号(群)で置き換える形式)の複雑形式或いは応用形式(暗号の基本形式を組み合わせた型)の一つで「ストリップ式」と呼ばれる暗号に用いる道具である。それによれば、「ストリップ式」暗号とは、ストリップという細片に不規則にアルファベットが二回繰り返し返してあるものを数十回を使用して暗号化する暗号形式であるとある。これは他のサイトの記載によれば、暗号としては反復使用の確率が極めて低いとされるものであったようである。そのストリップを刺すのが「乱数盤」であり、「乱片」というのがその「ストリップ」であると思われる。

「(船団が見えた。それだけのことに皆興奮している)／私をも含めて、度を失った此の一群の男たちに、私は言い知れぬ不快なものが胸に湧き上って来るのを感じた。不快と言うよりも、もつと憤怒に近い感情であった。ああ、自分の体も八つ裂きにし、そして彼等のも八つ裂きにし、谷底にでも投げ込みたい。私は手刀で力をこめて頸筋を、えいえい、とたたいて

た。たたく度に後頭部に、しびれるような感覚を伴って血が上って来た——」「船団が見えた」という「それだけのことだ」「興奮している」のは彼らだけではない。村上兵曹自身ははからずも「私が自分に落ちるものと覚悟していた悪運が、今や彼等の上に置き換えられよう」とし、「しかも心内ではあつらひどか、』もし東京に上陸するならば、桜島にいる私はたすかるのではないかと」とまで思ひ、「うめくような気持ちで」「執拗にその考えを述べていた」のであった。だからこそ村上は、「私をも含めて、度を失った此の一群の男たちに、私は言い知れぬ不快なものが胸に湧き上って来るのを感じた」のである。いや、それは「不快と言うよりも、もつと憤怒に近い感情で」「さえ「あつた」のである。さればこそ「ああ、「このおぞましい人非人の」「自分の体も八つ裂きにし、そして」「同じ人非人の」「彼等のも八つ裂きにし、谷底にでも投げ込みたい」と熱望し、彼はあたかも自刎するかの如く「手刀で力をこめて頸筋を、えいえい、とたたいた」のであった。「たたく度に後頭部に、しびれるような感覚を伴って血が上って来」る、その「血」はまさにヒューマニズムの忿怒の表象であると以上に、はからずも、この場の誰もが心底に抱いたところの生き延びれるかも知れぬ／生き延びたいという欲求の「生」＝「性」たるシンボルとしての「血」でもあつたのである。

「サキノ敵船団ハ夜光虫ノ誤リナリ。大島見張所」これは実際にあつた誤認事件である。田中誠氏のブログ「So what?」の「[梅崎春生](#)」には「桜島」の読後記載が記されてあるが、そこには、

\*

昭和二〇（一九四五）年八月一日の夜十時に『大島の見張所が夜光虫を見間違えて一敵大船団、大島東方を北上中』と発信して、間もなく』（翌二日午前二時頃）、『先の大船団は夜光虫の誤り』と訂正された（割と有名な）エピソードも載っていて、その辺が軍オタには、興味深いかも』

\*

とある（下線やぶちゃん。以下同）。また、サイト「メロウ伝承館」の『[水上特攻・肉弾艇「震洋」体験記](#)』の「スレッド」の「水上特攻・肉弾艇「震洋」体験記」(完) — 3」には、kousei3

氏の投稿として、以前に注したモーター・ボート特攻兵器である、

\*

「震洋」の『爆装作業が終わった日の夜中』（昭和二十年八月一日）に、『敵船団接近中』との報で「震洋艇出撃」の命令が届いた。出撃準備が出来ているのは僅か『五隻だけで、搭乗員五十名の中から五名を『指名しなければなら』ず、『部隊長は横須賀に出張中、高橋先任艇隊長に指名の苦悩がのしかかった。暫くして幸い敵船団来襲は誤報で（編注Ⅱ伊豆大島見晴所が多量の夜光虫を船団と見間違えて報告）、『震洋艇出撃用意』が取り消され、高橋艇隊長は安堵の胸を撫で下ろした』

\*

とある。また、個人サイト内の「[我々が生きた時代と海龍の年表](#)」（リンク切れ）の昭和二十年八月一日の条には、

\*

『敵大船団、大島東方を北上中』の情報により、『第十一突撃隊では『全艇出撃。集合地点は九十九里浜沖。沈座して敵を待つ予定であったが、城ヶ島を回ったところで「先の報告は夜光虫の誤り。全艇直ちに帰投せよ」と無線で命令を受ける』

\*

とある。この「海龍」かいりゅうとは大日本帝国海軍の特殊潜航艇の一種で、敵艦に対して魚雷若しくは体当りによって攻撃を行う、二人乗り有翼特殊潜航艇で水中特攻兵器の名である。さらに実は、

梅崎春生自身がこれを昭和二〇（一九四五）年八月二日の条の日記に記している

のである。以下、底本全集第七巻の「日記」から引く。但し、これに限っては戦前の記載であるので恣意的に漢字を正字化して歴史的仮名遣に改めたので注意されたい。

\*

八月二日

此の間から敵機が何度も来て、鹿兒島は連日連夜炎を上げて燃えてゐる。夜になると、此の世のものならぬ不思議な色で燃え上る。

身體の具合は相變らず悪い。何となく悪い。

昨夜は、大島見張所が夜光蟲を敵輸送船三千隻と認めて電を打った。

東京からも便りが無い。うちからも。

(胃が極度に弱つてゐるらしい)

\*

ここでは「敵輸送船」とある。

なお、「夜光虫」も注しておこう。海洋性のプランクトンのアルベオラータ Alveolata 上門渦鞭毛植物門ヤコウチュウ綱ヤコウチュウ目ヤコウチュウ科ヤコウチュウ属ヤコウチュウ *Noctiluca scintillans*。以下、[ウィキの「ヤコウチュウ」](#)より引く。『大発生すると夜に光り輝いて見える事からこの名』(ラテン語の「noctis」は「夜」+「lucens」は「光る」)『が付いたが、昼には赤潮として姿を見せる。赤潮原因生物としては属名カナ書きでノクチルカと表記されることが多い。動物分類学では古くは植物性鞭毛虫綱渦鞭毛虫目、最近では渦鞭毛虫門に、植物分類学では渦鞭毛植物門に所属させる。一般的な渦鞭毛藻とは異なり葉緑体を持たず、専ら他の生物を捕食する従属栄養性の生物である』。『原生生物としては非常に大きく、巨大な液胞』(或いは水囊: pusulen)『で満たされた細胞は直径』一、二ミリメートルで、『外形はほぼ球形』であるが、一ヶ所『くぼんだ部分がある。くぼんだ部分の近くには細胞質が集中していて、むしろそれ以外の丸い部分が細胞としては膨張した姿と見えていい。くぼんだ部分の細胞質からは、放射状に原形質の糸が伸び、網目状に周辺に広がるのが見える。くぼんだ部分からは』一本の『触手が伸びる。細胞内に共生藻として緑藻の仲間を保持している場合もあるが、緑藻の葉緑体は消滅しており、光合成産物の宿主への還流は無い。細胞は触手 (tentacle) を備え、それを用いて他の原生生物や藻類を捕食する。触手とは別に』二本の『鞭毛を持つが、目立たない』。『このように、およそ渦鞭毛虫とは思えない姿である。一般に渦鞭毛虫は体に縦と横の溝を持ち、縦溝には後方への鞭毛を、横溝にはそれに沿うように横鞭毛を這わせる。ヤコウチュウの場合、横溝は痕跡程度にまで退化し、横鞭毛もほぼ消失している。しかし、縦溝は触手のある中心部にあり、ここに鞭毛もちゃんと存在する。ただし、それ以外の細胞が大きく膨らんでいるため、これらの構造は目立たなくなってしまうのである』。『特異な点としては、他の渦鞭毛藻と異なり、細胞核が渦鞭毛藻核では

ない（間期に染色体が凝集しない）普通の真核であるとともに、通常の細胞は核相が2nである。複相の細胞が特徴的である一方、単相の細胞はごく一般的な渦鞭毛藻の形である。』  
『他の生物発光と同様、発光はルシフェリン-ルシフェラーゼ反応による。ヤコウチュウは物理的な刺激に応答して光る特徴があるため、波打ち際で特に明るく光る様子を見る事ができる。または、ヤコウチュウのいる水面に石を投げても発光を促すことが可能である。』

『海産で沿岸域に普通、代表的な赤潮形成種である。大発生時には海水を鉄錆色に変え、時にトマトジュースと形容されるほど濃く毒々しい赤茶色を呈する。春〜夏の水温上昇期に大発生するが、海水中の栄養塩濃度との因果関係は小さく、ヤコウチュウの赤潮発生が即ち富栄養化を意味する訳ではない。比較的頻繁に見られるが、規模も小さく毒性もないため、被害はあまり問題にならないことが多い。』『ヤコウチュウは大型で軽く、海面付近に多く分布する。そのため風の影響を受けやすく、湾や沿岸部に容易に吹き溜まる。この特徴が海面の局所的な変色を促すと共に、夜間に見られる発光を強く美しいものになっている。発光は、細胞内に散在する脂質性の顆粒によるものであるが、なんらかの適応的意義が論じられたことはなく、単なる代謝産物とも言われる。』『通常は二分裂による無性生殖を行う。有性生殖時には遊走細胞が放出されるが、これは一般的な渦鞭毛藻の形態をしており、核も渦鞭毛藻核である。』夜光虫は遺作「幻化」の「白い花」の中でも、主人公久住五郎が部下福兵長と飲酒して泳ぎ、[福が溺死するシークエンスの前](#)に出現する。今、私はそれを語り切ることが出来ないでいるが、「幻化」のそれは明らかに、この「桜島」のこの「夜光虫」の**梅崎春生の確信犯のインスパイア演出**であると考えている。

「[横鎮](#)」神奈川県横須賀市にあつた横須賀鎮守府。第一海軍区として「陸中陸奥國界ヨリ紀伊國南牟婁東牟婁郡界ニ至ノ海岸海面及小笠原島ノ海岸海面」を所管した（[ウィキの「横須賀鎮守府」に拠る](#)）。

『近頃、いらいらしているらしいのだね／＼「ひがんでるのさ。奴さん」の「近頃、いらいらしている」「ひがんでる」「奴さん」とは、流れの上では、直前のいざこざを受けて、かの吉良兵曹長のことを揶揄しているとは読めるのであるが、どうもここはそうではなく、この直前の幕僚に電話をかけ、なかなか夜光虫というのが伝わらず、困った感じである当直

士官（彼らの直接の上官）を揶揄しているようである。それは、次のパートの冒頭で当直士官が幕僚に対して『「カブを上げ」たかった』という村上の謂いによく出ていると私は思う。「三時になった。交替の当直員が来た。私達は申継ぎをし、並んで暗号室を出て行った。通路を出ると、真闇であった。私は目を慣らすために、出口の崖によりかかり、暫く待っていた。対岸の鹿児島市は、相変わらず一二箇所、静かに焰を上げていた。もはや消す気もないようであった。昨夜と同じ個所が、同じ量の焰をあげて、とろとろと燃えている。――」

鹿児島市内のそれは「相変らず」とあるように、前に出ているが、このシーンは先に示した梅崎春生の「日記」に、『此の間から敵機が何度も来て、鹿児島は連日連夜炎を上げて燃えている。夜になると、此の世のものならぬ不思議な色で燃え上る』という事実記載と完全に一致する。

「私は、大船団に見まがう夜光虫の大群の光景を想像していた。暗い海の、果てから果てまでキラキラと光りながら、帯のようにくねり、そしてゆるやかに移動して行く紫色の微光を思い浮べたとき、私は心がすがすがしく洗われるのを感じた。先刻の気持の反動と判っているながらも、私は此の感傷に甘く身をひたしていた。ひそやかな孤独の感じが、快よく身体を領していた」夜光虫の実際の発行色は青白い光と表現されるが、私は主人公の「紫色の微光」というのがすこぶるしっくりくる（[グーグル画像検索「夜光虫の光」](#)）をリンクしておく。夜光虫の光の色――それは確かに――不思議な青みがかった妖しい紫色――赤を孕んだ――である。そしてこれは――「血」であり――「生」であり――「性」であるところの――リビドー (Libido) をシンボライズしている色だ――と私は私の中で認知している。……だから村上「曹が」に「心がすがすがしく洗われるのを感じ」「その感傷に甘く身をひたし」「しかもそこに「ひそやかな孤独の感じ」があつて、それがまた、「快よく身体を領していた」というのが、「私」個人の「肉の感じ」として「私を突く」ように「判る」のである……。

「事業服」海軍軍装の一種の正式呼称。正装の軍服ではないが、作業服の一ランク上のものであったらしい。ミリタリーグッズ・革ジャンの専門店「中田商店」の「こちら」のようなものかと思われる。「襟の紐」が確かにあるのが判る。

「安堵あんどとも疑惑ともつかぬ妙な表情が、彼の顔にちよつと現われて消えた。いじめられた子供のように切ない表情にも見えた。光を背にしているので、それも定かでなかった。そして眼を閉じた」吉良が主人公村上二曹の実はトリック・スターの一部を体現しているのだというところが、ここで明らかになっている、と私は思う。」

午前の当直を終え、正午、私は居住区に戻って来た。当直の時、当直士官の掌暗号長から叱られた。電報が一通、届け方が遅れた。それも傍受電報である。此の部隊に、直接関係があるわけではない。当直士官が幕僚室ぼくりょうしつに、「カブを上げ」たかったからに過ぎない。私は憂鬱な気持で昼食を終え、寝台に入り、昼寝をした。そして夢を見た。

何の夢だったかは判らない。ただ、薄暗がりのようなところを、何か一所懸命にわめきながら歩いていて、涙をだらだら流しながら滅茶苦茶に歩いていた。手を振り、足を踏みならしながら、何かさげんでいた。そのまま、ゆるゆると浮き上って来るようにして目が覚めた。汗をびっしょりかいていた。身体中が重苦しくて、夢の感覚がまだ身体のそここに残っていた。うつつの私も、夢の中と同じように涙を流していた。何物に対してか、つかみかかりたいような気持で、べとつく肌の気味悪さに堪えながら、じつとあおむけに横たわっていた。

(これでいいのか。これで——)

不当に取扱われているという反撥はんぱつが、寢覚めのなまなましい気持を荒々しくゆすつていた。私はひとりで腹を立てていた。誰に、ということとはなかった。掌暗号長にはない。私を此のような破目に追いこんだ何物かに、私は烈しい怒りを感じた。突然するどい哀感が、胸に湧き上った。何もかも、徒勞むなではないか。此のような虚しい感情を、私は何度積み重ねてはこわして来たのだろうか。……

私は身体を起し、寝台から飛び下りた。乱れた毛布を畳むために、毛布の耳をひとつひとつ揃そろえながら、ふと眩くらいた。

「毛布でさえも、耳を持つ——」

耳たぶがないばかりに、あの田舎町の妓は、どのような暗い厭な思いを味わって来たことであろう。あの夜、あの妓は、私の胸に顔を埋めたまま、とぎれとぎれ身の上話を語った。耳なしと言われた小学校のときのこと。身売りの時でも、耳たぶがないばかりに、あのような田舎町の貧しい料亭に来なければならなかったこと。そのような不当な目にあいつづけ、あの妓はどのようなものを気持の支えにして生きて来たのだろう。妓の淋しげな横顔が、急に私の眼底によみがえって来た。侘びしい感慨を伴って、妓の貧しい肉体の記憶がそれに続いた。

（此の感傷によりかかり、そして気持を周囲から孤立させる、此の方法以外に、私の此のいら立ちをなだめる手があるか？）

もはや、私の青春は終わった。桜島の生活は、既に余生に過ぎぬ。自然に手に力が入り、揃えた毛布を乱暴に積み重ねると、私は服を着け、洞窟を出て行った。午後の烈しい光線が、したたかに臉上に滲みわたった。丘の上に登ってみようと思った。

石塊道を登り、林を抜けると、見張所であった。栗の木の下には、此の前と同じ見張の男が立っていた。私を認めると、かすかに笑ったようであった。何となく元気が無いように見えた。

「また来ましたね」

うなずきながら、私は見張台に立ち、四周を見渡した。心の底まで明るくなるような、炎天の風景であった。

積乱雲が立っていた。白金色に輝きながら、数百丈の高さに奔騰する、重量ある柱であった。その下に、鹿児島西郊の鹿児島航空隊の敷地が見え、こわれた格納庫や赤く焼けた鉄柱が小さく見えた。黒く焼け焦れた市街が、東にずっと続いていた。市街をめぐる山々は美しく、鮮かな緑に燃え、谷山方面は白く砂塵がかかり、赤土の切立地がぼんやりとかすんでいた。自然だけが、美しかった。人間が造ったものの廢墟は、いじけて醜かった。草原に腰をおろした。男も、此の前と同じく、並んですわった。

「見張も、大変だね」

「大したことはないですよ」

「何だか元気がないようだけれど、身体の具合でも悪いのかね」  
「疲れているのですよ」

男は、静かな湾内をぐるぐるっと指さして見せた。

「此の湾内に、潜水艦が三隻いるのです」

「ああ、電報で見た。味方ではないか」

「兵曹は通信科ですか。味方のか敵のかはつきりしないんです」

「味方識別をつけ忘れていた、と言うらしいのだよ」

「そうですか」

男は、暫くひまじの沈黙の後、私に聞いた。

「通信科なら——特攻隊、あれはどうなっているのですか」

「てんで駄目だよ。皆、グラマンに食われてしまいうらしい」

「やはり駄目ですか」

溜息をついた。そして、

「特攻隊、あれはひどいですね」

「ひどいって、何が？」

男は暫く黙っていた。そして、一語一語おさえつけるように、

「木曾義仲、あれが牛に松明たいまつつけて敵陣に放したでしょう。あの牛、特攻隊があれですね。

それを思うと、私はほんとに特攻隊の若者が可哀そうですよ。何にも知らずに死んで行く——

「君にも、子供がいるのだろうか」

「ときどき練習機の編隊が飛んで行きますね。あれも特攻隊でしょう」

「ああ。——無茶だよ」

男の顔は、光線の加減か土色に見えた。ひどく大儀そうだった。

「身体には、注意しなくてははいけないよ。壕生活はこたえるから」

「鹿児島には、昔、土蜘蛛つちぐもという種族がいたらしいですね。熊襲くまそみたいな。やはり私達と同じで、洞窟に住んでいた」

「君は、東京かね」

「もう亡んでしまったんですね。弱い種族だったに違いありませんよ」

「蟬が、ずいぶんふえたね。ほんとにうるさい位だ」

熊蟬が、あちらこちらの樹に止って、ここを先途と鳴いていた。

「蟬？ ああ、蟬のこと。法師蟬は、まだ今年は来ませんよ」

男は白い歯を見せて、神経質な笑い声を立てた。肩の辺の骨が細く、服の加減で、少年のような稚なさを見せている。何か漠然とした不安が、私をとらえた。男は、両掌を後頭部に組み、その儘うしろに寝ころがった。今日は、飛行機も来ないらしかった。低い声で男は話し出した。

「私はねえ、近頃、滅亡の美しさということを考えますよ」

しみじみとした、自分に言い聞かせるような声音であった。

「廃墟というものは、実に美しいですねえ」

「美しいかねえ」

「人間には、生きようという意志と一緒に、滅亡に赴こうという意志があるような気がするんですよ。どうもそんな気がする。此のような熾んな自然の中で、人間が蛾のようにもろく亡んで行く。奇体に美しいですね」

あとの方は独り言のようになった。

「此の間、妙なものを見ましたよ」

「何だね」

男は持っていた双眼鏡を私に渡し、横合いの谷間を指さした。

「あそこに家が、百姓家が見えるでしょう。もう少し右。ええ、そこです。双眼鏡で見てください。母家の横に、小さな納屋が見えるでしょう。そのの、軒下に何か下っているでしょう。見えますか」

傾いた納屋の入口の梁に、何か長い、紐のようなものが、風のためふらふら揺れているのが、双眼鏡にうつって来た。子供が一人、納屋の前の地面にしゃがんで、あそんでいた。それは何だか判らなかつた。どういう意味があるのか、私には判らなかつた。双眼鏡を返しな



真後の六尺ばかり離れた処に、影のように、あの男の子が立っているのです。黙りこくって、じつと爺さんがする事を眺めているんです。爺さんがぎくつとしたのが、此処まではっきり判った位です。爺さんは、縄をしっかり握って、その振り返った姿勢のまま、じつと子供を眺めている。子供も、石のように動かず、熱心に爺さんを見つめている。十分間位、睨み合ったまま、じつとしているのです。その中、がっくりと爺さんは、踏台から地面にくずれ落ちた。男の子は、やはりじつとしていて、手を貸そうともしない。地面を這うようにして縁側までたどりつくくと、爺さんは沓ぬぎにうつ伏せになって、肩の動き具合から見ると、虫のようにしくしく、長いこと泣いていましたよ。ほんとに長い間」

男は上半身を起した。

「先刻見えたでしょう。あれが、その縄なんです」

私は、ふつと此の男に嫌悪を感じていた。はつきりした理由はなかった。少し意地悪いような口調で、私は訊ねた。

「で、いやな気持がしたんだね」

「——残酷な、という気がしたんです。何が残酷か。爺さんがそんな事をしなくてはならぬのが残酷か。見ていた子供が残酷か。そんな秘密の情景を、私がそつと双眼鏡で見ているということが残酷なのか、よく判らないんです。私は、何だか歯ぎしりしながら見ていたような気がするんです」

男は、首を上げて空を眺めた。太陽は、ぎらぎらと光りながら、中空にあった。

「そうですかねえ。人間は、人が見ていると死ねないものですかねえ。独りじゃないと、死んで行けないものですかねえ」

男は光をさえぎるために、片手をあげた。強い光線に射られて、男の顔は、まるで泣き笑いをしているように見えた。

「やぶちゃん注…この最後の老人と孫の悲惨な話は、あの作品のあのシーンを思い出さずにはいられぬ（太字化はやぶちゃん）。

\*

一時間ばかりたつた後、玄鶴はいつか眠つてゐた。その晩は夢も恐しかった。彼は樹木の茂つた中に立ち、腰の高い障子の隙から茶室めいた部屋を覗いてゐた。そこには又まる裸の子供が一人、こちらへ顔を向けて横になつてゐた。それは子供とは云ふものの、老人のやうに皺くちやだつた。玄鶴は聲を擧げようとし、寝汗だらけになつて目を醒ました。……………

「離れ」には誰も来ていなかった。のみならずまだ薄暗かつた。まだ？——しかし玄鶴は置き時計を見、彼は正午に近いことを知つた。彼の心は一瞬間、ほつとしただけに明るかつた。けれども又いつものやうに忽ち陰鬱になつて行つた。彼は仰向けになつたまま、彼自身の呼吸を数へてゐた。それは丁度何ものかに「今だぞ」とせかれてゐる氣もちだつた。玄鶴はそつと禪を引き寄せ、彼の頭に巻きつけると、両手にぐつと引つぱるやうにした。

そこへ丁度顔を出したのはまるまると着膨きぶくれた武夫だつた。

「やあ、お爺さんがあんなことをしてゐらあ。」

武夫はかう囁しながら、一散に茶の間へ走つて行つた。

\*

無論、これは芥川龍之介の「玄鶴山房」の第五章の末尾の部分である（リンク先は私の古い電子テキスト）。続く次の第六章の冒頭では既に玄鶴は死んでいるが、「桜島」の「ここ」として、彼の自殺は未遂であつた設定で、『一週間ばかりたつた後、玄鶴は家族たちに囲まれたまま、肺結核の爲に絶命した。彼の告別式は盛大（！）だつた』と始まる。

さて、しかし……芥川龍之介と梅崎春生……どっちが「残酷」だろう？ 龍之介と春生、この二人の「男」のどちらにあなたは「嫌悪を感じ」ずるだろう？……「はつきりした理由はな」いが、「少し意地悪いような口調で」言うなら、私は梅崎の方が遙かに「残酷」であると断ずる。しかも、かくも見張り兵に描写させて読者にその「残酷」を突き付け、それについて自分の分身である主人公村上兵曹にはちやっかり、『私は、ふつと此の男に嫌悪を感じていた。はつきりした理由はなかつた。少し意地悪いような口調で、私は訊ねた』『で、いやな氣持がしたんだね』と言わせているのである。……私は、「で、「この梅崎春生の筆致に」はつきりした理由はな」いが、何やらん、「いやな氣持がした」……とまずは答えておこうと思う。

では翻って、この「玄鶴山房」と「桜島」のシーンのどちらリアルか？

と問うたなら、これはもう、圧倒的に「桜島」であるに違いない。

「玄鶴山房」は滅亡してゆく前時代の、暗く黴臭い玄鶴の病者の体臭に包まれた、テツテ的に作られた仮想の「物語」なのであって、登場人物は心情的のみでなく、総ての点で冷血動物のように人間味がしない（と私は思う）。凶悪の冷血という恐るべきキャラクターであるはずの甲野自体が生人形のように冷たく、さればこそその「冷たさ」が逆に伝わってこない（と私は若き日の初読時に感じたものである。昭和二十年代以前の日本映画の平板な女優の台詞や演技を見るように、である）。同様に、繪らんとする玄鶴も、それを見て無邪気な声を挙げる武夫も、昨日今日、舞台に立ったような新米人形師が扱わされる、安物の、如何にもな、からくりにか見えぬ滑稽面の下品の文楽の頭にしか見えぬのである。彼らには誰一人として——身体としての「血」が通っていない。だから、最後に「険しい顔をして」「リイプクネヒトを讀みはじめ」る青年を配しても、少しもそこから「新時代」の匂いはしてこないのだ（あの作品でリアルに「する」ものは冒頭の「ゴールデン・バット」とエンディングの「敷島」の煙草の臭いだけだ）。個人的には「玄鶴山房」は「物語」として陰惨にして素敵で大いに好きであり、前触れの夢の、シニールレアスティクな「老人のやうに皺くちや」の「まる裸の子供が一人、こちらへ顔を向けて横になつてゐる」シーン（これは——玄鶴の人生そのものの奇形体——である）も上手いとは思ふが、作品全体が「現代小説」として成功しているかと言われれば、私は微妙に留保するものである。人物も映像も構造も総てが徹底して前近代的な安っぽい「前時代」の「作り物」であつて、切れるやうな「新時代」の「リアルさ」が殆んど全くと言つていいほどに感じられないからである。私はこの素人文楽の「玄鶴繪りの段」には残念ながら、身を乗り出すことはないのである。

「一方、この「桜島」のこの見張り兵によつて「物語」られる話はどうか？

あるのは、ただ、主人公の覗く双眼鏡のフレームの中に浮かぶ——梁にぶら下がった首括りの繩ばかり……

しかし、この縊死せんとした老人が愛する孫の無言の視線（そこに孫からの愛情の視線は

微塵もない。それは一種——惘然とした「何だ！ お前！」といつた「ある」憤激に近

い視線——である」と睨み合い、遂に自死を諦め、がつくりと踏み台から崩れ落ち、縁側の沓脱ぎにうつ伏して泣くシークエンスは——恐ろしく忌まわしく——しかも夏のムンムンする熱気の中——「実際に起ったおぞましい事実」として強烈な「リアルさ」で読者の胸を激しく打つ。

いや！ それは——梅崎春生の確信犯——なのはないか？

それが、

現実のクロース・アップされた——繩ばかりの双眼鏡の映像——を遠く覗く主人公村上二曹

←

その——フレームの中にフラッシュ・バックする——老人と孫の自殺未遂劇のシークエンス

(の想像) ——

←

それを遠くから凝つと覗いている見張り兵の男(の想起) ——

←

それをいやがおうにも読まさせられる我々——「桜島」の読者——

という心理式をあっという間に発生させる。そうして、

その半強制的な関係妄想的心理状態こそが主人公村上二曹を「嫌悪」させ、ひいては我々を(或

いは「私を」だけでも構わぬ)「嫌悪」させる

のではないか？

しかし、それこそが梅崎春生が仕掛けた本シークエンスの——罠——なのではあるまいか？

最後に言っておくと、この見張り兵の話は実話かも知れぬが、私は梅崎春生は明らかに芥川龍之介の「玄鶴山房」の、この場面を確信犯でインスパイアしていると思う。

梅崎春生は昭和三〇(一九五五)年二月、四十歳の時に「ボロ家の春秋」で直木賞を受賞するが、彼がその受賞連絡を聴いて悩み、辞退しようとして多くの作家仲間と相談した事実とはとみに知られている。彼は自身を、受けるならば芥川賞を受けるべき作家と自認していた

のであった。それは純文学作家としての自信の矜持であったには違いないが、私はそれより以上に、**梅崎春生が芥川龍之介を強烈に意識し、それを越え得る小説世界を目指そうとする気概があつたのだと確信している。**さればこそこども、**かの幻鶴自死未遂の、如何にもなヤラセみたような平板で暗く饅えた映像を――「私なら実写せずに、しかもリアルに、炎夏の陽光のロケーションで、こう描くぞ！」という強い意志表明とともに筆を執っている**と感ずるのである。芥川龍之介と梅崎春生の関係についてはまた、本作の最後に少し語りたいと思つている。

「傍受電報」無線通信電報で直接の相手でない者が偶然にその通信電報を受信したことを言っているが、必ずしも敵のそれとは限らない。この書き方から見ると、桜島海軍基地当てではない陸海軍の無線電報をたまたま傍受したのである。規則上は受信傍受したものは如何なるものも総て報告する規則になっていたのである。

「耳たぶがないばかりに、あの田舎町いなかまちの妓おんなは、どのような暗い厭いやな思いを味わつて来たことであろう」彼女の登場シーンでも注したが、彼女は生後に何らかの事故によって耳介を欠損したのではないと読める。これは小耳症の第IV度と呼ばれる、耳介を全く欠く奇形と思われる。「愛知医科大学形成外科」公式サイト内の「[小耳症について](#)」によれば、『欧米では小耳症の発生頻度は』一万二千五百人に一人という『報告 (Conway & Wagner) から』七千から八千人に一人という『データまで報告されています。人種によって差があり日本ではこの数字よりやや多く発生するのではないかといわれています。右側の発生がやや多いですが、両方の耳に症状がでる人も』十『%程度あります。男女比では男性にやや多く発生します。』  
『耳症の人の次の世代（つまりお子さんということですが）がどのくらいの頻度で小耳症になるかは家族にとって気になる問題です。現在言われているのは数%という数字です。この発生率を高いと見るか低いと見るかは個人の見解により分かれるところですが、小耳症自体は決して致命的な疾病ではありませんし、数%の発生率ということは逆に言えば』九十『%以上は大丈夫ということです』とある。

「数百丈」百丈は三百三メートルで、積乱雲の雲頂高度は日本などの中緯度地域では最低でも五キロメートル、高いものは十六キロメートルにも達するから、これはやや過小気味であ

る。

「奔騰」ほんてう 激しい勢いで昇ること。

「鹿児島西郊の鹿児島航空隊」鹿児島県鹿児島市郡元町の鴨池海岸にあった鹿児島海軍航空隊。同飛行場は戦後は鹿児島空港（鹿児島市民は「鴨池空港」と通称）となったが、昭和四七（一九七二）年に鹿児島県霧島市溝辺町大字麓みぞべちように移転した。

「味方識別をつけ忘れていた」正直、よく意味が判らない。軍事系サイトの書き込みを総合すると、日本帝国海軍の潜水艦が浮上航行している場合は、味方の海域内にあつては後甲板に二本の白い布による味方識別線の白線をつけていたようだが、この場合、三隻が三隻とも味方識別をささず敵味方はつかない（浮上しても実は同じで、だからこそ誤射されないように白線を付けたのである。それでも誤射される事故は何件も起っているようである）。とすれば、この場合は、何らかの暗号による味方識別のための電信用の特別暗号が配当されるはずが、それが三隻総て全く行われなままに、錦江湾内に三隻同時に入ってしまった、そのために識別出来ないということか？ それも何だかなって感じはする。もつと違う意味なのか？ 識者の御教授を乞うものである。

「木曾義仲、あれが牛に松明つけて敵陣に放したでしょう」所謂、「火牛の計」かぎゆうで、牛の角に刀の上に刀や火を点けた松明を結び、尾に藁を結びつけてそれに点火、その牛を敵陣に追いやるといふ夜襲戦法の一つ。古代中国の齊せいの田单でんたんが考えたとされる。木曾義仲も俱利伽羅山合戦でこの戦術を採ったとされるが（「源平盛衰記」）、史実上はフィクションの可能性がすこぶる高いと私は思っている。但し、圧倒的な義仲軍の破竹の勢いで北陸道を京へ攻め入る話柄の中では一つのクライマックスの「演出」ではある（まさにこの第二次世界大戦末期の特攻とは全く以って対照的に、である）。お詳しくない方には、勝田敏夫氏のサイト内の「俱利伽羅合戦」が写真も豊富でお勧めである。

「土蜘蛛」つちぐも「ウイキ」の「土蜘蛛」より引く。『本来は、上古に天皇に恭順しなかった土豪たちである。日本各地に記録され、単一の勢力の名ではない。蜘蛛とも無関係である』が、大和朝廷に逆らった者たちの常道として、後世では『蜘蛛の妖怪』に零落させられ、『別名「八

握脛・八束脛(やつかはぎ)」「大蜘蛛(おおぐも)』などと呼んだ。『八束脛はすねが長いという意味』である。『なお、この名で呼ばれる蜘蛛は実在しない。海外の熱帯地方に生息する大型の地表徘徊性蜘蛛』類の一グループである節足動物門鋏角亜門クモ(蛛形)綱クモ目オオツチグモ科 Theraphosidae の和名の一部は、『これらに因んで和名が付けられている』ものの、『命名は後年近代に入ってからであり、直接的にはやはり無関係である』。『古代日本における、天皇への恭順を表明しない土着の豪傑などに対する蔑称。』『古事記』『日本書紀』に「土蜘蛛」または「都知久母(つちぐも)」の名が見られ、『陸奥、越後、常陸、摂津、豊後、肥前など、各国の風土記などでも頻繁に用いられている』。『また一説では、神話の時代から朝廷へ戦いを仕掛けたものを朝廷は鬼や土蜘蛛と呼び、朝廷から軽蔑されると共に、朝廷から恐れられていた。ツチグモの語は、「土隠(つちこもり)」からきたとされ』、『すなわち、穴に籠る様子から付けられたものであり、明確には虫の蜘蛛ではない(国語学の観点からは体形とは無縁である)』。『土蜘蛛の中でも、奈良県の大和葛城山にいたというものは特に知られている。大和葛城山の葛城一言主神社には土蜘蛛塚という小さな塚があるが、これは神武天皇が土蜘蛛を捕え、彼らの怨念が復活しないように頭、胴、足と別々に埋めた跡といわれる』。『大和国(現奈良県)の土蜘蛛の外見で特徴的なのは、他国の記述と違い、有尾人として描かれていることにもある。』『日本書紀』では、吉野首(よしののおふと)らの始祖を「光りて尾あり」と記し、吉野の国樺(くず)らの始祖を「尾ありて磐石(いわ)をおしわけてきたれり」と述べ、大和の先住民を、人にして人に非ずとする表現を用いている。『古事記』においても、忍坂(おさか・現桜井市)の人々を「尾の生えた土雲」と記している点で共通している』。『肥前国風土記』には『景行天皇が志式島(ししま)…現在の平戸南部地域)』に行幸した際、『海の中に島があり、そこから煙が昇っているのを見て探らしてみると、小近島の方には大耳、大近島の方には垂耳という土蜘蛛が棲んでいるのがわかった。そこで両者を捕らえて殺そうとしたとき、大耳達は地面に額を下げて平伏し、「これからは天皇へ御贄を造り奉ります」と海産物を差し出して許しを請うたという記事がある』。

「豊後国風土記」にも『五馬山の五馬姫(いつまひめ)、禰宜野の打猴(うちさる)・頸猴(うなさる)・八田(やた)・國摩侶、網磯野(あみしの)の小竹鹿奥(しかおさ)・小竹鹿臣

(しのかおみ)、鼠の磐窟(いわや)の青・白などの多数の土蜘蛛が登場する。この他、土蜘蛛八十女(つちぐもやそめ)の話もあり、山に居構えて大和朝廷に抵抗したが、全滅させられたとある。八十(やそ)は大勢の意であり、多くの女性首長層が大和朝廷に反抗して壮絶な最期を遂げたと解釈されている。『この土蜘蛛八十女の所在を大和側に伝えたのも、地元的女性首長であり、手柄をあげたとして生き残ることに成功している(抵抗した者と味方した者に分かれたことを伝えている)』。『日本書紀』の記述でも景行天皇一二年の冬十月、『景行天皇が碩田国』(おおきたのくに…現在の<sup>大分県</sup>。「おおいた」はこれが訛つたものとも言われる)『の速見村に到着し、この地の女王の速津媛(はやつひめ)から聞いたことは、山に大きな石窟があり、それを鼠の石窟と呼び、土蜘蛛が』二人住んでおり、『名は白と青という。また、直入郡禰疑野(ねぎの)には土蜘蛛が』三人いて、『名をそれぞれの打猿(うちざる)、八田(やた)、国摩侶(くにまろ・国麻呂)といい、彼ら』五人は『強く仲間の衆も多く、天皇の命令に従わないとしている』とある(以下、妖怪の記載はここと無縁なので省略する)。但し、<sup>こ</sup>こでは寧ろ、次の「熊襲」や或いは「隼人」<sup>はやと</sup>族を出すべきであるように思われる。[ウィキの「隼人」](#)から引く。『隼人(はやと)とは、古代日本において、薩摩・大隅(現在の鹿児島)に居住した人々。「はやひと(はやびと)」、「はいと」とも呼ばれ、「隼(はやぶさ)のような人」の形容とも』、『方位の象徴となる四神に関する言葉のなかから、南を示す「鳥隼」の「隼」の字によって名付けられたとも』『あくまで隼人は大和側の呼称』』伝える。『風俗習慣を異にして、しばしば大和の政権に反抗した。やがてヤマト王権の支配下に組み込まれ、律令制に基づく官職のひとつとなった。兵部省の被官、隼人司に属した。百官名のひとつとなり、東百官には、隼人助(はやとのすけ)がある』。『古く熊襲(くまそ)と呼ばれた人々と同じといわれるが』、『熊襲』という言葉は日本書紀の日本武尊物語などの伝説的記録に現れるのに対し、「隼人」は平安時代初頭までの歴史記録に多数現れる。熊襲が反抗的に描かれるのに対し、隼人は仁徳紀には、天皇や王子の近習であったと早くから記されている。』『こうした近習の記事や雄略天皇が亡くなり、墓の前で泣いたなどの記事は、私的な家来であり、帰化したのは』六世紀末・七世紀初期・七世紀末とする説がある。部族には薩摩半島一帯(薩摩国設置以前はこの一帯は「アタ」(「阿多」「吾田」と表記)

と呼ばれていた)に居んでいた「阿多隼人(薩摩隼人)」、後世の大隅郡(大隅半島北部、特に大隅郷(現在の志布志市から曾於市大隅町)周辺か)と呼ばれる地域に居住した「大隅隼人」(私は実はこの土地の血を強く受け継いでいる)、種子島と屋久島(多禰島)の「多櫛隼人」<sup>たね</sup>。甑島の「甑隼人」、日向国に住んだ「日向隼人」らがいた。彼らは『服属後もしばしば朝廷に対し』、『反乱を起こし、大隅隼人などは大隅国設置』(七二三年)『後にも反乱を起こしたが、隼人の反乱と呼ばれる大規模な反乱が征隼人将軍大伴旅人によって征討』(七二一年)『された後には完全に服従し』たとする。言語や文化に関しては『他の地方と大きく異なっていたとされ、『特に畿内では、彼らの歌舞による「隼人舞」が有名であった』(これは天皇の即位式に於いておどましくも従属の証としてずっと舞わされてきたものであるという説を読んだ。ここは私が特に注した)。『また平城宮跡では彼らが使ったとされる「隼人楯」が発掘されており、これには独特の逆S字形容様が描かれている』『延喜式』に記述があり、合致している)』。『肥前国風土記によると、五島列島にも隼人に似た人々がいたという。また新唐書によると「邪古・波邪・多尼の三小王」がいたというが、波邪は隼人のことであろうとされている』。『考古学的には、鹿児島県・宮崎県境周辺に地下式横穴墓が分布し、これを隼人と関係づける説もある』。『これを含み、考古学上、隼人の墓制は三種類あり、薩摩半島南部の「立石土壙墓」(阿多隼人の墓と推測される)と「地下式板石積石室」(薩摩半島より北域)、そして広域に分布する「地下式横穴墓」となる。また、南山城の男山丘陵の大住からも横穴が多く発見されている(本来、山砂利を取る地域であり、横穴は掘りにくい地域の為、隼人墓制と対応するものとみられる)』。『日本神話では、海幸彦(火照(ホデリ)命または火闌降命)が隼人の阿多君の祖神とされ(海幸山幸)、海幸彦が山幸彦に仕返しされて苦しむ姿を真似たのが隼人舞であるという』。『説話の類型(大林太良ら)などから、隼人文化はオーストロネシア語系文化であるとの説もある』とある。

「熊襲」<sup>くまぞ</sup>前の土蜘蛛や隼人らと同じく、日本の記紀神話に登場するところの、大和朝廷に抵抗したとされる九州南部に本拠地を構えた部族。[ウイキの「熊襲」](#)より引く。「古事記」には「熊曾」と表記され、「日本書紀」には「熊襲」、「筑前国風土記」では「球磨噲啖」と表記される。『肥後国球磨郡(くまぐん。現熊本県人吉市周辺。球磨川上流域)から大隅国贈

於郡（そおぐん。現鹿児島県霧島市周辺。現在の曾於市、曾於郡とは領域を異にする）に居住した部族とされ』五世紀頃までには『大和朝廷へ臣従し、「隼人」として仕えたという説もある（津田左右吉ら）。なお、隼人研究家の中村明蔵は、球磨地方と贈於地方の考古学的異質性から、熊襲の本拠は、都城地方や贈於地方のみであり、「クマ」は勇猛さを意味する美称であるとの説を唱えている。』また、魏志倭人伝中の狗奴国をクマソの国であるとする説が、内藤湖南、津田左右吉、井上光貞らにより唱えられている。ただし、この説と邪馬台国九州説とは一致するものではない。』文献資料ではなく、土器の分布の面からは、免田式土器（弥生期から古墳初期にかけて）が熊襲の文化圏によって生み出されたものではないかと森浩一は考察している。』景行朝の記述として、熊襲は頭』（かしら）』を渠師者（イサオ）と呼び、二人いて、『その下に多くの小集団の頭たる梟師（タケル）がいたと記している。大和王権は武力では押さえられないので、イサオの娘に多くの贈り物をして手なづけ、その娘に、父に酒を飲ませて酔わせ、弓の弦を切り、殺害した（ヤマトタケルが弟彦（オトヒコ）という武人を美濃国に求めた神話においても、敵を酔わせて殺害する戦法を取っている）』とも伝える。「古事記」の『国産み神話においては、隠岐の次、杵岐の前に生まれた筑紫島（九州）の四面のひとつとして語られ、別名を「建日別（タケヒワケ）」といったとされ』、『古事記』の後の箇所では、『景行天皇の皇子であるヤマトタケルによるクマソタケル（熊襲建、川上梟師）の征伐譚が記され、日本書紀においては、それに加え、ヤマトタケルに先立つ景行天皇自身の征討伝説が記される。特に前者は、当時小碓命と名乗ったヤマトタケルが、女装シクマソタケル兄弟の寝所に忍び込み、これらを討ち、その際に「タケル」の名を弟タケルより献上されたという神話で有名である。』鹿児島県霧島市隼人町には「熊襲の穴」と伝える洞窟があり、ここは『熊襲の首領である熊襲建、川上梟師の兄弟が居住にしていたと伝わり、『川上梟師が女装したヤマトタケルに誅殺された場所とも伝』えられているとある。

「熊蟬」有翅昆虫亜綱半翅（カメムシ）目頸吻亜目セミ型下目セミ上科セミ科セミ亜科エゾゼミ族クマゼミ属クマゼミ *Cryptopygma facialis*。

「ここを先途と」この瞬間を勝敗や運命を決する大事な分かれ目、瀬戸際と心得て。但し、

「先途」にはそこから「行きつく果て」や「最後」の謂いもある。ここには蟬の寿命は勿論のこと、人の命の儂さという伏線もそこに匂わされていることは言うまでもない。

「法師蟬」「ほうしぜみ」。既注のセミ亜科ツクツクボウシ族ツクツクボウシ属ツクツクボウシ *Meimuna opalifera* のこと。

「六尺」約一・八メートル。

「——残酷な、という気がしたんです。何が残酷か。爺さんがそんな事をしなくてはならないのが残酷か。見ていた子供が残酷か。そんな秘密の情景を、私がそつと双眼鏡で見ているということが残酷なのか、よく判らないんです。私は、何だか歯ぎしりしながら見ていたような気がするんです」注意されたい。主人公村上兵曹はこの直前に、その——孫のいる老人の自死未遂の風景——を語った見張り兵に対する「嫌悪」を心理的にはここで「一旦呑み込んでいる留保しているように見える事実である。私は確かに留保していると思う。それは彼の台詞の中に実は村上兵曹の、ひいては梅崎春生自身の感懐であるところの——「そんな秘密の情景を、私がそつと双眼鏡で見ているということが残酷なのか」もしないという感懐が表明されているからである。そうして、その「死」の翳からさらに梅崎特有の不吉な伏線であるところの「そうですかねえ。人間は、人が見ていると死ねないものですかねえ。独りじやないと、死んで行けないものですかねえ」という見張り兵の台詞を以ってハレーションを起しそうな画面はフェイド・アウトする。」

午後の当直を終えて外に出ると、夕焼雲が空に明るかった。今日は麦酒ビールの配給があったと言って、交替に来た兵の中には、目縁まぶちを赤くしているのも居た。私が当直に立っているとき、交替時の直ぐ前だったか、緊急信が一通来た。私がそれを訳した。

居住区の方に戻りながら、私はその電報のことを考えていた。それは決定的な内容を持った電報であった。

居住区に入って行くと、通路の真中に卓を長く連ね、両側にそれぞれ皆腰かけ、卓の上は

麦酒瓶ビールびんの行列であった。煙草の煙が奥深くこもり、瓶やコップの触れる音ががちがち響いた。奥の方に通り返け、私の席についた。食器に麦酒がトクトクとつがれるのを眺めながら、私は此の騒然たる雰囲気なまじに何か馴染めない気がした。卓が白い泡で汚れている。私は上衣を脱ぐと、口に食器を持って行った。生ぬるい液体が、快よい重量感をもって、咽喉のどを下って行った。

私の前には、電信の先任下士と吉良兵曹長が腰をおろしていた。先任下士は頬を赤くしていたが、吉良兵曹長はむしろ青く見えた。そしてその話し声がふと私の耳をとらえた。

「大きなビルディングが、すっかり跡かたも無いそうだ」

「全然、ですか」

「手荒くいかれたらしいな」

「どこですか」

「広島」

ぼんやり聞いていた。吉良兵曹長がふと私の方に向きなあった。

「村上兵曹。何か電報があつたか」

濁ったその眼が、射るように光った。交替前の電報のことが、再び頭をよぎった。

「ソ連軍が、国境を越えました」

私の言葉が、吉良兵曹長に少なからぬ衝動を与えたらしかった。しかし、表情は変らなかつた。黙ってコップをぐつとほした。長い指で、いらだたしげに卓の上を意味なく二三度たいた。

「参戦かね」

「それはどうか判りません。電報では、交戦中と言うだけです」

私は吉良兵曹長の顔をじつと見つめていた。無表情な頬に、何か笑いに似たものが浮んだ。ぞつと身をすくませるような、残忍な笑いだ。私は思わず目を外そらした。食器をかたむけて、麦酒を口の中に流し込んだ。再び瓶を傾けて、食器についだ。酔いがようやく廻って来るらしかった。手足の先がばらばらにほぐれるような倦怠感が、快よく身内にしみ渡って来た。



うというようなことは、あるいは言ったかも知れません」

そう言いながら、私は自らの弱さが、かっとする程腹が立って来た。私もじっと彼の顔を見据えながら言った。

「どうでもいいことじゃないですか。そんな馬鹿げたこと」

「今年中に終るか」

執拗な口調であった。少し呂律ろれつが怪しくなっているらしかった。

「村上兵曹。死ぬのはこわいか」

「どうでもいいです」

「死ぬことが、こわいだらう」

瞳の中の赤い血管まではっきり見えるほど、私は彼の顔に近づいた。酔いが私を大胆にした。私は、顔の皮が冷たくなるような気持で、一語一語はっきり答えた。

「私が、こわがれば、兵曹長は満足するでしょう」

はげしい憎悪の色が、吉良の眼に一瞬みなぎったと思った。それは咄嗟とっさの間であった。立ち上るなど感じた。立ち上らなかつた。吉良兵曹長は、首を後ろにそらせながら、引きつったような声で笑い出した。声は笑っていたが、顔は笑っていなかつた。卓の下で握りしめていた私の掌に、今になって脂あぶらがにじみ出て来た。

一人の兵隊が、卓からはなれて、よろめいて来た。歌声は乱れながら、雑然と入りまじった。

「兵曹長。踊ります」

「よし、踊れ」

笑いを急に止めて、吉良兵曹長は叱りつけるような声でそう言った。

その兵隊は、半裸体のまま、手を妙な具合に曲げると、いきなりシュツシュツと言いながら、おそろしくテンポの早い出鱈目でたらめの踊りを踊り出した。よろめく脚を軸として、独楽こまのように廻った。手を猫の手のようにまげて、シュツシュツという合の手と共に、上や下に屈伸した。歌声が止み、濁った笑い声が、それに取って代った。

「何だい、そりゃあ」

「止める、止める」

兵隊は、ますます調子を早めて行った。目が廻るのか、額を流れる汗が眼に入るのか、眼をつむったまま憑かれたもののように身体を烈しく動かした。よろめいて、身体を壕の壁で支えた。電灯の光まで土埃がうっすらと上って来た。けろりとした顔付になつて兵隊は敬礼をした。

「終わりました。四国の踊りであります」

歌い声が新しく起つた。何か弥次が飛んだようだけれど、はっきり聞えない。向うの方で、麦酒瓶が碎ける音がした。そして、雑然たる合唱がはじまつた。

さらばラバウルよ 又来るまでは

しばし別れの 涙がにじむ

私は、眼をつむつた。動悸が胸にはげしかった。掌で、顎を支えた。顔についた土埃のため、ざらざらとした。頭がしんしんと痛かった。じつと一つのことを考えて居た。

死ぬのは、恐くない。いや、恐くないことはない。はっきりと言えば、死ぬことは、いやだ。しかし、どの道死ななければならぬなら、私は、納得して死にたいのだ。——このまま此の島で、此処にいる虫のような男達と一緒に、捨てられた猫のように死んで行く、それではあまりにも惨めではないか。生れて以来、幸福らしい幸福にも恵まれず、営々として一所懸命何かを積み重ねて来たのだが、それも何もかも泥土にうずめてしまう。しかしそれでいいじゃないか。それで悪いのか。私は思わず、吉良兵曹長に話しかけていた。

「吉良兵曹長。私も死ぬなら、死ぬ時だけでも美しく死のうと思います」

残忍な微笑が、吉良兵曹長の唇にのぼった。毒々しい口調で、きめつけるように言った。

「おれはな、軍隊に入って、あちらこちらで戦争して来た。支那戦線にもいた。比律賓にもいたんだ。村上兵曹。焼け焦げた野原を、弾丸がひゅうひゅう飛んで来る。その間を縫って前進する。陸戦隊だ。弾丸の音がするたびに、額に突き刺さるような気がする。音の途断とだえた隙すきをねらつて、気違いのように走って行く。弾丸がな、ひとつでも当れば、物すごい勢で、

ぶつたおれる。皆前進して、焼け果てた広っぱに独りよ。ひとりでもがいている。そのうちに、動かなくなり、呼吸をしなくなってしまう。顔は歪んだまま、汚い血潮は、泥と一緒に固まってしまふ。日が暮れて、夜が明けて、夕方鴉が何千羽とたかり、肉をつつき散らす。蛆が、また何千匹よ。そのうち夜になって冷たい雨が降り、臂の骨や背骨が、白く洗われる。もう何処の誰ともわからない。死骸か何か、判らない。村上兵曹。美しく死にたいか。美しく、死んで行きたいのか」

言い終ると、身の毛もすくむような不快な声でわらい出した。じつと堪えながら、私は谷中尉のことを思っていた。あの若い元気な中尉も、美しく死にたいという考えは、感傷に過ぎぬと話して聞かせた。しかしそれが何であろう。虚無が、谷中尉にしろ吉良兵曹長にしろ、その胸に深い傷をえぐっているに過ぎぬ。私をもつ美しく死にたいというひそやかな希願と、何の関係があるか。

不思議な悲哀感が、私を襲った。私は、再び吉良兵曹長の方は見えず、虚ろな眼ざしを卓の上に投げていた。騒ぎはますます激しくなっていくようであった。昏迷しそうになる意識に鞭打ち、私は更に麦酒を口の中にそそぎ込んだ。かねてから私を悩ます、ともすれば頭をもたげようとするのを無意識のうちに踏みつぶし踏みつぶして来たあるものが、俄かにはつきりと頭の中で形を取って来るらしかった。私は、何の為に生きて来たのだろうか。何の為に？——

私とは、何だろう。生れて三十年間、言わば私は、私というものを知ろうとして生きて来た。ある時は、自分を凡俗より高いものに自惚れて見たり、ある時は取るに足らぬものと卑しめてみたり、その間に起伏する悲喜を生活として来た。もはや眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間で、見栄も強がりも捨てた私が、どのような態度を取るか。私という個体の滅亡をたくらんで、鋼鉄の銃剣が私の身体に擬せられた瞬間、私は逃げるだろうか。這い伏して助命を乞うだろうか。あるいは一身の矜持を賭けて、戦うだろうか。それは、その瞬間にのみ、判ることであった。三十年の探究も、此の瞬間に明白になるであろう。私にとって、敵よりも、此の瞬間に近づくことがこわかった。

(ねえ、死ぬのね。どうやって死ぬの。よう。教えてよ。どんな死に方をするの)

耳の無いあの妓おんながこう聞いた時、その声は泣いているようでもあったし、また発作的な笑いを押えているような声でもあった。酔いの耳鳴りの底で、私は再び鮮かにその幻まぼろしの声を聞いた。私は首を反そらして、壁に頭をもたせかけ、そして眼をつむった。頭の中で、蟬が鳴いている。幾千匹とも知れぬ蟬の大群が、頭の壁の内側で、鳴き荒すきんでいる――

洞窟の内の、此の不思議な宴は、ますます狂躁に向い、変に殺気を帯びて来た。入口から風が吹き抜けると、歌声がまた新しく起った。卓子がぐらぐらゆれる。私は眼を開いた。ソ連の参戦も糞くそもあるか。頭を強く二三度振り、今までの考えから抜け出ようと努力しながら、歌でも歌おうとよろめく足をふみしめ、卓に手をかけ立ち上ろうとした。吉良兵曹長の声が、吹き抜けるように洞内にひびいた。

「兵隊。軍刀を持って来い！」

黒白もわかたぬほど酔っているらしかった。目が据すわり、顔がぞつとする程蒼かった。立ち上ろうとして、平均を失い、卓に肱をついた。麦酒瓶が大袈裟おおげさな音を立てて倒れ、白い泡が土間にしたり落ちた。卓に片手について、下座の方を見据えた。

「剣舞をやるから、持って来い。軍刀」

ふらふらと進み出た。

雑然たる騒音の中から、獣のような声を出して、詩を吟ぎんじ始めた。誰の声か判らない。文句も節もはっきりしないままに、吉良兵曹長は軍刀を抜き放った。拍手が三つ四つ起って、すぐ止んだ。笑い声とする。詩を吟ぎんずる声が二つ重なったと思うと、起承も怪しいまま、転々と続いて行くらしい。軍刀をかざしたまま、吉良兵曹長の上体はぐらぐらと前後に揺れた。眼をかつと見ひらいた。軍刀を壁に沿って振り下すと、体を開いてこぶしを目の所まで上げた。よろよろとして倒れかかり、私の肩にがっとしがみついた。軍刀は手から離れて、土の上に音無く落ちた。

「村上。飲め。もっと飲め」

彼の掌に掴まれて、私の肩はしびれるように痛かった。それに反抗するように肩を張り、私は更に新しい麦酒瓶に左の手を伸ばして居た――

「やぶちゃん注…以下のシークエンスの時間は、まず会話に出る、

「広島」への原爆投下が昭和二〇（一九四五）年八月六日午前八時十五分

で、  
「ソ連軍」が「国境」を越えて日本軍と「交戦中」となるは、昭和二〇（一九四五）年八月八日九日の日本時間午前零時（現在の時差で計算）のソ連軍対日攻勢作戦発動した以降で、同時刻頃には牡丹江市街（現在の黒竜江省南東部にある牡丹江市）が敵の空爆を受け、午前一時三十分頃（現地時間ならば日本時間は午前零時三十分）には新京（現在の吉林省長春市）郊外が空爆を受けている頃を「事実」は指す（後注参照）である。但し、

その——ソ連軍国境ヲ越エタリ——といった暗号電報が桜島まで齎されたのは、場面（黄昏の色がうすれかかった）から見ても八月九日の夕刻遅く

である。ところが、この

八月九日とは長崎への原爆投下の当日（八月九日午前十一時二分）

でもある。しかし、本文には長崎の原爆投下を知っている登場人物は出てこない。彼らは誰も、広島どころか同じ九州の、しかも、自分らを管轄する佐世保鎮守府に近い長崎に、広島と同じ凶悪な爆弾が落されたことを、その当日、しかも海軍秘密基地の兵であるのにも拘わらず、不思議に知らないのである。新型爆弾による壊滅的破壊は軍内部でも扱いを慎重にしていたものらしいことは知っている。ここではかの吉良兵曹長でさえ、この日にやっと、広島の原爆投下の惨状の事実を先任下士官からここで聴いて一瞬、呆然として居ることからも判る（但し、広島のそれは六日にラジオ報道があり、八月七日に大本営が発表、八月八日には各新聞が広島が新型爆弾で攻撃されたことを一面トップで報じているから、次のパートに出るように「鹿児島の新聞社が焼けてからというものは、此の部隊に新聞が入って居ない」としても、この四日も経った八月九日まで下士官である吉良が広島の新型爆弾攻撃を知らないというのはやや不自然に思われる。長崎の原爆投下も六時間以上が経過しているのに、海軍秘密基地の連中が誰も何も知らないというのも、やはり変な気はする……が！ どうも

これは事実のようなのである……それは、以前にも引いた梅崎春生自身の同日（！）の日記

から判明するのである。以下、底本全集第七巻の「日記」から引く。但し、前に示したのと同じく、これに限っては戦前の記載であるので恣意的に漢字を正字化して歴史的仮名遣に改めたので注意されたい。「直」に「ちよく」(ちよく)とルビが振られているが、梅崎春生自身の附したものととは思われないので外した。

\*

八月九日

松本文雄が召集されて来ているのに會ひ、一しよに酒を飲みに行つた夢を見る。大濱氏も出て来る。

昨夜は夕食にジャガ芋つぶしたのを少量、焼酎少量のみ、十二時より直に立つとやはり胃の調子悪し。

\*

この「松本文雄」は熊本第五高等学校の同期生らしい。個人ブログ「五高の歴史・落穂拾い」の「[かざしの園](#)」という記事に「統龍南雑誌小史」(昭和九(一九三四)年度二百二十七号より二百二十九号)という本が示されており、その編集委員に『松本文雄、北野裕一郎、梅崎春生、柴田四郎、島田家弘』とある。春生は五高には昭和七年四月入学である。「十二時」とは昼の十二時であろう(小説に即すなら、前夜に飲んで時間が経っていないから腹具合が悪い、という解釈が成り立つが、実際には、この前の二日の日記に『胃が極度に弱つてゐるらしい』とあり、後の敗戦翌日の十六日では消化器の激しい衰弱が読み取れる)。ともかくも、これは広島と同じ恐るべき新型爆弾がこの日の朝に同じ九州の長崎に落されたことを知っている日記ではない。さて、以上より、

——本パートのロケーションは昭和二〇(一九四五)年八月九日の夕刻六時以降から八時前頃までを想定してよいと考える(八時前は巡検時間から)。

「ソ連軍が、国境を越えました」ソヴェエト連邦の宣戦布告は正確には昭和二〇(一九四五)年八月八日(モスクワ時間午後五時、日本時間午後十一時)にソ連外務大臣ヴァチエスラフ・モロトフより日本の佐藤尚武駐ソ連大使に知らされているが、[ウィキの「ソ連対日参戦」](#)によれば、『事態を知った佐藤は、東京の政府へ連絡しようとした。ヴァチエスラフ・モロト

フは暗号を使用して東京へ連絡する事を許可した。そして佐藤はモスクワ中央電信局から日本の外務省本省に打電した。しかしモスクワ中央電信局は受理したにもかかわらず、日本電信局に送信しなかった。八月九日午前一時（ハバロフスク時間・現行と同じならば日本時間は午前零時）『にソ連軍は対日攻勢作戦を発動した。同じ頃、関東軍総司令部は』第五軍司令部からの『緊急電話により、敵が攻撃を開始したとの報告を受けた。さらに牡丹江市街』（黒現在の竜江省南東部にある牡丹江市）『が敵の空爆を受けていると報告を受け、さらに『午前一時三十分頃（現地時間ならば日本時間は午前零時三十分）には新京（現在の吉林省長春市）』郊外の寛城子が空爆を受けた。総司令部は急遽対応に迫われ、当時出張中であつた総司令官山田乙三朗大将に変わり、総参謀長が大本営の意図に基づいて作成していた作戦命令を発令、「東正面の敵は攻撃を開始せり。各方面軍・各軍並びに直轄部隊は進入する敵の攻撃を排除しつつ速やかに前面開戦を準備すべし」と伝えた。さらに中央部の命令を待たず、『午前六時に』『戦時防衛規定』「満州国防衛法」を発動し、「関東軍満ソ蒙国境警備要綱」を破棄した。この攻撃は関東軍首脳部と作戦課の楽観的観測を裏切るものとなり、前線では準備不十分な状況で敵部隊を迎え撃つこととなつたため、積極的反撃ができない状況での戦闘となつた。総司令官は出張先の大連でソ連軍進行の報告に接し、急遽司令部付偵察機で帰還して午後一時に司令部に入つて、総参謀長が代行した措置を容認した。さらに総司令官は宮内府に赴いて溥儀皇帝に状況を説明し、満州国政府を臨江に遷都することを勧めた。皇帝溥儀は満州国閣僚らに日本軍への支援を自発的に命じた』とある。

「ふと自責の念が、鋭く私を打つた。桜島に来て以来、私は家にも便りを出さない」これは梅崎春生自身の事実は反するように思われる。先に示した彼の同年八月二日（本ロケーションの一週間前）の日記の中に、

\*

東京からも便りが無い。うちからも。

\*

とあり、これは彼が東京の友人や福岡の実家に手紙を出したにも拘らず、返事も無い、という意でとれるからである。

「私の老母は知らないだろう」梅崎春生の母貞子は昭和二九（一九五四）年に子宮癌で享年六十四歳で亡くなっているから、生年は明治三三（一九〇〇）年生まれとして、敗戦時は五十五歳で「老母」というにはやや若い気はする。なお、彼の父建吉郎は昭和一三（一九三八）年二月（春生二十三歳）に享年五十八歳で脳溢血と床擦れから敗血症を起こして亡くなっているから、父の生年は明治一四（一八八一）年生まれとなり（底本年譜に拠る）、父母の年齢は十九も離れている。

「私の兄は、陸軍で、比島にいる。おそらくは、生きて居まい」春生より三つ年上の兄は実際には戦死していない。春生の実兄梅崎光生（大正元（一九一二年）〜平成二二（二〇一〇）年）は東京文理科大学哲学科卒で、哲学者で作家。二度応召され、敗戦時には米軍の捕虜となった。昭和二一（一九四六）年六月にフィリピン（本文の「比島」は「ひとつ」と読み、フィリピン諸島のこと）の俘虜収容所から復員帰国し、佐世保港に上陸、博多駅に降りている。この兵隊体験をもとに後年に創作を試み、「無人島」などの戦記物や、戦争体験をもとにした日常生活などを描く作品を書き続けた。著書に「ルソン島」「ショーペンハウアーの笛」、作品集に「暗い溪流」「春の旋風」「幽鬼庵雑話」「君知るや南の国」などがある。参考の一部にしたこちらの記載には、『幼年時代の思い出は短篇「柱時計」のなかに、「父の家は佐賀の貧乏士族で、結婚当時は福岡の連隊に中尉としてつとめており、母の家は同じく佐賀の町家であった。／私が生まれたのも、物心ついたのも、福岡市の舞鶴城つまり連隊の近く簗子町という所であった」などあり、また『幽鬼庵雑話』には弟の梅崎春生のことや閱歴が語られている』とある。本パートの吉良兵曹長のフィリピンでの体験談は勿論、春生の後の「日の果て」「ルネタの市民兵」「B島風物誌」などは春生の実体験にはない南方戦線が舞台であり、彼がネタ元ではないかとも思われる。

「弟はすでに、蒙古で戦死した」梅崎春生の実弟梅崎忠生（昭和四（一九二九）年〜昭和二〇（一九四五）年）は彼をモデルにした「狂い風」によれば、出征中に喘息の治療薬として用いた麻薬の中毒に罹患し、敗戦直前に自殺している（この内、病態は金剛出版昭和五〇（一九七五）年刊の春原千秋・梶谷哲男共著「パトグラフィ叢書 別巻 昭和の作家」の「梅崎春生」（梶谷哲男氏担当）を参考にし、生年は「松岡正剛の千夜千冊」の第二一六一夜『幻

[『梅崎春生』](#)の『長兄と末弟には17歳の歳のひらきがあった』という記載から逆算、没年は底本年譜に『終戦直前に自殺』という記載から推定した。彼忠生については事蹟記載がすこぶる少ない。厳密には実際の彼の死は「戦死」ではなく、「戦病死」或いは「変死」扱いである。但し、底本の別巻にはこの忠生のさらに下の弟（梅崎家は男ばかりの六人兄弟）であった梅崎栄幸氏の二兄、春生のこと」が載るが、そこに『戦後五年ほどして忠生兄の死は、実は戦死ではなくて睡眠薬による自殺であったことを聞いた』とあるから、梅崎春生自身ももしかすると弟の自死の事実はず、戦死と認識していたのかも知れない（本作発表は敗戦の年の昭和二〇（一九四五）年十二月）。

「同期の桜」特攻隊員に好んで歌われ、その後広く知られるようになった軍歌「同期の桜」は大村能章作曲。原詞は西條八十によるが、知られたそれは西條のものではない。参照したウィキの「同期の桜」より引く。『原曲は「戦友の唄（二輪の桜）」という曲で、昭和一三（一九三八）年一月号『少女倶楽部』に『発表された西條の歌詞が元になっている。直接の作詞は、後に』特攻兵器人間魚雷「回天」の第一期搭乗員となった帖佐裕海軍大尉（彼は生き残って戦後は銀行の重役となった）が、『海軍兵学校在学中に江田島の「金本クラブ」というクラブにあったレコードを基に替え歌にした』ことが戦後に明らかにされた。但し、五番まである歌詞のうち、三番と四番は『帖佐も作詞していないと証言しており』『人の手を経るうちにさらに歌詞が追加されていき、一般に知られているもののほかにも様々なバリエーションが存在することから、真の作詞者は特定できない状態にある』とある。歌詞を引こうと思つたが、調べてみると西条氏（一九七〇年没）も帖佐氏（一九九四年没）も著作権が切れていないのでやめた。ネット上には全歌詞が蔓延しているが、これでいいのかね？ 重箱隅をほじくるのが好きなのは日本の音楽著作権協会（JASRAC）ちゃんよ？

『「兵隊どもに、戦争は今年中に終ると言ったのか。え。村上兵曹」／「そんなことは言いません」／あの厭な、マニヤックな眼が、私の表情に執拗にそそがれている。何気なく振舞おうと思った。飲みほそうと食器を持った手が少しふるえた。／「此のように決戦決戦とつづけて行けば、どちらも損害が多くて、長くつづけられないだろうというようなことは、あるいは言ったかも知れません』前段で、桜島に村上二曹が着任してまだ日の経たないある

日、空気が淀んでしやうがない暗号室のある壕に、通風のための穴を一つ掘っている兵隊らが働いているのを監督がてら、掘り終るのを計算したところが、

\*

……此の風穴が完成するのは少くとも三箇月にかかるのである。十一月頃になったら、さだめし涼しい風が吹きこむことであろうと、むしろ腹立たしく、私は兵隊に話しかけた。

「此の工事は誰の命令だね」

「吉良兵曹長です」

「それまで此処が保つと思ふのかね」

その兵は、もっこをわきに置いて、私の前に立った。

「此の穴が出来上らないうちに、米軍が上陸して来ますか」

真面目な表情であった。十五歳になるといふ少年暗号員である。私は莧たほこを深く吸い込みながら、聞いた。

「勝つと思うか？」

「勝つ、と思います」

童話の世界のように、疑いのない表情であった。ふっと暗いものを感じ、私は掌てをふって作業を始めるように合図した。そのとき、私は不機嫌な顔をしていたに違いない。私は立ち上り、莧たほこを踏み消した。そしてあるき出した。

\*

の箇所を指すものであろう。

「呂律るれつ」本来は「りよりつ」と読んだ。「呂りよ」も「律りよ」も雅楽の音階名で、雅楽合奏の際に呂の音階と律の音階が上手く合わないことを「呂律りよが回らぬ」と言っていたものが、訛化して「ろれつ」となり、しかも物を言うときの調子や言葉の調子の謂いに広がったものである。

「四国の踊り」徳島の阿波踊りの男踊り（半天踊り）か、そこから派生した『一人が凧を操る役、そしてもう一人がやつこ凧として操られる様を表現したアクロバティックな「やつこ踊り』か？（[ウイキの「阿波踊り」](#)から引用）。

「さらばラバウルよ 又来るまではしばし別れの 涙がにじむ」ラバウル小唄。[ウイキの](#)

「ラバウル小唄」より引く。若杉雄三郎（明治三六（一九〇三）年～昭和三〇（一九五五）年）『作詞、島口駒夫作曲の戦時歌謡』で昭和二〇（一九四五）年に発売された。本来は昭和一五（一九四〇）年に『ビクターより発売の、南洋航路（作詞作曲は同じ人物）が元歌である。歌詞に太平洋戦争の日本海軍の拠点であったラバウルの地名が入っていたこともあり、南方から撤退する兵士たちによって好んで歌われた。このため、戦争末期に日本で流行したため、レコードとして広まったというよりは、兵士たちが広めたという方が正しいだろう』。『歌詞については、二つのパターンが存在する。一つは、「さらばラバウルよ」の歌い出しで、後に元歌である南洋航路の歌詞が続くものである。二つ目は、歌い出しは一緒であるが、二番が「船は出ていく」とオリジナルのものとなり、後が元歌という形である。なお、一つ目では南洋航路の歌詞がすべて入っているが、二つ目は元歌三番目の歌詞「流石男と」の部分が欠けている』とある。以下、サイト「軍歌、戦時歌謡アルバム」の「ラバウル小唄」を参考に一部表記を正字化、歴史的仮名遣にした。ルビは私が振った。

\*

一、

さらば ラバウルよ また来るまでは

しばし 別れの 涙がにじむ

戀し懐しなつか あの島 見れば

椰子やしの 葉かげに 十字星

二、

船は 出てゆく 港の沖へ

いとし あの娘この 打ちふるハンカチ

聲をしのんで ところで泣いて

両手 合はせて ありがたう

三、  
波の しぶきで 眠れぬ夜は  
語り あかそよ デツキの上で  
星が またたく あの星 みれば  
くわへ 煙草も ほろにがい

四、  
赤い 夕陽が 波間に沈む  
果ては 何處ぞ 水平線よ  
今日も はるばる 南洋航路  
男 船乗り かもめ鳥

五、  
さすが男と あの娘は 言ふた  
燃ゆる 思ひを マストに かかげ  
ゆれる 心は 憧れ はるか  
今日は 赤道 椰子の下

\*

「死ぬのは、恐くない。いや、恐くないことはない。はつきりと言えば、死ぬことは、いやだ。しかし、どの道死ななければならぬなら、私は、納得して死にたいのだ。——このまま此の島で、此処にいる虫のような男達と一緒に、捨てられた猫のように死んで行く、それではあまりにも惨めではないか。生れて以来、幸福らしい幸福にも恵まれず、嘗々として一所懸命何かを積み重ねて来たのだが、それも何もかも泥土にうずめてしまふ」(下線太字やぶちやん)主人公の村上兵曹の本心の心の叫びの部分である。私はここを読むと、梅崎春生の「輪唱」の「猫の話」([ブログ横書版](#)・[PDF縦書版](#))のカロを思い出さずにはいられない。その授

業案 ([ブログ横書版](#)・[PDF縦書版](#)) も宜しければ読みたい。私が思い出さずにはいられない意味がよりお分かり戴けるものと思う。

「陸戦隊」海軍陸戦隊。大日本帝国海軍が編成した陸上戦闘部隊。ウィキの「[海軍陸戦隊](#)」より引く。『元々は常設の部隊ではなく、艦船の乗員などの海軍将兵を臨時に武装させて編成することを原則としたが』、一九三〇年代（昭和五年から十四年）には『常設的な部隊も誕生した』。『太平洋戦争では戦域が拡大するにつれ、島嶼や局地防衛の必要から、特別陸戦隊のほか警備隊や防衛隊などの名称で陸戦隊が次々と編成された。また、海軍独自の空挺部隊（パラシュート部隊）（陸軍の空挺部隊とともに空の神兵の愛称）や戦車部隊も保有した。空挺部隊は』昭和一七（一九四二）年一月に、現在のインドネシア中部のセレベス島（当時はオランダ領東インドの植民地）『メナドで日本最初の落下傘降下作戦を実施し、指揮官の堀内豊秋中佐はその功を讃えられ、特別に昭和天皇に拝謁した。終戦前には本土決戦に向けて艦艇部隊などの多くが陸戦隊に改編され、総兵力は』十万人に『達していた』。『このように、日本海軍の陸戦隊は拡充を続けたものの、アメリカ海兵隊の様に陸・海軍から独立した軍種となることはなかった。太平洋戦争前に、常設の地上戦闘部隊として海兵隊を復活させることなどが陸戦隊関係者から提案されていたが、採用されなかった』。『海軍内で陸戦隊はあくまで二義的な任務として捉えられ、一般的な海軍士官にとって根拠地隊などの常設的性格の陸戦隊への配置は左遷に近い扱いであった』。もっと詳しい「編成」「装備」等の記載がリンク先にあるので参照されたい。

「谷中尉」冒頭から二。パート目の枕崎で出逢った海軍士官。本作全体を貫く命題「美しく死ぬ、美しく死にたい、これは感傷に過ぎんね」を最初に開示した人物である。そうしてこの回想が直ちに、その時に買った耳介の欠損した女郎の回想に繋がる辺りは梅崎の真骨頂と言える部分である。

「あの若い元気な中尉も、美しく死にたいという考えは、感傷に過ぎぬと話して聞かせた。しかしそれが何であろう。虚無が、谷中尉にしろ吉良兵曹長にしろ、その胸に深い傷をえぐっているに過ぎぬ。私がつ美しく死にたいというひそやかな希願と、何の関係があるか」主人公の、いや、作者梅崎春生の公案の提示である。

「私は、何の為に生きて来たのだろうか。何の為に？——私とは、何だろう。生れて三十年間、言わば私は、私というものを知らうとして生きて来た。ある時は、自分を凡俗より高いものに自惚うぬぼれて見たり、ある時は取るに足らぬものと卑しめてみたり、その間に起伏する悲喜を生活として来た。もはや眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間で、見栄も強がりも捨てた私が、どのような態度を取るか。私という個体の滅亡をたくらんで、鋼鉄の銃剣が私の身体に擬ぎせられた瞬間、私は逃げるだろうか。這い伏して助命を乞うだろうか。あるいは一身の矜持きやうじを賭けて、戦うだろうか。それは、その瞬間にのみ、判ることであった。三十年の探究も、此の瞬間に明白になるであろう。私にとって、敵よりも、此の瞬間に近づくことがこわかった。／（ねえ、死ぬのね。どうやって死ぬの。よう。教えてよ。どんな死に方をするの）」変形して公案が再提示される。「擬ぎせる」とは武器などを体に刺し当てる、の意。「三十年」本作の最初に注した通り、梅崎春生が敗戦当時二十九、数えて三十であったことと完全に一致する。

「頭の中で、蟬が鳴いている。幾千匹とも知れぬ蟬の大群が、頭の壁の内側で、鳴き荒すんでいる」「これは何年にも互って常時、慢性的な耳鳴りに悩まされている私などには頗る実感として落ちる。[私の駄句](#)二句をお笑い序でに掲げておく。二〇一〇年五十三歳の時の句である。

ノイズ・キャンセリング 夏

蟬時雨耳鳴りの音ねも森の内

ノイズ・キャンセリング 秋

蟲すだく耳の内なる蝸牛管かたつむり

「軍刀」[ウイキの「軍刀」](#)より引く。海軍の士官・特務士官・准士官の正式な軍刀は、昭和一二（一九三七）年に制定されている。『陸戦隊士官が第一次上海事変で使用した従来のサベル様式の長剣は実戦の際に重大な欠陥を露呈した。「護拳が邪魔」などの陸軍と同じ苦情のほかに、「雨や泥に濡れて柄の鮫皮や鞘の革が剥がれる」「石突の金具から水が入り刃が

錆びる」などの海軍長剣ゆえの問題点が生じた。そのためこれら難点を是正し、また当時の国粋主義思想もあって太刀型へと変更された。しかしながらあくまで海軍は陸戦主体でないため、儀礼的な要素を幾分か残した外装となった』。佩環はいかん（腰の革帯に佩用にするための金属製の鞘とり付けられた輪）は『二個固定、柄は黒漆の塗られた鮫皮に茶色の柄糸、鞘は黒漆塗りが多く、一部には黒漆塗の研出鮫皮や、陸戦隊向けの黒シボ革で包んだ物もあった。鏢は装飾のない丸型。等級は一等・二等の』二種類があった。『陸軍と同じく太平洋戦争開戦以降は外装品位の低下が起き、普通塗料による鞘塗装や略式外装も普及し』昭和二〇（一九四五）年には『更に臨時特例』（佩環を一個に省略し、部品も省略した革巻き鞘のもの）『が出された』とある。但し、それとは別に、「異種軍刀」と呼ばれるものがあり、これは『陸海軍の軍人軍属を問わず、上記の制式軍刀外装とは異なり旧来の日本刀拵（打刀・太刀）を軍刀として使用できるように改造したものである。最低限』、『軍刀の形を成すため、鞘に革覆を巻き吊環を付したものが大半で、鏢や兜金の一部を軍刀部品に変更したものもある。その歴史は古く、日露戦争当時の写真にも佩用がみられる。支那事変勃発以降、折からの軍刀供給不足によりこうした改造品の佩用は認められていた』とある。このシーンのそれはこちらの「異種軍刀」かも知れない。

「黒白」ここは「こくびやく」と読みたい。」

丘を降りて、船着場の放水塔の下で洗濯をした。雲は無く暑かったけれども、風は絶えず東南の方向から吹いていた。洗濯物のかわきも早いだろうと思われた。放水塔の周囲には、兵隊が沢山集って洗濯をしていた。ほとんど、年多い兵隊ばかりであった。私の隣に洗濯していた兵が、もひとりの兵に話しかけるのを聞いた。

「ソ連が、参戦したそうじゃないか」

「うん」

それ切り黙ってしまった。話しかけられた兵隊は、何か不機嫌な顔をしていた。彼等の洗

う石鹼の泡が、白くふくれてかたまつたまま、私の前の水溝に流れて来た。

鹿兒島の新聞社が焼けてからというもの、此の部隊に新聞は入って居ない筈であった。掌暗号長が兵たちに、ソ連参戦のことを外に洩らすなど訓示しているのを私は聞いたが、それにも拘らず何時の間にか拡がっているらしかった。怠業の気分が、部隊一般にかすかにただよっていた。どの点がそうだと指摘は出来ないが、腐臭のようにかきわけられた。海岸沿いの道端に天幕を張って、士官達は一日中ごろごろしていたし、もつこを持って壕を出入する兵隊も、何かのろのろした動作であった。

海沿い道を通り、洗濯物をかかえて、私は丘を登った。居住区の前樹に、洗濯物を注意して拡げた。上空から見ると、うるさいのである。私は壕の中に入り、衣囊の中から便箋を出した。私は卓の前にすわり、便箋を前にのべ、そしてじっと考えていた。

暫くして、便箋の第一行目に、私は、「遺書」と書いた。ペンを置いて、前の壁をじっと眺めた。

書くことが、何も思い浮ばなかった。書こうと思うことが沢山あるような気がしたが、いざ書き出そうとすると、どれもこれも下らなかった。誰に宛てるという遺書ではなかった。次第に腹が立って来た。私は立ち上って、それを破り捨てた。

壕を出、丘の上の方に登って行きながら、私は哀しくなつて来た。遺書を書いて、どうしようという気だろう。私は誰かに何かを訴えたかったのだ。しかし、何を私は訴えたかったのだろう。文字にすれば嘘になる。言葉以前の悲しみを、私は誰かに知って貰いたかったのだ。

(このことが、感傷の業と呼ばれようとも、その間だけでも救われるならそれでいいではないか)

道は尽き、林に入った。見張台に行く方向である。あの健康な展望が、私の心をまぎらして呉れるかも知れない。私は、空を仰いだ。入り組んだ梢を通す斑の光線が、私の顔に当たった。

ふと、聞き耳を立てた。降るような蟬の鳴声にまじって、微かに爆音に似た音が耳朶を打った。林のわきに走り出て、空を仰いだ。しんしんと深碧の光をたたえた大空の一角から、

空気を切る、金属性の鋭い音が落ちて来る。黒い点が見えた。見る見る中に大きくなり、飛行機の形となり、まっしぐらに此の方向に翔かけって来るらしかった。危険の予感が、私の心をかすめた。此処を、ねらって来るのではないか。林の中に走り入り、息をはずませながら、なお走った。恐怖をそそるような爆音が、加速度的に近づき、私の耳朶の中でふくれ上る。汗を流しながら、なお林の奥に駆け入ろうとした時、もはや爆音の烈しさで真上まで来ていたらしい飛行機から、突然足もすくむような激烈な音を立てて、機銃が打ち出された。思わずそこに打ちたおれ、手足を地面に伏せたとたん、飛行機の黒い大きい影が疾風のように地面をかすめ去った。

地面に頬をつけたまま、私は眼を堅くつむっていた。動悸が堪え難い程はげしかった。咽喉のどの処に、何かかたまりのようなものがつまって居るようであった。あえぎながら、私は眼を開いた。真昼の、土の臭いが鼻をうった。爆音はようやく遠ざかった。

のろのろと立ち上り、埃をはいた。手拭いで汗をふきながら、梢の間から空をすかして見た。飛行機は、もはや遠くに去ったらしかった。私は歩き出した。

此の前、見張台でグラマンを見たとき、私は狼狽ろうばいはしたけれど、恐いとは思わなかったのだ。今、私をとらえたあの不思議な恐怖は何であろう。齒の根も合わぬような、あのひどい畏おそれは、何であろう？

此の数日間の、死についての心の低迷が、ひびのように、私の心に傷をつけたに違いなかった。死について考えることが、生への執着を逆にあおっていたに違いなかったのだ。見張台に近い小径こみちを登りながら、私は、唇歪めて苦笑していた。

(遺書を書くという人間が、とかげのように臆病に、死ぬことから逃げ廻る)

自嘲が、苦々しく心に浮んで来た。

見張台に登りつめた。見渡しても、例の見張の男は見えないようであった。ふと栗の木のかげに、白いものが見えた。

(まだ、待避をしているのか?)

訝いぶかしく思いながら、近づいて行った。伏せた姿勢のまま、見張の男は、栗の木の陰に、私の登音あしおとも聞えないらしく、じっと動かなかった。地面に伸ばした両手が、何か不自然に曲

げられていた。土埃にまみれた半顔が、変に蒼白かった。私はぎよつとして、立ち止った。草の葉に染められた毒々しい血の色を見たのだ。総身に冷水を浴びせかけられたような気がして、私は凝然<sup>ぎょうぜん</sup>と立ちすくんだ。

「……………」

死体が僅かに身体をもたせかけた栗の木の、幹の中程に、今年初めてのつくつく法師が、地獄の使者のような不吉な韻律を響かせながら、静かに、執拗に鳴いていたのだ。突然焼けるような熱い涙が、私の臉のうちにあふれて来た。

（此の、つくつく法師の声を聞きながら、死んで行ったに違いない！）

片膝をついて、私は彼の身体を起そうとした。首が、力なく向きをかえた。無精鬚<sup>ぶしょうひげ</sup>をすこし伸ばし、閉じた目は見ちがえるほど窪んで見えた。弾丸は、額を貫いていた。流れた血の筋が、こめかみまでつづいていた。苦悶の色はなかった。薄く開いた唇から、汚れた歯が僅か見えた。不気味な重量感を腕に感じながら、私は手の甲で涙をふいた。

とうとう名前も、境遇も、生国も、何も聞かなかった。私にとって、行きずりの男に過ぎない筈であった。滅亡の美しさを説いたのも、此処で死ななければならぬことを自分に納得させる方途ではなかったのか。不吉な予感<sup>おび</sup>に脅えながら、自分の心に何度も滅亡の美を言い聞かせていたに相違ない。自分の死の予感を支える理由を、彼は苦勞して案出し、それを信じようと骨折ったにちがいがなかったのだ。

（滅亡が、何で美しくあり得よう）

私は歯ぎしりをしながら、死体を地面に寝せていた。生き抜こうという情熱を、何故捨てたのか。自分の心を言いくるめることによって、つくつく法師の声を聞きながら、此の男は安心してとうとう死んでしまったのだ。

風が吹いて、男の無精鬚はかすかにゆらいだ。死骸は、頬のあたりに微笑をうかべているように見えた。突然、親近の思いともつかぬ、嫌悪の感じともちがう、不思議な烈しい感情が、私の胸に湧き上った。私は、立ち上った。栗の木の下に横たわった死体の上に、私は私のよろめく影を見た。

大きな呼吸をしながら、私は電話機の方に歩いた。受話器を取った。声が、いきなり耳の

中に飛び込んで来た。

「グラマンはどうした。もう行ったのか」

「見張の兵は、死にました」

「え？ グラマンだ。何故早く通報しないか」

「——見張は、死にました」

私はそのまま受話器をかけた。

男の略帽を拾い上げた。死体の側にしゃがみ、それで顔をおおってやった。立ち上った。息を凝らしながら、身体をうごかし、執拗に鳴きつづけていたつくつく法師をぱつととらえた。規則正しい韻律が、私の掌の中で乱れた鳴声に変わった。物すごい速度で打ちふるう羽の感触が、汗ばんだ掌に熱いほど痛かった。生れたばかりの、ひよわな此の虫にも此のような力があるのか。残忍な嗜虐が、突然私をそそった。私は力をこめて掌の蟬を握りしめると、そのまま略服のポケットに突っ込んだ。蟬の体液が、掌に気味悪く拡がった。それに堪えながら、私は男の死体を見下していた。

丘の下からは、まだ誰も登って来なかった。軽い眩惑が、私の後頭部から、戦慄を伴って拡がって行った——

「やぶちゃん注…本「桜島」の一番のクライマックス・シークエンスである。前パートが八月九日夜で、この次のパートが八月十五日であるから、その間の八月十日から十四日までの閉区間が時制となるが、冒頭の洗濯する兵らのソ連参戦の会話と新聞云々の叙述からは、九日の翌日ではなく、八月十一日か十二日辺りのようには読め、さらに次の八月十五日のパートで「グラマンは、見張の男を殺した日を最後に、昨日も一昨日も姿を見せなかった」とあるから、十四日も十三日も外れ、そうしてその後に実は——「一昨日捕えたつくつく法師」——という描写が出る。従って、この日は昭和二〇（一九四五）年八月十二日であることが判るのである。私は高校教師時代、この箇所をセンター向けの現代文問題集の中に見出し、面白がって改変し、実力テストに出したという、実におぞましい記憶がある。だからここここでは、多くを注したくない。静かに読みたい。

「略服」前に注した軍服の下の事業服或いは作業服を指しているようである。彼は洗濯を終えて着替えていないので作業服であろう。」

玉音の放送があるから、非番直に全部聞くようにという命令は、その日の朝に出ていた。此の部隊に係る電報は一通り目を通していたから、その方面の事態には通じていたとは言え、桜島に来て以来、新聞も読まずラジオも聞かないから、私は浮世の感覚から遠くはなれていた。だから、玉音の放送ということがどういう意味を持つのか、はっきり判らなかつた。が、今までにないという意味から、重大なことらしいという事は想像出来た。不安が、私をいらだたせた。

午前中の当直であつたから、私は聞きに行けない。当直が終り、すぐ居住区に戻つて来た。放送は、山の下の広場であつた。そこに皆が集つて聞いている筈はずであつた。居住区で飯を食べ終つても、放送を聞きに行つた兵隊たちは帰つて来なかつた。

「ずいぶん長い放送だな」

私は葎たばこに火をつけ、壕の入口まで出て行つた。見下す湾には小波が立ち、つくつく法師があちらでもこちらでも鳴いていた。日ざしは暑かつたが、どことなく秋に向う気配があつた。目をむけると、三々五々、兵たちが居住区に戻つて来る。放送が終つたのらしかつた。

「何の放送だつた」

壕に入ろうとする若い兵隊をつかまえて、私は聞いた。

「ラジオが悪くて、聞えませんでした」

「雑音が入つて、全然聞き取れないのです」

も一人の兵隊が口をそえた。

「それにしても長かつたな」

「放送のあとで、隊長の話があつたのです」

「どういふ話なんだ」

「――皆、あまり働かないで、怠けたり、ずる寝をしたがる傾きがあるが、戦争に勝てば、いくらでも休めるじゃないか、奉公するのも、今をのぞいて何時奉公するんだ、と隊長は言われました」

「戦争に勝てば、と言ったのか」

「はい」

敬礼をして、兵隊は壕の中に入って行った。私は、葎を崖の下に捨てると、暗号室の方に歩き出した。

昨日、通信長が、暗号室に入って来て、暗号書の点検をし、こういう情勢で何時敵が上陸して来るか予測を許さんから、その時にあわてないように、不用の暗号書、あまり使わない暗号書は、焼いてしまったがよかろうと言った。今日午後、それを燃すことになった。私も、それに立会おうと思った。

暗号室に近づくと、二三人の兵隊が、それぞれ重そうな木箱をかついで来るのに出会った。

「暗号書かね」

「そうです」

私達は山の上につづく道を登って行った。私と同じ階級の電信の下士が、ガソリンの瓶びんを持って後につづくのと一緒に、私も肩をならべて山の方に引き返して歩いた。

林を隔てて、見張台と反対の斜面に一寸した窪みがあつて、兵隊はそこに木箱を下し、腰かけて汗をふいていた。私達が近づくと、それぞれ立ち上つて、箱から暗号書を出し始めた。皆赤い表紙の、大きいのも小さいのも、手摺てずれたのやまだ新しい暗号書が、窪みにうずたかく積まれた。

電信の下士が向う側に廻って、一面にガソリンをふりかけた。私がマッチをすった。青い焰が燃え、赤い表紙が生き物のように反そり始め、やがてそれが赤い焰になって行った。かすかな哀惜の思いに胸が詰まった。私は電信の下士官に話しかけた。

「今日の放送は、何だったのかな」

「さあ本土決戦の詔勅だろうと言うのだがね」

「誰が言ったんだね」

「電信長もそう言ったし、吉良兵曹長もそんなことを言った」

私は焰を眺めていた。熱気が風の具合でときどき顔にあたった。厚い暗号書は燃え切れずにくすぶったと思うと、また頁がめくられて新しく燃え上った。煙がうすく、風にしたがって空を流れた。布地の燃える臭いが、そこらにただよっていた。時々、何か燃えはじける音がして、火の粉がぱつと散った。

「いよいよ上陸して来るかな」

棒で暗号書をつつき、かき寄せると、また新しい焰が起った。煙がさらにかたまつて上った。

「あまり煙を出すと、グラマンが来たとき困るぞ」

「今日も来ないよ。昨日も来なかったから」

そう言えば、グラマンは、見張の男を殺した日を最後に、昨日も一昨日も姿を見せなかった。飛行機が来ないということは、上陸の期がいよいよ迫つて来ているせいではないかと思つた。散発的な襲撃を止めて、大挙行動する整備の状態にあるのではないか。

(上陸地点が、吹上浜にしる、宮崎海岸にしる、どの途<sup>みち</sup>此処は退路を断たれる)

山の中に逃げ込むとしても、幅の薄い山なみで逃げ終<sup>おそ</sup>せそうにもない。ことに、此処は水上特攻基地だから、震洋艇か回天が再び還らぬ出発した後は、もはや任務は無い筈であつた。小銃すら持たない部隊員たちに、その時どんな命令が出るのだろうか。

ぼんやり焰の色を見ていた。焰は、真昼の光の中にあつて、透明に見えた。山の上は、しんと静かであつた。物の爆<sup>は</sup>ぜる音だけが、静かさを破つた。兵隊が話し合う声が、変に遠くに聞えた。なびく煙の向うに、桜島岳が巨人のようにそびえていた。その山の形を眺めているうちに、静かな安らぎが私の心に湧き上つて来た。

退路を断たれようとも、それでいいではないか。何も考えることは止<sup>し</sup>そう。従<sup>しよ</sup>容<sup>う</sup>とは死ねないにしても、私は私らしい死に方をしよう。私の死骸が埋まって、無機物になってしまったあとで、日本にどんなことが起り、どんな風に動いて行くか、それはもはや私とは関係のないことだ。あわてず、落着いて、死ぬ迄は生きて行こう。――

「村上兵曹。この木箱も燃えますか」

「うん。燃してしまえ」

木箱は音を立ててこわされ、次々に投げ込まれた。新しい材料を得て、焰は飴のように粘つくく燃え上った。何気なく手をポケットに入れた。何かがさがさした小さなものが手指に触れた。つかんで、取り出した。一昨昨日捕えたつくつく法師の死骸であった。すっかり乾いていて、羽は片方もげていた。私の掌の上で軋がすと、がさがさと鳴った。他の者に見られないようにそっと、私はそれを火の中に投げこんだ。燃え焦れた暗号書の灰の中に、それは見えなくなった。

死ぬ瞬間、人間は自分の一生のことを全部憶い出すとか、肉体は死んでも脳髄は数秒間生きていて劇烈な苦痛を味わっているとか、死んだこともない人間によって作られた伝説は、果して本当であろうか。見張の男の死貌はまことにおだやかであったけれども、人間のあらゆる秘密を解き得て死んで行った者の貌ではなかった。平凡な、もはや兵隊でない市井人の死貌であった。私が抱き起したとき見た、着ている服の襟の汚れを、何故か私はしみじみ憶い出していた。――

夕方になって、暗号書は燃え尽きた。灰をたたいて、燃え残りがないかを確かめて、私等は戻って来た。

居住区に入ると、奥に吉良兵曹長が腰をおろしていた。片手に軍刀を支え、湯呑みから何かのんでいた。アルコールに水を割ったものらしかった。かすかにその匂いがした。

「焼いてしまったか」

「もう、すみました」

私は手に持った上衣を寝台にかけ、卓の方に近づいた。

「兵隊」

衣囊の整理をしていたらしい兵隊が、急いで吉良兵曹長のところに来た。

「暗号室に行つてな、今日の御放送の電報が来ていないか聞いて来い」

兵は敬礼をすると、急ぎ足で壕を出て行った。他に兵は誰も居なかった。壕内は、私と兵曹長だけだった。皆、相変らず穴掘りに行ったのらしかった。私は吉良兵曹長に向き合って腰かけた。吉良兵曹長は例の眼で私を見返した。しゃがれた声で言った。

「いよいよ上陸して来るぞ。村上兵曹」

「今日の放送が、それですか」

「それは、判らん。此の二三日、敵情の動きがない。大規模の作戦を企んでいる証拠だ。覚悟は出来ているだろうな」

嘲けるような笑い声を立てた。

「もし、上陸して来れば——此の部隊はどうなりますか」

「勿論、大挙出動する」

「いや、特攻隊は別にして、残った設営の兵や通信科は」

俄かに不機嫌な表情になって、私の顔を見て、湯呑みをぐっと飲みほした。

「戦うよ」

「武器は、どうするんです。しかも、補充兵や国民兵の四十以上のものが多いのに——」

「補充兵も、戦う！」

たたきつけるような口調であった。

「竹槍がある」

「訓練はしてあるのですか」

私を見る吉良兵曹長の眼に、突然兇暴な光が充ちあふれた。臆してはならぬ。自然に振舞おう。私はそう思い、吉良兵曹長の眼を見返した。

「訓練はいらん。体当りで行くんだ。村上兵曹、水上特攻基地に身を置きながら、その精神が判らんのか」

「何時出来るか判らない穴を掘らせる代りに訓練をしたらどうかと、私は思います」

全身が熱くなるような気になって、私も言葉に力が入った。吉良兵曹長は、すつくと立ち上った。卓を隔てて、私にのしかかるようにして言った。

「俺の方針に、絶対に口を出させぬ。村上。余計なことをしゃべるな」

言い知れぬ程深い悲しみが、俄かに私を襲った。心の中の何かが、くずれ落ちて行くのを感じながら、私は身体を反らせ、じつと吉良兵曹長の眼に見入った。吉良兵曹長の声が、がつと落ちかかって来た。

「敵が上陸したら、勝つと思うか」

「それは、わかりません」

「勝つと思うか」

「勝つかも知れません。しかし——」

「しかし？」

「ルソンでも日本は負けました。沖繩も玉砕しました。勝つか負けるかは、その時にならねばわからない——」

「よし！」

立ち断きるように吉良兵曹長はさげんだ。獣のさげぶような声であつた。硝子玉ガラスだまのように気味悪く光る瞳を、真正面に私に据えた。

「おれはな、敵が上陸して来たら、此の軍刀で——」

片手で烈しく柄つかがしら頭をたたいた。

「卑怯未練な奴をひとりひとり切つて廻る。村上。片っぱしからそんな奴をたたつ切つてやるぞ。判ったか。村上」

思わず、私も立ち上ろうとしたとたん、壕の入口から先刻の兵が影のように入つて来た。

つかつかと私達の処に近づいた。両足をそろえると、首を反そらしてきちんと敬礼した。はっきりした口調で言った。

「昼のラジオは、終戦の御詔勅であります」

「なに！」

卓に手をついて腰を浮かせながら、私は思わずさげんだ。

「戦争が、終わったという御詔勅であります」

異常な戦慄が、頭の上から手足の先まで奔はしった。私は卓を支える右手が、ぶるぶるとふるえ出すのを感じた。私は振り返って、吉良兵曹長の顔を見た。表情を失った彼の顔で、唇が何か言おうとして少しふるえたのを私は見た。何も言わなかった。そのままくずれるように腰をおろした。やせた頬のあたりに、私は、明かに涙の玉が流れ落ちるのをはっきり見た。

私は兵の方にむきなおった。

「よし。すぐ暗号室に行く。お前は先に行け」

私は卓をはなれた。興奮のため、足がよろめくようであった。解明出来ぬほどの複雑な思念が、胸一ぱいに拡がっては消えた。上衣を掛けた寝台の方に歩きかけながら、私は影のようなものを背後に感じて振り返った。

乏しい電灯の光の下、木目の荒れた卓を前にし、吉良兵曹長は軍刀を支えたまま、虚ろな眼を凝然と壁にそそいでいた。卓の上には湯呑みが空のまま、しんと静まりかえっていた。奥の送信機室は、そのまま薄暗がりに消えていた。

私はむきなおり、寝台の所に来た。上衣を着ようと、取りおろした。何か得体の知れぬ、不思議なものが、再び私の背に迫るような気がした。思わず振り返った。

先刻の姿勢のまま、吉良兵曹長は動かなかった。天井を走る電線、卓上の湯呑み、うす汚れた壁。何もかも先刻の風景と変らなかつた。私は上衣を肩にかけ、出口の方に歩き出そうとした。手を通し、ぼたんを一つ一つかけながら、異常な気配が突然私の胸をおびやかすのを感じた。私は寝台のへりをつかんだまま三度ふり返った。

卓の前で、腰掛けたまま、吉良兵曹長は軍刀を抜き放っていた。刀身を顔に近づけた。乏しい光を集めて、分厚な刀身は、ざらりと光った。憑かれた者のように、吉良兵曹長は、刀身に見入っていた。不思議な殺気が彼の全身を包んでいた。彼の、少し曲げた背に、飢えた野獣のような眼に、此の世のものでない兇暴な意志を私は見た。寝台に身体をもたせたまま、私は目を据えていた。不思議な感動が、私の全身をふるわせていた。膝頭が互いにふれ合つて、微かな音を立てるのがはつきり判った。眼を大きく見開いたまま、血も凍るような不気味な時間が過ぎた。

吉良兵曹長の姿勢が動いた。刀身は妖しく光を放ちながら、彼の手にしたがって、さやに収められた。軍刀のつばがさやに当って、かたいはつきりした音を立てたのを私は聞いた。その音は、私の心の奥底まで沁みわたった。吉良兵曹長は軍刀を持ちなおし、立ち上りながら、私の方を見た。そして沈痛な声で低く私に言った。そのままの姿勢で、私はその言葉を聞いた。

「村上兵曹。俺も暗号室に行こう」

「やぶちゃん注：「玉音」天皇の肉声の意であるがここは玉音放送で、昭和二〇（一九四五）年八月十五日正午に社団法人「日本放送協会」（現在のNHKラジオ第一放送）から放送された当時の今上天皇（昭和天皇・裕仁）による終戦の詔書。[ウィキの「玉音放送」](#)によれば、正午以降に玉音盤を再生した狭義の玉音放送は約五分であったが、その前後に行われた終戦関連ニュース放送等（詔書の前後には「君が代奏楽」もある）を含む放送時間は約三十七分半もあつたとある。主人公村上兵曹は当直であつたためにこれを聴いていない。従つて、その詔書をここに電子化する必要を私は認めない。リンク先にあるのでそれを参照されたい。

「小銃」ライフル銃。

「従容」しよつよう ゆつたりと落ち着いている様子。

「ルソンでも日本は負けました」ルソン島（フィリピン語：Luzon）は現在のフィリピン共和国のフィリピン諸島の北に位置する最も面積の大きな島。首都マニラやケソンを擁する現在のフィリピンの政治・経済でも最も重要な位置を占める島である。当時のフィリピンアメリカ合衆国の保護国でフィリピン自治領であつたが、昭和一六（一九四二）年十二月、アメリカ合衆国軍との間に開戦した大日本帝国軍がアメリカ合衆国軍を放逐してマニラ市に上陸、アメリカ合衆国陸軍司令官ダグラス・マッカーサーはオーストラリアに逃亡、大日本帝国陸軍は翌昭和十七年上半年中にフィリピン全土を占領した。その後、昭和一九（一九四四）年から昭和二〇（一九四五）年にアメリカ軍を中心とする連合国軍はフィリピン奪回を目指し、防衛する日本軍との間で戦闘が行われた。日本軍は「捷一号作戦」と呼ばれる計画に基づいて防衛を試みたが、連合軍が勝利を収めた。その「フィリピンの戦い」中でもここで言うのは「ルソン島の戦い」で、昭和二〇（一九四五）年一月六日から終戦までフィリピン・ルソン島で行われた日本軍（第十四方面軍：司令官山下奉文大将）とアメリカ軍の陸上戦闘のことを指している。日本の敗戦まで戦闘は続いたものの、首都マニラは同年三月にアメリカ軍が制圧しており、村上兵曹のこの言葉はそのマニラ陥落時を指している（以上は複数のウィキペディアの記載を参考にした）。

壕を出ると、夕焼が明るく海に映っていた。道は色褪せかけた黄昏たそがれを貫いていた。吉良兵曹長が先に立った。崖の上に、落日に染められた桜島岳があった。私が歩くに従って、樹々に見え隠れした、赤と青との濃淡に染められた山肌は、天上の美しさであった。石塊道いしうみちを、吉良兵曹長に遅れまいと急ぎながら、突然臉を焼くような熱い涙が、私の眼から流れ出た。拭いても拭いても、それはとめどなくしたり落ちた。風景が涙の中で、歪みながら分裂した。私は齒を食いしぼり、こみあげて来る嗚咽おえつを押えながら歩いた。頭の中に色んなものが入り乱れて、何が何だかはつきり判らなかった。悲しいのか、それも判らなかった。ただ涙だけが、次から次へ、臉にあふれた。掌で顔をおおい、私はよろめきながら、坂道を一步一步下って行った。

「やぶちゃん注：前パートに続き、昭和二〇（一九四五）年八月十五日の夕刻の桜島がコロダのロケーションである。梅崎春生にはこの翌日八月十六日の日記が底本第七巻に載る。解題を見ると、実際にはもつとあるようであるが、この敗戦の年の日記は七月二十三日・八月二日・八月九日とこの日の四日分しか掲載されていない（全公開が待たれる）。私は既に八月二日と八月九日の分は本作の注で既に電子化しており、七月二十三日分は『梅崎春生「幻化」附やぶちゃん注（7）』の注に電子化してある。以下、八月十六日を引く。この四日分が現在知られている彼の昭和二〇年の日記の総てである。今まで通り、これに限っては恣意的に漢字を正字化して歴史的仮名遣に改めたので注意されたい。但し、「ソ聯」の「聯」の表記は原文のママである。

\*

八月十六日

十二月八日が突然来たように、八月十五日も突然やつて来た。

ソ聯の参戦。そして日ならずして昨日、英米ソ支四國宣言を受諾する旨の御宣言を受諾す

る旨の御宣詔。

原子爆弾。

昨日は、朝五時に起きて、下の濱辺で検便があつた。

朝食後受診。依然としてカユ食。

夜九時から當直に行つた折、着信控をひらいて見て、停戦の事を知り、目をうたがふ。これから先どうなるのか。

領土のこと。軍隊のこと。賠償のこと。

又、ひいて、國民生活のことなど。いろいろ考へ、眠れず。

\*

日記中の「十二月八日」は謂わずもがな、真珠湾攻撃（日本時間昭和一六（一九四一）年十二月八日未明／ハワイ時間十二月七日）と、開戦の詔勅「米國及英國ニ對スル宣戰ノ詔書」を指す。「支」は、この時は未だ中華民國（中華人民共和国はこの四年後の一九四九年十月一日建国）。文面から察するにこの時、春生はかなり重い消化器不調を訴えていたようである。「原子爆弾」この時は流石に長崎に二つ目が投下されたことを知っていたであろう。所謂「玉音」、「大東亜戦争終結ノ詔書」にも「敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル」とも既にあつた以上、春生が長崎原爆投下をこの時点で知らなかったとは考えられない。「夜九時」当初、『日記の書き振りから見て、これは前日十五日の九時ではなく、この十六日のことであろう』と注していたが、後の梅崎春生の「[桜島の八月十五日](#)」によって、これは敗戦当日十五日のことであることが判明した。

※ ※ ※

最後に私の「桜島」小攷を附す。

芥川龍之介は「[或舊友へ送る手記](#)」（同文は死の当日の昭和二（一九二七）年七月二十四日の夜九時、自宅近くの貸席「竹村」で久米正雄によって報道機関に発表され、死の翌日の二十五日の『東京日日新聞』朝刊に掲載されたもの。リンク先は私の古いテキスト）で自死

の理由を『何か僕の将来に對する唯ぼんやりした不安である』と述べている。彼の自殺の動機は、私は半分が極めてプライベートなものであり、後の半分は当時の日本の軍靴の音から恐懼した作家・文化人への弾圧の予兆、その果てに措定した〈生きながらの死〉のような地獄であったと考えている。

龍之介の作家としての自死という決着は、当時十二歳で福岡県中学修猷館の一年生であった梅崎春生には強い衝撃を与えたに違いない（彼が詩作に興味を持ったのは十七歳以降、小説「地図」を発表したのは昭和一一（一九三六）年六月二十一歳の時ではある）。

戦後、早くもこの敗戦の年の十二月に本作「桜島」を発表した以上、梅崎春生は、この「桜島」を、戦後に作家として立つための、何ものにも代えがたい試金石と考えていたに違いない。その時、梅崎春生の中には、芥川龍之介が死を以って拒絶したところの戦前戦中の軍国主義という仮想文化への決別の意識が強く働いていたと考えてよい。龍之介が「死」によって「ノン！」としたところのそれを、春生は生きねばならなかったし、実際に、生き抜いたのであった。そうして、そのように生きた結果として、国家のために生きることの虚しさとも馬鹿馬鹿しさを骨身、否、魂と肉と骨に沁み入るほどに味わったのである。即ちそれは、「ぼんやりした不安」が明確な悪鬼として現前し、春生を使役し、その魂を石臼で微塵に挽いてしまった。そうしてその終末期にあつて春生が末期の眼で見、そして得たものとは、まさに村上兵曹が遂に述懐する如く、

「私は、何の為に生きて来たのだろう？」 「何の為に？」

「私とは、何だろう？」 「生れて三十年間、言わば私は、私というものを知らうとして生きて来た。ある時は、自分を凡俗より高いものに自惚れて見たり、ある時は取るに足らぬものと卑しめてみたり、その間に起伏する悲喜を生活として来た。もはや眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間で、見栄も強がりも捨てた私が、どのような態度を取るか？」 「私という個体の滅亡をたくらんで、鋼鉄の銃剣が私の身体に擬せられた瞬間、私は逃げるだろうか？」 「這い伏して助命を乞うだろうか？」 「あるいは一身の矜持を賭けて、戦うだろうか？」

という〈不条理な現実〉に強引に癒着させられて離れられなくなってしまった自身の肉と魂について、根本的なひりつくような疑義であったのだ。そうして、

「それは、その「、」もはや眼前に迫る死のぎりぎりの」「瞬間にのみ、判ることであった。三十年の探究も、此の瞬間に明白になるであろう。私にとって、敵よりも、此の瞬間に近づぐことがこわかった」

という「一箇の自己へのレゾン・ドートル (raison d'être : 自己証明) の掻き塗りたくなるような不安の声」だったのであり、それはまた同時に、あの哀れな枕崎の女郎の生々しい肉声、「ねえ、死ぬのね。どうやって死ぬの。よう。教えてよ。どんな死に方をするの」

と響き合うものである。しかもそれは、見張り兵の惨めな亡骸を前に村上兵曹が心の内で、「滅亡が、何で美しくあり得よう！」

と叫んだところの「ノーンー」の声でしかなかった／であった」のである。

それは結果して、虚構としての糜爛した繁栄の文化の蔓延する／たかが／されど／の戦後世界を――そうした致命的な「死」のトラウマ(心傷) というステイグマ(聖痕) を十字架として背負って、「醫」のように生きる／ことになる／生きねばならないと決意する、孤独な魂の――大叫喚地獄での罅すきとなつてゆくのである。

因みに言っておくが、「虚構としての」「文化」というのは、どこぞの戦後の糞評論家の言葉を引いたのではない。梅崎春生の昭和二〇(一九四五)年七月二十三日に桜島の海軍秘密基地で書いた日記に出てくる言葉なのだ(その七月二十三日分全文は『梅崎春生「幻化」[やぶちゃん注](#)(7)』にある)。その中で梅崎春生は戦後をこう「予言」しているのである。

\*

都市は焼かれ、その廢墟の中から、日本が新しい文化を産み出せるかと言ふと、それは判らない。

しかし、たとへば東京、江戸からのこる狭苦しい低徊的な習俗が亡びただけでもさばさばする。

平和が来て、先づ外国映畫が來れば、又、日本人は劇場を幾重にも取圍むだらうとふと考へた。

何か、明治以來の宿命のやうなものが日本人の胸に巣くつてゐる。戦争に勝つても、此の影は歴然としてつきまとふだらう。それは、つきつめれば東西文化の本質といふ點まで行つ

てしまふ。

極言すれば日本には文化といふものはなかつたのだ。

(奈良時代や平安時代、そのやうな古代をのぞいて) あるのは、習俗と風習にすぎない。新しい文化を産み出さねばならぬ。

\*

禪の公案とは問いであつて、答えではない。しかもその公案の答えは、センター試験の国語の小説問題の選択肢の中の、唯一の正答として数十字で示し得るやうな、チンケな「主題」などという事大主義的詐術とは全く以つて無縁である(ああいったものを選ぶように現場で指導する国語教師というのは、自分に対して永劫、鳴らせられ続けられる禪師の鈴りんの音をこそ恐懼せねばならぬと言つておく)。

梅崎春生の「桜島」が示すものも、みじめな生き物としての人間が、そうした「死」|| 「生」|| 「性」というものが根源的に持つ謎——意義の不可知性や不条理性——に対する烈しい違和感の「ノン！」を孕んだ疑問を投げつける(公案)なのであつて、禪機を示す悟達の「暗号」たる胡散臭い模範(解答)|| 国語授業の大団円たる「主題」などではないのである。

しかし、それは対象が虚構であり、不可知であり、不条理である以上、実体を論理的に摺むことは当然、徒労に終わることは眼に見えている。この梅崎春生自身が投げた(公案)は禪問答としても、酒のCMで宇野重吉と石原裕次郎が如何にもなクサイ演技で掛け合うぐらいしか聴いたことがないくらい、やりにくい公案、哲学が解き明かそうとしてやつきになつてきた永遠の課題である。古代ギリシャの昔から今に至るまで、それを解くべく脳味噌を絞つた哲人は数知れぬが、しかも未だに誰一人としてその答えを出てはいない。

それは春生自身も判つていた。しかしそれでも敢えて彼は、それを、この日本の戦後に生きる／生きねばならぬ作家として、問い続けることに決したのである。

さても「影」である。

『すると墓地裏の八幡坂の下に箱車を引いた男が一人、楯棒に手をかけて休んでゐた。箱車はちよつと眺めた所、肉屋の車に近いものだった。が、側へ寄つて見ると、横に廣いあと口に東京朧衣會社と書いたものだった。僕は後から聲をかけた後、ぐんぐんその車を押してやつた。それは多少押してやるのに穢い氣もしたのに違ひなかつた。しかし力を出すだけでも助かる氣もしたのに違ひなかつた。

北風は長い坂の上から時々まっ直に吹き下ろして來た。墓地の樹木もその度にさあつと葉の落ちた梢を鳴らした。僕はかう言ふ薄暗がりの中に妙な興奮を感じながら、まるで僕自身と闘ふやうに一心に箱車を押しつづけて行つた。……』(芥川龍之介「年末の一日」終章。リンク先は私の古い電子テキスト。下線は私が附したもの。以下同じ)

『ラ・モオルは、——死と云ふ佛蘭西語は忽ち僕を不安にした。死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかつた。けれども僕は不安の中にも何か可笑しさを感じてゐた。のみならずいつか微笑してゐた。この可笑しさは何の爲に起るか?——それは僕自身にもわからなかつた。僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向ひ合つた。僕の影も勿論微笑してゐた。僕はこの影を見つめてゐるうちに第二の僕のことを思ひ出した。第二の僕、——獨逸人の所謂 Doppelgänger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかつた。しかし亞米利加の映畫俳優になつたK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけてゐた。(僕は突然K君の夫人に「先達はつい御挨拶もしませんで」と言はれ、當惑したことを覚えてゐる。)それからもう故人になつた或隻脚の翻譯家もやはり銀座の或煙草屋に第二の僕を見かけてゐた。死は或は僕よりも第二の僕に來るのかも知れなかつた。若し又僕に來たとしても、——僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ歸つて行つた。』(芥川龍之介「齒車」一四 まだ?)  
より)

『松林はひつそりと枝をかはしたまま、丁度細かい切り硝子を透かして見るやうになりはじめた。僕は動悸の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まらうとした。けれども誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた。……』(芥川龍之介「齒車」一六 飛

行機」より)

梅崎春生の「桜島」の、このエンディングにある映像を今一度、あなたの心のスクリーンに映して貰いたい。私得意のシナリオ化を試してみる。

\*

○桜島方崎の海軍秘密基地の丘の最上層の壕の入口

――壕から出てくる吉良兵曹長。

――少し遅れて兵曹長の後について出てくる村上兵曹。

――明るく海に夕焼が映っている。山道は色褪せかけた黄昏を貫いている。

――ジャリ！ ジャリ！ と音を立てて、先に立って、道をもくもくと下ってゆく吉良兵曹長。

――崖の上の、落日に染められた桜島岳。

――ジャリ！ ジャリ！ と歩く村上兵曹。

――彼が歩くに従い、樹々に見え隠れする赤と青との濃淡に染められた、天上の美しさに見紛う山肌。

――ずんずんと、しっかりした足取りで道を下ってゆく吉良兵曹長。

――石ころ道を吉良兵曹長に遅れまいと急ぐ村上兵曹。

ト。

――突然、<sup>たが</sup> 顔を焼くような熱い涙を流しだす村上兵曹。(クロス・アップ)

――拭いても拭いても、とめどなくしたたり落ちる涙。(クロス・アップ)

――涙の中で歪みながら分裂する風景。(村上兵曹の視線で)

――歯を食いしばり、こみあげて来る嗚咽を押えながら歩く村上兵曹(頭の中に色んなものが入り乱れて、何が何だかはっきり判らない、悲しいのか、それも判らない、ただ涙だけが次から次へ臉にあふれるという感じで)。

――掌で顔をおおう村上兵曹。(バスト・ショット)

――なおも、しっかりした足取りで道を下ってゆく吉良兵曹長の後ろ姿。

——よろめきながら、吉良兵曹長の後ろを一步一步下って行く村上兵曹。(F・O)

\*

ここで主人公村上兵曹は、

初対面から「苦手!」と思わず叫んだ、「彼を憎」んでいるはずの、「背の高い」前を行く「吉良兵曹長に遅れまいと急」ぐ「影」となっている

でことに気づく。「上官だから遅れまいと急」ぐのでは——ない。ここでは実は、

——本来、主人公村上兵曹のトリック・スターであったと思われた吉良兵曹長の、その「影」のはずの男の——まさに、名実ともに——黄昏の中の「影」——となって村上兵曹は坂を下って行く——

のである。

ヴィトゲンシュタインが言うように——鏡像が我々を説明するのではない。我々が鏡像を説明する——かのように。

村上兵曹＝梅崎春生は「影」としての吉良兵曹長にこそ、その現象的内実の一面が隠されている

と読むべきではあるまいか？

——読者である我々は——このリベラルでアンニュイな村上兵曹や——シニクでクールな心理分析を見せる梅崎春生である以前に——「残忍」「凶暴」な表情をしばしば見せ、「鬼」を内に巣くわしている、しかし、いざとなると「いじめられた子供のように切ない表情」のようなものを見せる凶悪のトリック・スター——吉良兵曹長でもある——  
のではあるまいか？

そうして、そうであるように、梅崎春生自身も、村上兵曹の鏡像なのである。

虚構としての糜爛した繁栄の文化の蔓延する戦後世界を、致命的な「死」のトラウマというステイグマを十字架として背負って「影」のように生きることを決意した孤独な魂は——  
当然——擦り切れざるを得ない。

魂が擦り切れれば自己同一性を失う。

致命的にアイデンティティを見失えば、それは、今の「文明」社会に於いては「精神疾患」のレッテルを貼られるしかない。

そうである。

それは梅崎春生の遺作「幻化」の主人公久住五郎に他ならぬ。

昭和二十年十二月に突如、小説中のキャラクターとして登場した小説「桜島」の「村上兵曹」は、それより後、二十年の間、「戦後の文学」という〈小説〉の主要登場人物の一人である「小説家梅崎春生」となつて示現し続けた末に、昭和四十年二月、小説「幻化」の、精神を病んだ主人公「久住五郎」という本地ほんぢとして顕現したのであった。

そうして、

——「幻化」は作家梅崎春生の「死」ではなく、第二の「生」の再生第一作であつた

のである！ となるはずだったのである！

「幻化」のエンディングを見よ！

死を賭けて阿蘇の噴火口を一周する丹尾に、五郎は胸の中で叫ぶ！

「しっかり歩け。元気出して歩け！」

……しかし、梅崎春生自身の肉体は皮肉にも、そこで「生」を停止したのであった。……」